純ちゃんのコーナー
（ロータリー３分間情報）
Part Ⅸ

目　　次

１.『永遠の課題・職業倫理』その１０……２
２.『永遠の課題・職業倫理』その１１……３
３.『永遠の課題・職業倫理』その１２……４
４.『永遠の課題・職業倫理』その１３……５
５.『永遠の課題・職業倫理』その１４……６
６.『永遠の課題・職業倫理』その１５……７
７.『永遠の課題・職業倫理』その１６……８
８.『永遠の課題・職業倫理』その１７……９
９.『永遠の課題・職業倫理』その１８……10
10.『永遠の課題・職業倫理』その１９……11
11.『永遠の課題・職業倫理』その２０……12
12.『国旗掲揚・国歌斉唱の慣例』……13
13.『フリーメイスンについて』その１……14
14.『フリーメイスンについて』その２……15
15.『日満ロータリークラブ連合会』その１……16
16.『日満ロータリークラブ連合会』その２……17
17.『日満ロータリークラブ連合会』その３……18
18.『日満ロータリークラブ連合会』その４……19
19.『ロータリーの日本化』その１……20
20.『ロータリーの日本化』その２……21
21.『ロータリーの日本化』その３……22
22.『日本ロータリーの精神伝統』その１……23
23.『日本ロータリーの精神伝統』その２……24
24.『クラブ例会のもつ意味について』その１……25
25.『クラブ例会のもつ意味について』その２……26
26.「栗を拾った話ー石門心学に学ぶー」伊丹ＲＣ卓話……27

序にかえて

竹中秀夫会員の発案で始まりました３分間情報『純ちゃんのコーナー』は、昨年度もロータリー情報委員長竹中秀夫会員からの御依頼で一年間書き続けて参りましたが、既に満９年の歳月を閲することになりました。

人間、歳をとると、新しい情報が来たり、新しい勉強をしたりして、今まで自分の考えていたことが間違っていたことに気づきます。そして、歳をとって色々な情報が蓄積されているために新しい情報に対する理解度が早く、自分の目がよく見えてくるようにも思うのであります。

この情報の蓄積ということについては、ロータリーの例会をはじめ地区大会、IMその他あらゆるロータリーの会合では、職業の違う沢山の人達と出会うことが出来るのであります。したがって、様々な情報を授かることが出来、色々なことを学ぶことが出来るわけであります。したがって、ロータリーというところは、将に人材の宝庫であり、私達が色々な人と出会うことが出来る貴重な場でもあります。

ロータリーはこれを「出会いの保障」といって、ロータリーの綱領の第１に「心の友を得て、もって奉仕の契機となすべきこと」と規定しています。この出会いを保障している場がクラブ例会を始めロータリーの色々の会合であります。したがって、ロータリーで自分を少しでも高めようとしているロータリアンにとっては、クラブの例会は大変貴重な場なのであります。したがって、クラブとしても、ロータリアンがロータリーを理解し、それを実践することに役立つ良質な情報を積極的に提供するべきでありますが、これが意外に難しいのであります。毎年のことながら、例会での３分間スピーチで果たして十分なロータリー情報を説き得たか否か、内心忸怩たる思いであります。しかし、今後も出来る限り良質な情報をロータリアンの皆様に提供出来るよう努めたいと思っています。

何はともあれ、昨年度は、『純ちゃんのコーナー』を２５回に亘って話しました。しかし、年間の卓話数に比べると若干少ないように思いますので、今回はその話に加えて、私の今年の３月４日の伊丹クラブ卓話「栗を拾った話ー石門心学に学ぶー」を巻末に付け加えさせて頂きました。

誠に拙いものではございますが御叱正を賜りますれば幸甚に存じます。

そして、この一年間、飽きもせず私の話を聴いて下さったクラブの皆様方の友情に心から感謝を申し上げますと共に、このパンフレット発刊に御尽力賜りました竹中秀夫会員はじめクラブ事務局の皆様に心からなる感謝を捧げ擱筆します。有り難うございました。

2010年８月　　深川純一

1.『永遠の課題・職業倫理』その１０

前回は、日本が世界第二の経済大国を築き上げた原因は何かという話を致しました。では、現在のアメリカはどうでしょうか。確かに大国ではありますが国家の経済力としては、もう往年の力を持っていません。つい先日もご承知のとおり、自動車王国アメリカの象徴とも謂うべきＧＭが連邦破産法１１条の申請に踏みきりました。その結果、ＧＭの株式の７０％を国が所有することになりました。これはまさに企業の国有化であり、アメリカの自由主義の崩壊と謂わなければなりません。

このようになった原因は一体何処にあるのか。と言いますと、一つの原因としては、アメリカが自由競争をあまりにも尊重しすぎて、職業倫理を中核とする職人技術の育成に失敗したことにあります。

ところが、日本には当時まだ職人技術が生きていました。したがって、日本の車の優秀性が自動車王国アメリカの車を凌駕してしまったのであります。

現に、ＧＭの社長の娘は、もう一昔前から日本の車ばかり乗っていたのであります。

つい先日、５月２９日の日本経済新聞の春秋というコラムにも、これを裏付ける記事が載っていました。その全文を引用しますと、「日米貿易摩擦が激しかったクリントン政権時代、ワシントンの政府職員は、自家用の車を選ぶのに苦心していました。何故かと言うと、拳を上げて日本叩きをする立場で日本車を乗り回していては格好が付かないからであります。役所の駐車場は米国車ばかりでありました。

当時の橋本龍太郎通産相と対決した米国通商代表部（ＵＳＴＲ）のカンター代表の車は、お世辞にも美しいとは言えない古い型のＧＭ車でありました。冗談のつもりで『燃費はどうですか』と聞くと、真顔で『物凄くいい』と言い返されたという取材の思い出があります。これは国民が団結して自動車産業を支える空気が米国中に満ち満ちていたのであります。

あれから１５年。米国人がデトロイトを見る目は一変しました。来日した米国通商代表部（ＵＳＴＲ）の元高官から、こんな打ち明け話を聞きました。

『対日交渉のさなかに家族がホンダの新型車を欲しがって困った。オハイオ州で現地生産していると判ったので、これは米国製だと自分に言い聞かせて買った』

と言います。その愛車も買い換えの時期が来ました。

今、彼らが欲しいのは、ハイブリット車。

現地生産を待てずに、日本からの輸入車を買ったそうであります。冗談で元幹部に『それは裏切りではないか』と訊くと、『ＧＭの方が我々を裏切ったのだ』と真顔で答えが返ってきたのであります。

これは一体何を意味するか。ＧＭ幹部が驕り高ぶって高給を取り１５年間も自己改革を怠れば、苦しむのが当然だというのであります。厳しい貿易戦争を生き抜いた戦士ほど、今日のデトロイトには厳しいのであります」

このように致しまして、職人技術というものは単なる技術だけではなくて、技術の根底に倫理というものを一つ持っています。

この倫理あるが故に日本の企業は、アメリカの経済社会を席捲しているのであります。

2.『永遠の課題・職業倫理』その１１

前回は、職人技術というものは、単なる技術だけではなく、技術の根底に倫理というものを一つ持っているが故に、日本の企業がアメリカの経済社会を席捲しているということを申し上げました。

そこで、この職業倫理の根底にあるものは、相手の身になって考えること、つまりお客様の身になって考える、使う人の身になってものを作る、という全ての人に対する思いやりの心であります。この心がなければ、企業は競争社会を生き抜くことが出来ないのであります。

レイモンド・チャンドラーという人が言ったように、企業は逞しくなければ今日の厳しい職業社会を生き抜いて行くことは出来ません。と同時に、優しくなければ、即ち相手に対する思いやりの心、即ち、愛とか倫理がなければ、企業は生きる資格がないのであります。

例えば、日本の車は、アメリカへ輸出する場合には使う人の身になって左ハンドルに変えています。しかし、アメリカの車は、日本へ輸出する場合も左ハンドルのままであります。これでは販売競争には勝てません。しかも、その他の点でも職人技術がありませんから品質も劣る、とあっては、アメリカ車に勝ち目はありません。

アメリカの経済社会は、市場原理主義によって自由競争、効率一本槍の社会となりました。労働者は簡単にリストラされる。したがって、労働者は、こんな企業に忠誠が誓えるかといって１ペニーでも高いところへ条件さえよければ移っていきます。これでは職人技術は育ちません。職業倫理は崩壊してしまいます。アメリカの経済は今や倫理のテコ入れなしには、日本企業に勝つことは出来ないのであります。

アメリカの職業人は、迂闊にも、自由競争では力の強いものが勝つと信じていましたので、力の論理に酔いしれて、倫理の問題、即ち、心の問題を忘れてしまったのであります。

そして、今日の憂き目を見ているのであります。ところが、日本の職業社会も最近は職業倫理がおかしくなってきたことは御承知の通りであります。

人類社会は、経済活動においては基本的に自由競争の原則を維持しなければならないのではありますが、そのためにはどうしても職業倫理が大切だということであります。戦前のアメリカは、１９１５年の道徳律があったように、この職業倫理が確立していたが故に国際社会に経済的指導性を発揮していたのであります。しかし、今は、職業倫理を忘れたが故に、アメリカ経済は凋落の一途を辿っているのであります。そして、その影響は、既に日本にも及んでいるのであります。

そこで、日本は、確かに敗戦の苦しみも知り、その苦労に耐えて今日の大をなしたのでありますが、その原因が、勤勉、正直、即ち、職業倫理、そして教育熱心というところにあるとすれば、それは、未来の問題として、日本の若い世代の人達がこの職業倫理を失ったときに日本の経済は国際競争力を失うに至るということであります。今や、日本は、世界第一の指導国であります。私達は、この指導性によって得た幸せを出来るだけ長続きさせなければなりませんが、その考え方の根源は、職業倫理の世界にこれを見いださなければならないのであります。

3.『永遠の課題・職業倫理』その１２

今、我が国は、世界的不況の影響によって国内的にも色々な問題はありますが、グローバルな立場で眺めますと、日本はやはり世界にリーダーシップをとる指導国であります。

そして前回は、この指導性の根源が職業倫理の世界にあるということを申し上げました。

したがって、職業倫理が歴史的に見ても如何に大切かと謂うことが判るのであります。

では私達はこの世の中を生きていくとき、どのような心構えが必要なのか。具体的に日常の生活の場でどのように倫理を実践すればよいのかが問題であります。

結論として言えば、職業を倫理的に営むべし、と謂うことであります。

では、それは具体的には一体にはどういうことなのか、と言いますと、全ての生活関係において自分の行動に愛を込める、ということであります。

昔、文豪ゲーテが、誠に美しい言葉を残しています。

『天に花咲いて星と謂い、地に花咲いて愛と謂う』

「愛」と言う言葉は、日本人の一番好きな言葉だと謂われているのであります。では、具体的に「愛」というものをどのように理解すべきでしょうか。

そもそも愛とは何ぞや、と言いますと、それに答えることは出来ないのであります。何故なら、それはロータリーの窮極の到達点だからであります。そこから先はないのであります。即ち、愛は、人間の心の窮極にあるものだからであります。

命ある限り人間が持っているものは、愛であり、倫理であります。命の大きな働きが心の働きでもあり、それが倫理であり、愛であります。したがって、愛は人間に根源的なものなのであります。

さて、一般に、愛と言えば、それは「他人への愛」が考えられていますが、私は、愛は本質的には「自分への愛」即ち、「自己愛」であると思います。

昔、インドに相思相愛の仲のよい王様夫婦が居ました。ある時、王様が最愛の奥様に対して、「よく考えてみると、私は、最愛のお前より、私自身の方が一番可愛いように思う」と仰いました。すると奥様も、「実は、私も、貴方より私自身の方が一番可愛いと思います」と仰いました。

そこで、王様は、「皆が自分自身が一番可愛いと思ったら、この世の中は成り立たないね。お釈迦様に聞いてみよう」と言って、お二人はお釈迦様のところへ行かれました。お釈迦様はお二人の話をお聞きになって「人間は誰でも皆、自分自身が一番可愛いのです。

それでよいのです。ただ、自分自身が一番可愛いように、相手もまた自分自身が一番可愛いと思っていることを忘れないように」とお諭しになりました。ここから、相手に対する「思いやりの心」が芽生えるのであります。

自分以外の人に対する愛が始まるのであります。そして、世の中の人達が皆このような心、即ち、愛とか思いやりの心を持って初めてこの世の中が成り立つのであります。

即ち、自分自身を愛することが出来て、初めて人を愛することが出来るのであり、世の中のことを考えることが出来るのであります。このようにして、初めて「人は育つ」のであろうかと思います。これがロータリーの心でもあります。

4.『永遠の課題・職業倫理』その１３

前回は、職業倫理の根底にある「愛」について、自分自身を愛することが出来て初めて人を愛することが出来、世の中のことを考えることが出来るのであり、このようにして初めて「人は育つ」と申しました。したがって、自分自身を愛することが出来ない人は、人を愛することも出来ません。そして、人から愛されたことのない人は、人を愛することも出来ないのであり、自分が愛されていないと人を愛することは出来ません。したがって、今の子供達が、いじめに走るのは、自分が愛されていないからだと思います。優しくされていない子は、人に優しくすることも出来ません。人に優しくすれば、その人は優しくなってくれます。子供を愛すれば、その子供は、他の誰かを愛することが出来る優しい子供に育ってくれます。

レイモンド・チャンドラーという人が言いました。『人間は、逞しくなければ生きていけない。同時に、優しくなければ生きる資格がない』と言っています。即ち、人間は逞しくなければならない、と同時に、優しさというものもなければなりません。人への思いやり、そして自分への優しさ。自分をいじめないこと、そして、他人をいじめないことが大切であります。

要するに、一人ひとりを大切にすることが大切なのであります。このようにして、結論を申し上げますと、愛は「自己愛」が出発点であると思うのであります。

では、この理屈を職業人に当て嵌めてみるとどうなるでしょうか。

私達職業人は、先ず自分の職業を愛すべきであります。自分の職業を愛すればこそ、やがてそれが他者への思いやりとなり、他者への愛の心が芽生えるのであります。そのことによって初めて、職業人としてお互いに為すべきこと、為すべからざることを誓い合う所謂「職業倫理」の自覚に繋がっていくのであります。

そして、それがやがて企業の社会的責任の自覚へと発展して行くのであります。したがって、職業人にこの点の自覚がなくなると、職業倫理が頽廃します。更には最近の市場原理主義のように職業倫理を失って、ライブドアや村上ファンドのような金儲け一本槍の拝金主義となってしまいます。そして「資本の論理は力の論理」ということになり、大資本は益々大きくなって格差社会となるのであります。

そして、古代ローマの格言に「人は人にとって狼である」と謂われているように、弱肉強食の世界に陥って行くことになると思うのであります。

「歌を忘れたカナリヤ」という童謡があります。

歌を忘れたカナリヤは世の中に害を与えませんが、倫理を忘れた職業人は、世の中に迷惑をかけるどころか、やがては国を滅ぼすことにもなりかねないのであります。例えば、古代ローマの貴族が同性愛に耽ったために子孫を産めなくなって、５０年にしてローマの貴族が没落して古代ローマ帝国が滅亡し、そのあと中世の暗黒時代が始まったという説もあります。このように、一国の興亡は、国民の倫理の頽廃によることも間々あるのであります。即ち、国や家が滅びるのは「魂」が滅んでいるからであります。

だからこそ私達は、人間としてあるべき心、即ち、「倫理」を高めることに努めなければならないのであります。

5.『永遠の課題・職業倫理』その１４

前回は、国が滅びないためにも、人間としてあるべき心即ち、「倫理」を高めることに努めなければならないということを申し上げました。そのためには、先ず自分の職業を愛することが大事であります。先ず、自分自身を愛し、自分の職業を愛し、自分の企業をどのような不況期にも潰れない強靱な体質の企業に育て上げることがロータリーの第一義なのであります。

強靱な体質の逞しい企業に育て上げること。レイモンド・チャンドラーが言ったように、逞しくなければ、企業は今の職業社会を生きて行けません。それと同時に、優しくなければ、即ち、愛とか倫理がなければ、企業は生きる資格がないと思います。したがって、企業経営には、愛と職業倫理がなければなりません。

或る経営哲学者が『会社経営の根幹は愛である』と言ったように、「愛」は、会社経営の窮極の到達点であります。しかし、愛は、目に見えないものであります。恋愛をしている人の身体をレントゲンやCTで撮影しても愛は写りません。しかし、だからと言って愛はないと言えるのでしょうか。目に見えないけれども厳然としてあるのが愛なのであります。

明治の非凡な詩人金子みすずが美しい詩を残しています。その一つを紹介します。「星とたんぽぽ」という題であります。

青いお空の底深く、海の小石のそのように、夜が来るまで沈んでる、

昼のお星は目に見えぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。

この「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」という言葉には、全ての存在へ目を行き届かせる愛と、隠されているものの大切さを伝える強いものがあります。目に見えなくても、あると信じることの大切さを訴えるこの詩には、金子みすずの精神性がよく表れていると思うのであります。

私達は、今、あまりにも、目に見えるもの即ち、現象に惑わされて、目に見えるものばかりを追いすぎています。現象というのは般若心経に謂う「色即是空」の「色」の世界であります。この「色」即ち、現象に惑わされているのであります。その結果、目に見えない大切なもの即ち本質を忘れているように思います。目に見えない愛を心に持つことを忘れてしまっているように思うのであります。

例えば、レントゲンに写った肉体は、死ねば火葬場で灰になってしまいます。然し、レントゲンに写らなかったもの、即ち、私の母親の愛は、今も私の心の中にあります。見えたものは全部燃え尽きます。見えなかったものは燃えることはありません。私達は、この燃えないものを大切にしなければならないと思うのであります。

亡くなった母親が、生きている間に私に与えてくれた愛は、生きている間は目に見えなかったが故に、レントゲンには写りませんでした。したがって、その愛は、母親が死んでからも焼けないで残ります。したがって、愛という目に見えないものは、私達の心の中で育てていかなければならないと思うのであります。

愛とか倫理とかは、目に見えないが故に未だに私達の心の糧になっているのであります。このことは私達ロータリアンが肝に銘ずべきことであります。

6.『永遠の課題・職業倫理』その１５

前回は愛とか倫理は目に見えないが故に人の心の糧になっていると申しました。 では、現在及び未来の問題として、この目に見えない大切なものを一体どのようにして後の世代に伝えていくのか。

例えば､桶の中に小芋を入れてかき回すと、芋と芋とが擦れ合って皮が剥けて綺麗に磨かれていくように、私達は、色々な人と出会って切磋琢磨することによって、心が磨かれて行くのであります。このよにうにお互いに心を磨き合って人は育つのであります。したがって、吉川英治先生が謂ったように「我以外皆我が師」であります。この世の中は皆がお互いに先生であり、生徒であります。したがって、教科書などはないのであります。私達一人一人の言動や一挙手一投足によりお互いが知らず知らずのうちに教えられ倫理とか道徳が身に付いていくのであります。

では、具体的には、どのようにして知識が血となり肉となって身に付くのか。

それを昔から実践している世界があります。それが禅の世界であります。即ち、

始祖達磨大師から始まって第二祖慧可、第三祖僧燦、第四祖道信、第五祖弘忍、そして第六祖慧能と禅の悟りの境地が受け継がれていったのでありますが、この第六祖慧能の時代は、中国は宋の国でありました。

この頃、第五祖弘忍は、自分の法脈を継ぐべき後継者を選ぶために、寺内の僧侶達に自分の信ずるところを紙に書いて廊下に張っておけ、といったのであります。その当時、弘忍禅師の後継者として自他共に許す者と自負していたのは神秀という僧侶でありました。そこで、神秀は、自分の考えを偈（仏教の真理を詩の形で述べたもの。偈頌ともいう。）として書いて壁に貼りました。それは、

『身是菩提樹　心如明鏡台　時々勤払拭　莫使惹塵埃』この意味は、自分の身体は菩提樹のようなものであり、心は鏡の如く清浄なものだからいつも清らかにして埃のかからないようにしておかなければならないというような意味でありましょう。これに対して慧能も偈を書いて壁に貼りました。それは、

『菩提本無樹　明鏡亦非台　本来無一物　何処惹塵埃』この意味は、本来の世界には、菩提樹も鏡もあろう筈がない。したがって、埃がかかるはずもない。本来何もないのだ。

本来無一物なのだ､と言う意味であります。

これを見た弘忍禅師が慧能を自分の後継者と決め、夜秘かに慧能を呼んで､「お前に印可を授ける。しかし、お前はこの寺で米搗きをしている最下層の役僧だから、お前に印可を授けたことが判るとお前は殺されるかも知れない。だから、夜の明けないうちに印可と宝物を持って逃げろ」と言ったのであります。

そこで、六祖慧能は、南へ逃げてそこで法脈を継いだのであります。このようにして､宋の時代に、六祖慧能の南宋禅と神秀の北宋禅に分かれたのであります。

北宋禅は、弘忍禅師の法脈を継いでいないのでやがて滅びてしまいますが、六祖慧能の南宋禅は、その後日本に渡来し、道元禅師ほか多数の老師によってその法脈を伝え今日に至っているのであります。これが、目に見えない大切なものを後世に伝える一つの方法であります。

7.『永遠の課題・職業倫理』その１６

前回は、禅の法脈というものが目に見えない大切なものを後世に伝える一つの方法であると申しました。その具体的な方法は、老師が自分の弟子と一つ屋根の下に住み、寝食を共にしながら口移しに正に一挙手一投足によって禅の境地を悟らせるのであります。これが禅の法脈というものであります。これを一子相伝と謂います。

そして、この法脈というものは、何も禅の世界に限っているものではありません。例えば、学問の世界においても何々教授の法脈とか、歌舞伎の世界でも一派を為した役者の法脈というものがあります。ロータリーにもポール・ハリスの法脈とか、初期ロータリーの法脈があります。

もっともこれらは禅の法脈のように厳しいものではなく、謂わば「軽度の法脈」ともいうべきものであります。そして、この意味では、家庭にも法脈があります。即ち、代々の家訓によってその家の法脈が伝えられていくというものであります。そして沢山の人との接触を通じて知らず知らずのうちに知識が血となり肉となって身に付いていくというのであります。このようにして人は育つのであります。

ところが、最近の我が国の職業社会は、この法脈が断ち切れてしまっているかのようにも思われるのであります。

一つの物語を紹介しておきま。１６４５年７３歳でこの世を去った沢庵禅師のところに或る人が花魁の絵を持ってきて、「和尚さん、この絵に賛を書いて下さい」と頼みました。

実は沢庵禅師を困らせてやろうという魂胆でありましたが、沢庵禅師はたちどころに賛を書きました。

「汝四尺の（身体の）真中を売りて、一切衆生の煩悩を安んず。色即是空、空即是色、柳は緑、花は紅」そして、「仏は法を売り、祖師は仏を売り、末世の僧は祖師を売る」と書いた のであります。

つまり、誰もが金儲けのために、一番大切なものを売り物にしているというのであります。皆さん、どう思われますか。今の世の中に似てきていないでしょうか。

今の世の中は、まさに、末世の僧が祖師を売ったに等しい世の中になってきているように思うのであります。そして、これは今のロータリーにも当て嵌まるのではないでしょうか。ロータリーは、１９０５年2月２３日ポール・ハリスが自らが開発し提案した一業一会員制の原則を２００１年の規定審議会で廃止し、更にロータリー創立１ヶ月後の創立総会において確立した規則的例会出席の原則も１９６８年以降の度重なる規制緩和によって事実上骨抜きにしてしまいました。これは、末世の僧が祖師を売ったに等しいのではないでしょうか。正に、ポール・ハリスの法脈は断ち切れてしまったと言わなければなりません。その結果、現在の経済社会は職業倫理が退廃し、ロータリーの倫理運動が全く機能していないかのように見受けられるのであります。したがって、未来は一体どうなっていくのか、全く混沌として見えません。したがってまた、現在及び未来に職業倫理を正しく伝えていくことは至難の業のように思われるのであります。このように致しまして、まさに「職業倫理は永遠の課題」なのであります。

8.『永遠の課題・職業倫理』その１７

ロータリーが国際ロータリーレベルで初めて職業倫理を提唱したのは、１９１５年のサンフランシスコ国際大会で採択された「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」所謂「ロータリー道徳律」でありました。そして、このロータリー倫理訓の思想が日本に継受されたのは１９２８年即ち、昭和３年のことでありました。即ち、昭和３年創立の大連ロータリークラブの古沢丈作氏がロータリー思想の源流を探求して、このロータリー倫理訓を発見しました。そして、これを日夜お経の如く熟読玩味し、完全に自家薬籠中のものとしてこの１１ヶ条の英文を５ヶ条の日本文に書き改めたのであります。これが日本ロータリー史上有名な「大連クラブのロータリー宣言」なのであります。そして、この『大連クラブのロータリー宣言』が戦前の日本のロータリアンの職業倫理のバックボーンとなっていたことは、紛れもない事実なのであります。

ただ、このロータリー宣言は、非常に格調の高い文章であり、しかも、文語体であり且つ旧仮名遣いでありますので、今の口語体に慣れた一般の読者には読みにくいところもあろうかと思いますので、その逐条解釈をしておきたいと思います。

第一　須く事業の人たるに先立ちて道義の人たるべし。蓋し事業の経営に全力を傾倒するは因って世を益せんがためなり。故に吾人は道義を無視して所謂事業の成功を獲んとする者に与せず。

「事業の人たるに先立ちて道義の人たるべし」というのは、ロータリアンは職業人である前に道義を守る人即ち、倫理的な人間であれということであり、言い換えれば、二宮尊徳翁の「田畑を耕す前に先ず心の田畑を耕せ」と謂うことであります。したがって、これはロータリーが倫理運動であることを示しています。

「蓋し、事業の経営に全力を傾倒するは因って世を益せんがためなり」と謂うのは、職業人として逞しく生きているのは世のため人のために奉仕するためであるという意味であります。

「故に吾人は道義を無視して所謂事業の成功を獲んとする者に与せず」と謂うのは、自分達は倫理を無視して市場原理主義のようにただ金さえ儲ければよいとは考えていない、あくまでも職業は倫理的に営むべし、と謂うのであります。

第二　成否を曰うに先立ち退いて義務を尽さんことを思い進んで奉仕を完うせんことを念う。自らを利するに先立ちて他を益せんことを願う。最も能く奉仕する者最も多く満たさるべきことを吾人は疑わず。

「成否を曰うに先立ち退いて義務を尽さんことを思い」と謂うのは、権利を主張する者は先ず義務を履行せよというフランス大革命以来のスローガンそのものであります。我が国では、株式会社大丸の社訓「先義後利」に当たります。

「自らを利するに先立ちて他を益せんことを願う」と謂うのは、儲けることを考える前に先ず顧客のためになることを考えよということであります。

「最も能く奉仕する者最も多く満たさるべきことを吾人は疑わず」と謂うのは、ロータリーの標語 "He profits most who serves best" の確認であります。

9.『永遠の課題・職業倫理』その１８

前回は、日本ロータリー史上有名な「大連クラブのロータリー宣言」について、その第一項と、第二項について説明致しました。今日は第三項と第四項を説明します。

第三　或は特殊の関係を以て機会を壟断し、或は世人の潔しとせざるに乗じて 巨利を博す。これ吾人の最も忌む所なり。吾人の精神に反してその信条を紊るは利のために義を失うより甚だしきは無し。

壟断というのは、直訳すれば、断ち切ったように高く聳えたところという意味でありますが、中国の孟子の故事によれば別の意味があります。それは、或る男が、市が立つたびに高いところを探してそこに登り、市場を見渡して安い物を買い占め、これを高い値で売りつけて市場の利益を独占したという故事から、うまく利益を独占することの意味に使われているのであります。

このことで直ぐ思い出されるのは、ライブドアや村上ファンドの事件であります。彼らは、特殊の機会を利用して株価を吊り上げておいて、高値で売り抜け、 巨利を博したのでありまして、正にこのロータリー宣言に所謂「特殊の関係を以て機会を壟断し」「巨利を博」したのであります。このようなことは信義誠実に反し、私達の最も嫌うところでありまして、これは、利益のために信義を失うことよりも非道い、即ち、人間として最低であると言っているのであります。

第四　義を以て集り、信を以て結び、切磋し、琢磨し、相扶け相益す。これ吾人団結の本旨なり。然れども党を以て厚くすることなく、他を以て拒むことなく、私を以て党する者にあらざるなり。

これは、ロータリアンは一業一会員制の原則によって選ばれた良質な人達であり、しかも、皆、主体性を確立した一国一城の主でありますから、徒党を組んではならないのであります。徒党を組むのは主体性のない弱いもののすることであります。動物でも麒麟や縞馬は猛獣から身を守るために群れます。しかし、虎やライオンは百獣の王でありますから、決して群れることはありません。したがって、ロータリアンは、恰も百獣の王の如く決して群れてはならないのであります。だからこそロータリー哲学は、個人奉仕の絶対性を説いているのであります。

したがって、曾てポール・ハリスがいみじくも言ったように「ロータリーは団結しないところに美徳がある」のであります。この言葉をロータリー哲学によって解釈しますと、「ロータリーには行動の団結はない。しかし、心の団結がある」と謂うことでありまして、ロータリアンは、「心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る」のであります。これが「ロータリーの親睦」なのであります。

しかし、注意すべきは、この親睦は単なる仲良しクラブではありません。親睦のエネルギーを世のため人のために使わなければならないのであります。ここに奉仕の理想のもとに集まるロータリアンの独自性があるのであります。

これを要するに、「群れるな。しかし、排他的になるな」ということであり、 正にロータリー哲学に謂うところの「包摂の論理」即ち全ての人に思いやりの心、 愛の心で接すること、これがロータリーの奉仕の理想なのであります。

10.『永遠の課題・職業倫理』その１９

今日は前回に引き続いて「大連クラブのロータリー宣言」の第五項を説明します。

第五　徒爾なる角逐と闘争とは世に行わるべからず、協力以て博愛平等の理想を実現せざるべからず、然り吾が同志はこの大義を世界に敷かむがために活躍す、吾がロータリーの崇高なる使命茲に在り。その存在の意義亦茲に存す。

角逐の「角」は、競うという意味、即ち、競争であります。「逐」は、駆逐の意味でありますから、角逐というのは、互いに相手を落とそうと争うこと、互いに競争することであります。したがって、資本主義経済社会では、角逐は自由競争を意味します。そこで、自由競争は進歩のために必要であります。競争無くして進歩はありませんから、自由競争社会では技術革新のためにも競争は不可欠であります。しかし、例え自由競争であっても徒爾なる角逐と闘争即ち、無節操な倫理のない競争は厳に慎むべきであります。ロータリーは倫理運動でありますから、職業人としてお互いに為すべきこと、為すべからざることを誓い合う所謂「職業倫理」を常に自覚しなければなりません。その自覚がやがて企業の社会的責任の自覚へと発展して行くのであります。したがって、職業人にこの点の自覚がなくなりますと職業倫理が頽廃します。

そして、最近の市場原理主義のように職業倫理を失って、ライブドアや村上ファンドのような金儲け一本槍の拝金主義になり、「資本の論理は力の論理」ということになって、大資本は益々大きくなって格差社会となってしまうのであります。そして遂には古代ローマの格言に「人は人にとって狼である」と謂われているように、弱肉強食の世界に陥って行くだろうと思うのであります。

「歌を忘れたカナリヤ」という童謡があります。歌を忘れたカナリヤは世の中に害を与えません。しかし、倫理を忘れた職業人は、世の中に迷惑をかるどころか、やがては国を滅ぼすことにもなります。例えば、古代ローマの貴族は、同性愛に耽ったために子孫を産めなくなって５０年にして没落し、ローマ帝国が滅亡して、そのあとに中世の暗黒時代が始まったという説もあります。このように、一国の興亡は、国民の倫理の頽廃によることも間々あるのであります。

だからこそ、ロータリーは、人間としてあるべき心、即ち「倫理」を高めることをロータリー運動の第一義としているのであります。そして、どのような不況期にも潰れない強靱な体質の企業に育て上げることが職業奉仕の第一義なのであります。先ず強靱な体質の逞しい企業に育て上げること、レイモンド・チャンドラーが言ったように、企業は逞しくなければ、今の厳しい職業社会を生きて行くことが出来ません。それと同時に、企業は優しくなければ、即ち愛とか倫理がなければ、企業は生きる資格がないのであります。したがって、しっかりとした職業倫理を持った強靱な体質の企業に育て上げることが職業奉仕の第一義なのであり、これが「ロータリーの核にある」考え方なのであります。したがって、第五項の最後に「吾がロータリーの崇高なる使命茲に在り。その存在の意義亦茲に存す」と謂っているのは、まさにこの第一義のことを謂っているのであります。

11.『永遠の課題・職業倫理』その２０

前回までは戦前の日本ロータリーの倫理訓について申し上げました。では、戦後の日本のロータリーはどうなのかと申しますと、戦後まもなく東京浅草ロータリークラブの『玩具職業人倫理宣言』があり、その後１９８３年、兵庫の第２６８０地区が地区大会特別決議として採択した「ロータリー職業訓」という倫理宣言があり、最も近くは１９９５年６月２８日仙台青葉ロータリークラブの『職業倫理宣言』があります。これらは、いずれも職業奉仕の原理に基づいた素晴らしい提唱なのであります。

このように致しまして、戦前のロータリーは、アメリカも日本も職業倫理が確立していました。即ち、１９１５年のサンフランシスコの国際大会において「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」所謂「ロータリー道徳律」が採択されましたが、そのあと１９２９年の不況を克服して、それ以後１９４５年の第二次大戦の終戦に至るまでアメリカの繁栄をもたらしたロータリーに一貫して流れていたものは一体何かと申しますと、それは一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則による職業奉仕の実践、そしてその中核にある職業倫理の確立でありました。

また、日本のロータリーも、１９２８年、昭和３年の「大連ロータリークラブのロータリー倫理訓」によって１９１５年の所謂「ロータリー道徳律」の精神を受け継ぎ、職業倫理を確立して来たのであります。そして、この状況は少なくとも１９６０年即ち昭和３５年頃までは持続していたのであります。

しかし、その後は物質的繁栄に伴う精神の衰退により、アメリカでは第二次大戦後、日本では昭和３５年以降、職業倫理の衰退が始ったのであります。

その原因は一体何か。元来、現在の不況は、現象的にはアメリカのサブプライムローンに始まる２００８年９月のリーマン・ブラザーズの破綻即ちリーマン・ショック以降、世界的不況と謂われる事態となりましたが、しかし、その原因は、既に１９８０年代の好況期に始まっていたのであります。

日本においても１９８０年代のあのバブル景気の原因は一体何か。それは、人間が徒に金を求めて倫理を忘れた結果であります。時代はこのときから既に変わりつつあったのであります。それがやがて大統領選挙におけるオバマの勝利や日本の総選挙における民主党の勝利によって時代のダイナミズムが目覚めたのであります。

そして、このように時代が変わった時にこそ、これから何が変わるべきか、何を変えてはならないか、を真剣に考えなければならないのであります。そして、如何なる時代になっても絶対に変えてはならないもの、それが職業倫理なのであります。

ロータリーの職業倫理は、詰まるところ、人は如何に生きるべきか説くものであり、これは万古不易の人間の行動原理であります。

したがって、今こそ、職業倫理が永遠の課題であることを再確認する必要があります。

そして大企業も中小企業もその経営首脳がこぞって職業倫理を回復し、その心を後の世代に引き継がなくてはなりません。そうでなければ、日本民族は倫理を失い、心で滅んでしまうと思うのであります。正に職業倫理が永遠の課題と謂われる所以であります。

12.『国旗掲揚・国歌斉唱の慣例』

戦前の日本のロータリーは、昭和１５年、軍閥の弾圧によって壊滅し、国際ロータリーから離脱しました。ただ、ロータリーが壊滅していく過程の中で、私達の先輩ロータリアン達が色々とその対応策に苦慮しながら、その苦しみの中から、今日のロータリーの一般慣例を生み出していますので、これに触れておく必要があると思うのであります。

それは、クラブ例会における「国旗の掲揚と国歌の斉唱」であります。即ち、昭和８年のこと、ロータリーはアメリカに本部があるスパイの手先であるからこのような団体は、天皇陛下の御為にならない。したがって、解散すべきだとして壮士の一団が京都ロータリークラブに押しかけてきたことがありました。

時の石川芳次郎会長は、『ロータリーというものは、職業人の集まりであって、毎週例会において世のため人のための心を磨き、その磨かれた心をもって、世のため人のために奉仕している団体であります。したがって、我々は、忠君愛国、即ち、天皇陛下の御為にも奉仕活動をしているのであります』と説いたのであります。

しかし、壮士達は、これに納得せず、『天皇陛下の御為にも奉仕活動をしているのであれば、その証を立てろ』と迫ったのであります。そこで、石川芳次郎会長は、『第１に、ロータリー運動というのは、国際的な運動でありますから、例会場に国旗を掲げる慣例をもっていません。しかし、我々は、天皇陛下の御為にもまた、奉仕活動を行うことの証として、これからは、例会場に国旗日の丸を掲揚しましょう。

第２に、ロータリークラブは、例会の始めに、ロータリーソングを唄いますが、天皇陛下の御為にもまた、奉仕活動をしているということの証として、これからは国歌「君が代」を斉唱しましょう』と。

この二つの条件を提示しましたところ、壮士達は、『よし判った』と言って退散したのであります。一般に「ロータリーの地獄耳」と謂われるように情報の伝達は早かったので、このことが、瞬く間に日本全国のロータリークラブに知れ渡りまして、例会で国旗を掲揚し、国歌を斉唱するのは、右翼撃退に卓効があるというので、この時から、ロータリークラブは、右翼に対する対応策から、例会に国旗を掲揚し、君が代を斉唱することが一般慣例となって今日に及んでいるのであります。時に昭和８年のことでありました。

しかし、事柄は、元来、感情問題でありますから、事態は段々と厳しくなりまして、四王天延孝中将が、内務省の主催で、国際スパイの講演会を開いた時に、『ロータリーは、フリーメイスンの隠れ蓑であり、国際的な秘密結社であるから、アメリカのスパイを養成するものである』と説いて廻ったときに、国論大いに上がりまして、ロータリーは次第に壊滅の道を歩むようになったのであります。

因みに、四王天中将の種本は、フリーメイスンを仇敵視したカソリックの神父ボアステールの書いた【国際ロータリーとマソン結社】【マソン結社の組織と秘密】でありました。

13.『フリーメイスンについて』その1

前回は、フリーメイスン(Freemason)のことに触れましたので、今日はそのことについて少し補足しておきます。

これは、中世のイギリスから起こったもので、各国を自由に行き来して寺院建築などの仕事をしていた石工(Mason)の組合（Guild)がその前身であります。そして、寺院等の建築物の近くに作った仕事場がロッジ Lodgeであり、このロッジで仕事に関する討議や情報交換が行われ、その内容はメイスン以外には秘密にされていたのであります。この秘密主義は、組合でありますから当然のことであります。

中世のイギリスには建築業者の組合としてのフリーメイスンが沢山作られ、その棟梁達は、財力を持っていましたから次第に有力な団体に成長したのであります。

ところが、１６世紀半ばからイギリスの政治的動乱によって大建築の需要が減り、フリーメイスンは、建築組合としての組織を維持できなくなり、外部の人も組合に加入させるようになったのであります。このようにして、加入を認められた外部の会員は、Accepted Masonと言われて、当時の政界、財界をリードする有力者が多く加入し、内容の変化と共に近代的なフリーメイスンに移行して行ったのであります。

イギリス系メイスン(1721)では、バーナード・ショウ、ウインザー公。フランス系メイスン(1725)では、ナポレオン1世。ドイツ系メイスン(1737)では、フリードリッヒ大王、ゲーテ。アメリカ系メイスン(1776)では、ベンジャミン・フランクリン、トーマス・ジェファーソン、ジョージ・ワシントン、ルーズベルト、トルーマン、マッカーサー、アインシュタイン、デュポン等。日本人では蜂須賀公爵がおられました。

フリーメイスンとロータリーとの関係については、その特徴を上げればどちらも原理研究会でありますが、フリーメイスンは試験制度を採用して原理の修得段階を階級化しているのに対して、ロータリーは、「人の上に人を作らず」で階級化はしないのであります。

また、フリーメイスンは、秘密主義でありクラブ内部の役職を外部に公表しないのに対して、ロータリーは、開放主義であります。

ポール・ハリスは、１９０５年にロータリークラブを作った時には、フリーメイスンの秘密主義を導入しようとしたことは明らかだと言われています。何故なら、当時栄えていた社交団体は、フリーメイスンであったからであります。

しかし、ポール・ハリスは、その後、自信をもってフリーメイスンの秘密主義と一線を画するに至るのであります。それ以来、フリーメイスンは秘密主義、ロータリーは開放主義でありますから、ロータリーはフリーメイスンとは何の関係もないのであります。

ただ、ロータリーが１９１０年を超えて、地域社会の超一流の実業家をもって構成されるようになりますと、フリーメイスンで勉強した結果、超一流の実業家になった人が、その職業分類に基づいてロータリークラブに入会するようになります。

そこで、ロータリーの中でも、殊に国際ロータリーの会長になった人達の中には、何人ものフリーメイスンの指導者が含まれていることもまた、紛れのない事実なのであります。

14.『フリーメイスンについて』その2

前回は、ロータリーの指導者の中にも多くのフリーメイスンの会員がいることを申し上げました。例えば、東ケ崎潔元国際ロータリー会長も、数少ない元帥の位にいた一人であることは、歴然たる事実であります。また、岩国のロータリーの親愛なる仲間、故保田浩先生も、昔は岩国のフリーメイスンの会員でありました。

しかし、これは、二つの運動の接点の問題でありまして、ロータリーがフリーメイスンによって動かされていると言うことの論証にはならないのであります。

ところが、当時は、事柄が感情的に捉えられていた時代でありましたから、一般大衆は、簡単に四王天延孝中将の考え方に乗ってしまったのであります。

元来、フリーメイスンの目的は何かというと、人道主義に基づく全人類の殿堂を築くことであり、その集約的スローガンは、自由、平等、博愛なのであります。

そして、その組織の構造は階級制を採っていまして、例えばイギリス系メイスンの階級構造は３３段階であり、第１の徒弟から始まり、第２の職人、第３の親方（メイスン）、第４の秘密の親方、第５の完全な親方をはじめ、第３１の大審問長官、第３２の王者の秘密の崇高な王子、第３３の最高の大総監に至るものであります。

そして、それぞれ各段階の試験を受けることによって、その階級が上がっていくのであります。

また、フリーメイスンの活動状況は、それぞれの国や地域によって様々でありまして、秘密を楽しむ単なる親睦団体にすぎないものもあり、或いは、反カソリック運動はするがスパイはしないものとか、或いは、スパイをしてナチズムに対抗したものとか、まさにその態様は様々であります。

このように、フリーメイスン自体は、本来崇高な目的をもった親睦団体であり、ロータリーとは何ら関係のないものでありました。

ただ、当時のロータリーは、超一流の実業家ばかりで構成されていましたから、一般大衆の理解の支えがなかったのであります。庶民の中に足を据えられない社会運動というものは、何か事が起こるとバイタリティがないのであります。これがロータリーの弱さでありました。したがって、四王天延孝中将の提唱により国論を挙げてのロータリー壊滅運動が展開されることになってしまったのであります。

当時は、日本の政治権力が軍閥に握られていて、軍閥は、アメリカの国際政策と対立する構えを見せ、何れはアメリカと戦争をしなければならないという準備作業を組んでいた時代でありました。このような、日米感情が悪化するムードの中で、ロータリーは本部がアメリカにあり、名前がロータリーインターナショナルであります。１８５０年のパリ宣言、『万国の労働者よ、団結せよ』というスローガン、あの時に掲げられた名前がまたインターナショナルであります。

そこで、ロータリーは赤だとか、ロータリーは国際的秘密結社フリーメイスンの隠れ蓑であってアメリカに情報を売るスパイだ、とか謂う理屈が成り立つようになったのであります。勿論、ロータリーは、これに対して、色々と反論し、主張しましたが、結局、衆寡敵せず、壊滅してしまったのであります。

15.『日満ロータリークラブ連合会』その１

前回は、四王天延孝中将の提唱により国論を挙げてのロータリー壊滅運動が展開されることになったということを申し上げました。そこで、当時の指導的ロータリアン達は、これに対して二つの対応策を立てたのであります。
第１は、日満ロータリークラブ連合会という中間管理組織体を形成することであり、
第２は、ロータリーの庶民化の提唱でありました。

第1の中間管理組織体の形成の問題は、当時の国内情勢から見て、ロータリーがアメリカに直結しているという印象を与えるのは如何にもまずいと謂うので、国際ロータリーから離脱する訳にはいかないが、ＲＩＢＩ(Rotary International Great Britain and Ireland)のように、国際ロータリーから一歩退いた中間管理組織体を作って軍閥の弾圧を避けようと謂うのであります。所謂、日満ロータリークラブ連合会構想でありました。即ち、当時、日本全国を管轄していたＲＩ第７０地区を三つに分割して、本州の名古屋以東の東部と北海道を第７０地区、本州の西部、四国、九州、台湾を第７１地区、そして、朝鮮、満州を第７２地区とする構想であります。 勿論、国際ロータリーは、全世界のロータリークラブと直結しているものでありますから（ＲＩの直接監督の原則）、原理上はこのような中間管理組織体を正式に認めることは出来ないのでありますが、日本のロータリーは政治的な裏取引をしてこれを押し切ってしまったのであります。

尤も、ＲＩＢＩだけは、現在も国際ロータリーの中の中間管理組織体として認められていますが、これは、国際ロータリーの直接監督の原則（直結方式）が出来た１９１５年の前年、１９１４年に当時の国際ロータリークラブ連合会がうっかりと承認してしまったものでありまして、これは本来認めることが出来ないものであります。したがって、それ以後は、ＲＩも中間管理組織体を一切認めていません。

ところが、日本のロータリーは、昭和１４年即ち１９３９年の６月のクリーブランド国際大会の第９号議案として、日本のＲＩ第７０地区提案としてＲＩＪＭ案（日満ロータリークラブ連合会案）を提案したのであります。これは、ＲＩＢＩに倣って、Ｊは日本、Ｍは満州を表していたものであります。

しかし、大会に先立って行われた立法委員会にかけられた時、提案理由説明者の芝染太郎氏によって日本は自らの提案を撤回したのであります。

その理由は何かと謂いますと、芝染太郎氏が、非公式に個々のＲＩ理事の意見を聞いたところ、賛成しているのは、アルゼンチン、ブラジル、ペルーなどの南米諸国だけであり、彼等は、日本の提案に便乗して出来れば自分のところも中間管理組織体を作ろうと考えているらしく、もしこのようなことになると、国際ロータリーの組織の根幹を揺るがす大問題となることに気付きまして、アメリカ側理事の「必ず善処する」という約束を信じて、日本は自らの提案を撤回したのであります。

そこで、やがて、国際ロータリー理事会は、日本の希望を入れて、昭和１４年即ち１９３９年度から、日本の第７０地区を３地区に分割し、更に、その連合会を作ることを黙認して、自治地域ＲＩＪＭの成立を認めたのであります。

16.『日満ロータリークラブ連合会』その２

前回お話しました日満ロータリークラブ連合会は、１９３９年6月１３日、国際ロータリー理事会によって認められたものでありますが、その内容は、

第１．日本の３地区の総括機関として日満ロータリークラブ連合会を組織し、会長１名、ガバナー３名、前ガバナー３名、前会長１名合計８名の委員を置く。

第２．会長はＲＩの承認を要せず、委員会がこれを選び、委員の任期は１年とする。

第３．会長選出は、３地区連合大会でこれを行う。

第４．ガバナー選挙は、各地区大会で行い、ＲＩへ通告し、従来と同じく国際大会で選出される。

第５．ガバナーの任務は、従来と変わるところなし。

第６．ＲＩへ送金する人頭分担金４＄５０セントは、半額は連合会に残して、その費用に充てる。これはＲＩに新たな負担を与えるものであります。

第７．以上を昭和１４年、１９３９年7月から実施する。

このようにして、8月２６日、ＲＩ第７０地区協議会が開催され、9月１５日、新規約が制定されたのであります。各ガバナーは以下のとおりであります。

第７０地区　名古屋以東の東日本２０クラブ
　　ガバナー森村市左衛門（東京）

第７１地区　西日本及び台湾１９クラブ
　　ガバナー大沢徳太郎（京都）

第７２地区　朝鮮、満州３クラブ
　　ガバナー貝瀬謹吾（大連）

そして、１９３９年１０月9日、日満ロータリークラブ連合会会長に米山梅吉氏が選ばれて就任し、連合会を統括することになったのであります。

第１回日満ロータリークラブ連合会年次大会は、昭和１５年即ち１９４０年5月5日～６日横浜会館にて開催され出席者は５４２名。この大会で連合会会長に米山梅吉氏が再選され、ガバナーノミニーとして第７０地区は平沼亮三氏（横浜）、第７１地区は岡崎忠雄氏（神戸）、第７２地区は篠田治策氏（京城）が選出されています。

大会決議としては、皇軍に対する感謝や傷病兵の慰問などがあり、前夜研究会は、横浜銀行クラブで開催されましたが、ここでは、（1）ロータリー綱領の改訳　（2）日本の国号をニッポンと呼ばせること（3）蒙古、北支方面へロータリーを拡大すること、などが論議されています。

懇親晩餐会は、ニューグランドホテルで開かれ、ビクター専属歌手渡辺はま子らの歌もあって、時節柄、質素ではありましたが、楽しく行われたと言われています。

次の大会開催地は、大阪と決定されましたが、やがて日本のロータリーは国際ロータリーを脱退したため、この大会が第１回且つ最後の大会となったのであります。

日満ロータリークラブ連合会と国際ロータリーとの関係については、日満ロータリークラブ連合会は、昭和１４年即ち１９３９年の7月から認められましたが、陣容を整えて発足したのは、9月末であり、その後の期間も短く、したがって、国際ロータリーとの関係については、当時の各クラブ会員に徹底されていませんでした。この情報伝達の不十分は、時節柄誠にやむを得なかったと言えます。

17.『日満ロータリークラブ連合会』その３

日満ロータリークラブ連合会成立当時の状況はどのようなものであったか。

当時、既に、ロータリークラブに対する干渉や圧迫が次第にひどくなり、例会にまで憲兵や特高警察がしばしば出席し、また、例会の卓話も、予め警察に届け出なければならなくなって、クラブもその精彩を失ってしまったのであります。

一説によれば、米山さんが憲兵隊に呼ばれたと謂いますが、この事実はないと思います。

何故なら、米山さんは、貴族院議員であります。しかし、米山さんの側近、芝染太郎さんは憲兵隊に呼ばれて、拷問の場を見せられたと謂います。

また、神戸クラブの小菅金造パストガバナー（昭和１３年・会長）は、時の大阪控訴院長であった長島毅氏から、『君は何も知らないだけだ。早くロータリーを辞めるように』と忠告を受けたと言います。

神戸クラブの直木さんは、昭和９年当時、クラブ幹事でありましたが、神戸高商の五百旗部（イオキベ）教授の卓話【マルキシズムについて】を謄写版刷りで週報の替わりに要約したものを会員に配布したところ、それが警察の耳に入り、幹事の直木さんが三宮署に呼び出されて大目玉を食って始末書をとられたのであります。

実は、その卓話は、マルキシズム反対の卓話でありましたが、警察の言い分は、『今のご時世に、そもそもマルキシズムなる文字を使うことがけしからん』というのであります。

小林桂助さんの話では、会員の誰かが特高（特別高等警察）に告げ口をしたようであります。その頃、警察の方では、ロータリーをいかがわしい秘密結社だと疑っていたらしく、【家族会】などにも目を光らせていたそうであります。（以上、直木・【私のロータリー５０年】P43）

昭和１５年９月に日本ロータリーが解散した後の神戸木曜会時代は、特高がクラブ例会に来ていましたが、直木さん達は、特高に御馳走を出して別室へ案内し、例会は水入らずでやっていたそうであります。

また、神戸木曜会に、南方のガダルカナルから帰って来た軍人を呼んで卓話をしてもらった時、その人が、大本営の報道は、勝っていると言いながら、実際は負けているという話を漏らしたところ、神戸新聞の社長だと思いますが、警察に密告したようであります。

そこで、幹事の小林さんが、始末書をとられたと言います。忠義面をしたのだろうと思われます。このような事を見ると、クラブ会員の中にも密告をするような人もおり、色々な人が居たと言うことが判るのであります。

昭和１５年即ち１９４０年の７月で年度が変わり、８月１０日に予定されていた岐阜における地区協議会に向けて、各クラブでは、色々と質疑や提案について協議したのであります。クラブによっては、議論が沸騰し、過激な意見も出ましたが、静岡クラブその他で解散の声まで聞こえて来ましたので、連合会では、岐阜の地区協議会をひとまず延期すると共に、全クラブに対し、８月８日、国際ロータリーとの関係を明らかにする通知書を送ったのであります。然し、結局のところ、この年の９月１１日、日本のロータリーは壊滅するに至るのであります。

18.『日満ロータリークラブ連合会』その４

前回は日満ロータリークラブ連合会成立当時の状況について申し上げましたが、当時、既に、ロータリークラブに対する干渉や弾圧が次第にひどくなり、例会にまで憲兵や特高警察がしばしば出席し、また、例会の卓話も、予め警察に届け出なければならなくなって、クラブもその精彩を失ってしまったのであります。

しかし、昭和１５年即ち１９４０年の７月で年度が変わり、８月１０日に予定されていた岐阜における地区協議会に向けて、各クラブでは色々と質疑や提案について協議したのであります。クラブによっては、議論が沸騰し、過激な意見も出ましたが、静岡クラブその他では解散の声まで聞こえて来ましたので、連合会では、岐阜の地区協議会をひとまず延期しました。しかし、結局のところこの協議会は開かれることなく日本ロータリーは壊滅することになったのであります

第２のロータリーの庶民化の提唱は、昭和１２年、井坂孝パストガバナーの提唱にかかるものでありまして、シカゴロータリークラブの創立期を見れば明らかなように、ロータリーというものは、元来、庶民のものであると主張したのであります。

しかし、どちらの策をとっても、結果は同じであり、ロータリーが潰されたことは間違いないのでありますが、ただ、このロータリー庶民化に就いて、特筆すべき人物がいます。

それは、大阪クラブの土屋大夢（本名元作）であります。

彼は、杉村楚人冠の先任者であり、ジャーナリストであり、学者であり、思想家でありました。米山梅吉さんが、東京と大阪との財界人の違和感を緩和するために大阪ロータリークラブへ入会させたと言われています。

彼は、古文書の研究をよくしたのであります。ペンネーム・イザヤベンダサン（著者名山本七平）が引用している【上州松代藩財政建て直しについての日暮綴り】の研究であります。

彼は、１９２１年９月、アメリカのナッシュビル・ロータリークラブ Nash Ville RC において、二宮尊徳翁の教えについて【ロータリー以前の偉大なるロータリアン】というテーマで講演を致しましたが、日本へ帰国後、これを英文で論文を書き、昭和３年に東京で開かれた第２回太平洋地域大会 Regional Conference で発表したのであります。その内容は、職業奉仕論でありました。

これは、二宮尊徳翁（1787～1856）の教えを引用し『田畑を耕すに先立って心の田畑を耕せ』という日本人の心にピタッと来るような奉仕哲学の解明をしたのであります。

これは、戦前のロータリーにおける大きな功績でありました。

この英語の論文を翻訳して、昭和９年のＲＩ第７０地区大会で、村田省蔵ガバナーが、ロータリーを日本の土壌に親しむように提唱したこと通じて、戦前のロータリアンの中に段々と浸透して行ったのであります。要するに、二宮尊徳の教えは、一杯の神道、半杯の儒教、仏教の融合である。自然観察、自然の法則を理解せよと説いたのであります。このようなことを通じて、ロータリーの日本化の提唱がなされていたのでありますが、結局、軍閥の弾圧という国家権力によって全ては灰燼に帰したのであります。

19.『ロータリーの日本化』その１

日本ロータリーの３代目村田省蔵ガバナーの特筆すべき業績として、ロータリーの日本化の提唱があります。これは、当時の軍閥の弾圧に対する対策論の意味もあったと思われますが、国粋主義的ロータリー理論を提唱したのであります。

ロータリーの日本化の問題については、村田ガバナーは、昭和９年にこのスローガンを掲げるときに、昭和３年に土屋大夢が二宮尊徳の考え方を引用して提唱した【ロータリー以前の偉大なるロータリアン】の考え方があるが、この考え方に戻れば、これ即ち職業奉仕の開発になる、と説いたのであります。

確かに、ロータリーには、バタ臭いところがありますので、この限りでは、彼の提唱は、決して間違っていないのであります。

また、昭和１１年の第８回地区大会では、「大連クラブのロータリー宣言」を翻訳して、これをもって、国際大会で、綱領の改正を求めてはどうか、という意見も出しているのであります。

ところで、ロータリー日本化の風は、西から吹いたと言われています。即ち、
東京ロータリークラブは、一等国の首都として、いち早くシカゴやロンドン等と肩を並べることを急がなければならなかったのでありますが、大阪ロータリークラブは、ロータリーを日本の社会へ同化させることに主眼をおいて努力していたのであります。

このように、東京・大阪それぞれの行き方の違いが現れていますが、何れをよしとする問題ではないのであります。

また、村田ガバナーは、ロータリーソングも英語のものではなく、日本人が作ったものを唄うべきであるという提唱をしています。

これが実ったのが昭和１０年のことでありました。実は、昭和５２年に直木パストガバナーから頂いた手紙によりますと、この提唱に原動力を与えたのは、実は、１９１４～１５年度の国際ロータリークラブ連合会会長であったFrank L.Mulhollandでありました。

彼は、昭和５年、神戸の地区大会にRI会長代理として出席して曰く。
『私は、ロータリーは、あくまでも世界のロータリーであって、アメリカのロータリーではないと思う。したがって、アメリカナイズされるのには反対である。

今、英語でロータリーソングが唄われたが、何故日本語の歌を唄わないのか、と聞いたところ、日本語の歌では権威がないと言うことであったが、そのようなことでは困る。

私は、各国におけるロータリークラブが、それぞれその国の風俗習慣によって行われることを希望する』と説いたのであります。

Frank L.Mulhollandは、ロータリーの理論を説くについて、一頭地優れていたと言われているだけに、流石であります。その後、５年の歳月を閲して昭和１０年、日本語のロータリーソングが生まれるに至るのであります。即ち、昭和１０年５月５日、京都朝日会館で地区大会が開かれ、８２３名が参加しました。

この大会で、京都・祇園の歌舞練場で東久邇宮殿下御臨席のもとに、新作の日本語のロータリーソングが発表されたのであります。

20.『ロータリーの日本化』その２

前回は、村田省蔵ガバナーの提唱するロータリーの日本化の一環として日本語のロータリーソングが作られ、昭和１０年の地区大会で披露されたことを話しました。第１位は【旅は道連れ世は情け、情けは人のためならず】という歌でありました。

この歌は東京クラブの杉村広太郎作詞、同じく東京の吉住小三郎作曲でありましたが、後に著作権侵害の事実が出てきましたのでロータリーでは唄わなくなりました。

第２位は、地区大会などロータリーの公式行事では必ず唄われる【奉仕の理想】。この歌は京都クラブの前田和一郎作詞、東京の萩原英一作曲であります。

第３位は、【平和を人の世に植え、親愛の心はぐくむ】という歌。これは神戸の田崎慎治作詞、名古屋の早川弥左衛門作曲でありますが殆ど唄われていません。

第４位は、【我らの生業】。東京音楽学校教授高野辰之作詞、東京音楽学校講師岡野貞一作曲にかかるものでありますが、この歌は、今もよく唄われています。

さて、【奉仕の理想】については色々と逸話がありますので紹介しておきます。

作詞者前田和一郎という人の職業分類は染料販売でありまして、昭和15年に、ロータリーが軍閥の弾圧によって解散する直前に、京都クラブが国際派と国粋派の二派に割れて例会場も別にした時の国際派の大将格でありましたが、戦後、日本のロータリーがＲＩに復帰したとき、国際派も国粋派も節操がない、自分は、あくまでも純粋なロータリアンで生涯を終わりたいと言って二度とロータリーに戻らなかったという中々骨のある人でありました。

また、この人はポール・ハリスの肖像画を油絵で描いて京都クラブ事務局に寄贈しています。

なお、【奉仕の理想】の曲は、作詞者前田和一郎さんが、当時、東京ロータリークラブの会員で上野音楽学校の作曲科の教授であった萩原英一氏に頼んで作曲してもらったそうであります。

実は、前田和一郎さんについては、神戸東クラブの末正久さんの興味深いエピソードがありますので紹介しておきます。

それは、関西千種会の前身の兵庫千種会が１９７６年３月６日神戸国際ホテルで開催されました。テーマはロータリー日本史であり、講師は高松クラブの三宅俊三先生（外科）でありましたが、そのフォーラムで末正さんから聞いた話であります。

実は、末正さんはクラブのシンギング委員長を２０数年間しておられたのでありますが、昭和４５年頃、この歌はどのような動機で作ったのか、その頃のロータリーの情勢はどのようなものであったのかを作詞者前田和一郎さんに聞こうと思って調べたところ、兵庫県の豊岡ロータリークラブに前田和一郎さんの甥に当たる武田好弘氏（職業分類は、電磁器製造）がいることが判ったのであります。

そこで、武田好弘さんに紹介してもらおうと思って、手紙を出したところ、前田和一郎さん自身から直接、４００字詰め原稿用紙４枚くらいの返事が来て吃驚したそうであります。それにはこの曲が作られた経緯や作詞者の思いなどが記されていてロータリー日本史の貴重な資料なのでであります。その詳細は次号に。

21.『ロータリーの日本化』その３

前回申し上げた「奉仕の理想」の作詞者前田和一郎さんから末正さんに来た返事は次のとおりであります。即ち、『私は、昭和１５年の解散命令の時にロータリーを辞めて、その後復帰していない。ロータリーを辞めて３０年以上になるが、誰もロータリーの話を聞かせてくれない。私は、もう長い間半身不随で老妻と寝たきりの生活をしている。ところへ、君から、このような手紙をもらって非常に嬉しい。

昭和１０年に京都で第７回地区大会があった。昭和９年の末頃、私は、ロータリークラブの唱歌委員長をしていた。

ある日、お前も出てこい、と言うので、何事ならんと思って行ってみると、村田省蔵ガバナー、石川芳次郎大会委員長（国旗掲揚・国歌斉唱の慣例を作った時の会長）、そして田辺隆三ホストクラブ会長というお歴々がいた。

「今日は一体何事ですか」と聞くと、「今まで日本で唄っている歌は英語の歌ばかりだから、日本語の歌を作ろうと思っている。そこでお前は唱歌委員長なんだから、そんなもの位作ってみろ」と命令された。私は、とてもそんなことは出来ないと固辞したが、下手でもよかったら作りましょう、ということになってしまった。

そこで、唱歌委員長の経験から、あまり長い文句や難しい文句では、皆が唄ってくれないし、歌も２番３番とあるようなものはだめだから、１番だけの歌を作ろう、ということであの歌が出来た。それでも後から「久遠の平和」だとか「業」などは難しすぎるとクラブ内から文句が出た。しかし、兎に角、杉村楚人冠作詞の【旅は道連れ】と共にコンクールで当選して、祇園の歌舞練場で東久邇宮殿下御戴臨のもとに発表式があり、殿下から直接賞品を授与された。その時、神戸からは、直木太一郎氏、沢田清兵衛氏、湯浅恭三氏が来ていた。

結論としては、「御国ニ捧ゲン吾等の業」のところが、自分は寝ていても気になって仕方がない。もう戦争も済んで、平和国家になったのだから、末正さん、是非一つ、これは「世界ニ捧ゲン吾等の業」と変えるように君から宣伝してくれないか』と書かれていました。

末正さんは、『後で聞くと、この手紙が最後になって、１ヶ月後に前田さんは亡くなられた。

そこで、自分は、「世界ニ捧ゲン」と変えてくれということを、自分に対する前田さんの遺言のように受け取っている。ところが、他クラブへメイクアップに行ったときにそれを唄おうと思うが、彼奴は、文句を知らんのか、と思われそうで、恥ずかしくて実は未だ実行していない』と言っておられました。

その後、私が日本全国の千種会で、この末正さんの話をしましたところ、その後、東北のロータリアンから、我々の地域では「世界ニ捧ゲン」と変えて唄っているという報告を受けております。

因みに、昔の神戸東クラブのロータリーソングは、例えば、高知の宮本ガバナーが公式訪問で来れば【よさこい節】を唄ったり、卓話者が早稲田大学の出身者であれば【都の西北】とか、鉄道記念日であれば、【汽笛一声新橋を】とかを唄ったりして、相手を見て臨機応変にやるので中々ユニークであります。

22.『日本ロータリーの精神伝統』その１

今日は日本ロータリーの精神伝統についてお話しします。これは地区管理が始まる直前のエピソードであります。昭和３年に東京で第２回太平洋地域大会 Regional Conference が開かれました。Regional Conference というのは国際ロータリーが不定期に開催する大会であり、第１回はハワイのホノルル。第２回は昭和３年に東京。第３回は昭和１０年にフィリピンのマニラで開催されています。これは、その当時の国際大会開催地から遠い地域である太平洋沿岸諸国のロータリアンの親睦と勉強のための大会であります。東京大会には１０カ国から５６８名が参加しました。

ところで、この第２回太平洋地域大会 Regional Conference のホストクラブは東京ロータリークラブでありました。大会経費を試算してみますと約２００万円は必要でありました。これは当時、大学卒の初任給が約６０円でしたから大金であります。ところが、東京ロータリークラブは、ロータリアン個人としては、それぞれ実力百万石の金持ではありますが、クラブとしては会費のみによってその経費を支弁するのが原則であり、ニコニコ箱その他の寄付を強制することは出来ません。したがって、クラブ自体には金はありません。しかも、現在のロータリーのようにロータリアンから大会経費として金を取り立てるなどという悪智恵は全くありません。

更に、米山さんなどは、金持ちだとは謂っても入ってくる金を全て世のため人のために使ってしまいますから個人資産の蓄えもなく、任意の寄付も出来ません。

そこで、当時は団体奉仕の思考が未だ定着していませんでしたので、ロータリアン達は、漠然と個人奉仕を考えていたのであります。

したがって、どのようにしてこの大会経費を捻出すればよいのか？皆が鳩首協議をしているところへ後に至って日本の４代目ガバナーになる朝吹常吉さんが来ました。朝吹さんは、皆が困っているのをみて『私がその２００万円を出しましょう。但し、一つだけ条件があります。私が金を出したことを金輪際口にしないことであります』と言われたのであります。このようにして、朝吹さんのお陰で、太平洋地域大会は成功裏に幕を閉じることが出来、日本のロータリアンは面目を保つことが出来たのであります。これひとえに朝吹常吉の男気によるものであったと記録に残っているのであります。

では、朝吹さんは金を出したことを金輪際人に言うなと言ったのに何故世の中に知られることになったのか。それは、朝吹さんが亡くなられたお通夜の席で初めて当事者から皆に打ち明けられたのであります。

ところで、朝吹さんと米山さんとは、非常に対照的な金の使い方をした人でありました。米山さんは、入ってくる金を片っ端から世のため人のために使ってしまいましたが、朝吹さんは、平素はダムの水のように貯めておいて、ここぞという時にダムの水門を開くように一気に大金を使ったのであります。

しかし、二人に共通している点があります。それは、世のため人のために秘かに奉仕をして自分が金を出したことを決して人に言わなかったことであります。この陰徳陽報の教え即ち、隠れたる徳行はいずれ明らかなる報いがあるという教えは、古来、日本ロータリーの精神伝統の一つになっているのであります。

23.『日本ロータリーの精神伝統』その２

前回は、日本ロータリーの精神伝統の一つに陰徳陽報の教えがあると申しました。

陰徳陽報というのは、淮南子にある言葉で「陰徳あれば必ず陽報あり」即ち、人知れず善行を積んだ人には、必ず善い報いが目に見えて現れるという意味であります。この出典である淮南子というのは、中国の老子と荘子の説に基づいて説かれた漢の時代の著書であって２１篇からなっているものでありますが、謂わば「人間訓」とも謂うべきものであり、人間についての深い洞察を説いているものであります。

この陰徳陽報の教えについて米山梅吉さんは、『ロータリーは、隠れたところに仕事がある。それは隠れているから妙味がある』と謂っています。陰徳陽報という言葉を使わずに、このような平易な表現でロータリーの原理を説いているのは流石だと思うのであります。

そこで、この具体的事例の一つを挙げますと、昭和の初め、大学に入学したものの父親が亡くなって学資に困っている学生のことを或る人から伝え聞いた米山さんが「学資はいくらほど要るのですか」「毎月３０円位です」「それは最低限度でしょう。私が６０円出しましょう。但し、私が金を出したとは、金輪際言わないで下さい。或る篤志家から、とだけお伝え下さい」と言って、毎月学資を貢がれたという話が残っています。当時、大学卒の初任給は３０円くらいの頃でありましたから、６０円は大金であります。

やがて、１９４７年、米山さんがこの世を去られたとき、その学生は或る大学の教授になっていましたが、間に立った人が「あなたの学生時代に学資を貢がれた人は、このたび亡くなられた貴族院議員米山梅吉先生ですよ。せめてお葬式くらいには行かれた方がよいのではないですか」と知らせましたので、その人は取るものも取り敢えず駆けつけたといわれています。このようにして米山さんが人知れず苦学生を助けた例は、誠に枚挙に暇がないのであります。

最近のロータリアンの中には、陰徳陽報どころか自分を売り込むことを考える人が増えているかに思われます。しかし、人に知られるということは決して悪いことではありませんが、知られたいと思う心は未だ満たされない心であり、卑しい心であります。したがって、これはロータリアンの心ではないと思うのであります。

実は、この陰徳陽報の教えは、個人奉仕を原則とするロータリーの奉仕の根本に関わる問題なのであります。この点は、団体奉仕のライオンズの奉仕の在り方とは根本的に異なり、非常に対照的であります。即ち、ライオンズクラブは会員であるライオン個人として奉仕するのではなく、ライオン個人の金を集めてライオンズクラブというクラブとして奉仕をします。したがって、団体奉仕なのであります。

これに対して、ロータリーは、一人ひとりのロータリアン個人が自分の金や労力を使って奉仕をするのであります。したがって個人奉仕であります。これが原則でありまして、例外としては、１９２３年のセントルイスの国際大会のおける決議第２３－３４号に至って初めて例外的に団体奉仕が認められているに過ぎないのであります。このことを肝に銘ずべきであります。

24.『クラブ例会のもつ意味について』その１

クラブ例会のもつ意味については、先ず、クラブとはそもそも何ぞやというところから話に入って行きたいと思います。そこで、クラブ発生の歴史を詳述することは当面の目的ではありませんので、これについては、クラブと呼ばれる社交団体が歴史上発生したのがイギリスにおいてであること、その最古のものはヘンリー４世の時代（１５世紀前半）のことであったことを知れば十分であります。

この最古のクラブは、今日の所謂ダイニングクラブであり、社交上の名士が食事を囲んで親交を深めたと謂われています。

さて、イギリスでクラブ活動が圧倒的に盛んになったのは１７世紀のことであって時恰もエリザベス１世時代の経済的発展を経て、１７世紀のイギリスの国家的大動乱が国王対国民という形で進められていた時のことであったことは興味深いことであり、イギリスの国民達が国家に対する考え方を交換する場としてクラブを利用したことも興味深いことであります。

また、当時しきりに設けられたコーヒー店に知名の人士が集まり、これが人々の親睦の意見交換の場としてのクラブの発達を助長したのであります。このようにしてクラブは、政治的、文化的、経済的その他千差万別な人々のアイデアの交換の場として用いられたのであります。ロータリークラブが創立当初からアイデアの交換・発想の交換をクラブの重要な機能としていた根拠はここにあるのであります。

そして、１８世紀中葉になると、クラブはイギリス以外の欧米諸国にも発展し、１９世紀以降になると、クラブ組織も一般的なものから特殊目的なものや特殊階層的なものになる傾向があり、例えば、文筆家だけのクラブや、女性専用のクラブやスポーツクラブに至るまで様々なクラブが発生するに至ったのであります。殊に、１８８３年創立のアレクサンドリア Alexandria は、イギリス女流社会の貴婦人のみによって組織されていたことで有名であります。

このようなクラブというものの特質を大雑把に分析しますと、第１に親睦団体であります。したがって、会員同志の融和が第一の目的でありますから、会員同士はお互いに平等対等の地位が保障され、会員間の権力服従の関係は一切ありません。

したがって、会員に対する統制的要素は殆どないことが一つの特色であります。

第２に、会員組織を維持するために何らかの形で限定会員制を採るものが多く、そのクラブに所属することがその会員の社会的地位を示すような配慮が為されています。この中で最も厳格なのが１８世紀後半の "The Club" であり、これは文芸人ら１２名をもって組織され、後に４０名に増員されて今日に至っています。これには、スウィフトやエドマンド・バークのような偉大な小説家や政治哲学者が会員となり、ここの会員に選ばれることは非常な名誉とされているのであります。ロータリークラブも、当初は一業一会員制の原則を採用して限定会員制を採りましたが、"The Club" のように厳格なものでないことは先刻御承知のとおりであります。ただ、クラブというものは、その会員資格や組織維持の規則が厳格であればあるほどその魅力を増すものであることを忘れてはならないと思うのであります。

25.『クラブ例会のもつ意味について』その２

前回は、一般的にクラブというものの特質を大雑把に分析しますと、それは第１に親睦団体であり、第２に、限定会員制を採るものが多いとを申しました。

そこで、親睦団体であることの具体的な意味内容は一体何かと申しますと、先ず、クラブ例会というものは、クラブ会員だけの水入らずの親睦の場であるということであります。したがって、原理的には、会員以外の者は例会場に入ることを許さない、即ち、会員の家族のみならず配偶者と雖も例会場に入ることを許さないがのが原則であります。例えば、１８８３年創立のイギリス貴族社会の女性の社交クラブ Alexandria に、或る時、皇太子が突然訪れて例会場に入ろうとしましたが、入口にＳＡＡが頑張っていて、只今例会中であるとの理由で絶対に会場内に入れなかったのであります。これは、クラブ例会というものが会員だけの水入らずの親睦の場であり、且つ会員同士の神聖な発想交換の場でありますから、例会中は何人も入場を許さないのであります。したがって、会員と雖も例会中はＳＡＡの許可がないと入場できないのが原則であります。これはクラブというものは、不意の闖入者によって例会の雰囲気が乱されるのを極度に怖れるためでもあります。

ただ、最近のロータリークラブの中には、家族例会などと称して、会員の配偶者や家族を例会に出席させるところがあります。これは会員と家族との親睦を図ることを理由としているようでありますが、家族との親睦は、例会とは別個の会合を企画・実施すべきであって、例会に会員以外の者を出席させることは、クラブ例会のあるべき姿を乱すものであり、原理的にはロータリーの衰退であります。

最近は、国際ロータリーも家族との親睦の企画を推奨しています。そのこと自体は誠に結構なことでありますが、どのような方法で親睦の企画、立案、実施をするべきかについては、クラブ例会の原理と混同しないよう心すべきであります。

なお、家族例会もクラブ理事会の決議に基づいて行われるものでありますから、手続的には何ら問題はありません。しかし、手続が適正か否かということと、その実体が適正か否かとは別個の問題でありまして、手続的に問題がなければ何を企画してもよいということではなく、問題は、その企画がロータリーの原理やクラブの原理に反しないか否かを何時も心に留めておくべきでなのであります。

次に、クラブ例会というものは、そのクラブの会員だけのための例会ではないということを肝に銘ずべきであります。このことは、ロータリーがメイクアップ制度を採用していることからの当然の帰結であります。例えば、伊丹クラブの例会は、伊丹クラブの会員だけのための例会ではなく、それは同時に全世界のロータリアンのための例会でもあります。

何故なら、ロータリアンであれば、世界中の何処のクラブにも予め断ることなく、何時でも自由に出席できる特典を持っているからであります。このことを逆に言えば、伊丹クラブにも世界中のロータリアンが何時でも何の断りもなく突然に出席出来ることを意味するのであります。したがって、ロータリークラブの例会というものは世界に開かれた例会なのであります。これは、クラブというものが原理的に本来閉鎖社会であることの例外なのであります。

「栗を拾った話ー石門心学に学ぶー」伊丹RC卓話

2010.3.4

深　川　純　一

去る２月２７日の地区大会で石門心学の教育対談があり、その冒頭のビデオに子供が栗を拾った話がありました。それは、子供が山で栗を拾って帰ってきたところ、父親がその栗は人様の山に落ちていた物だから、すぐに返して来なさいと窘めて、その栗を山に返しに行かせたという話であります。

これは、石門心学の中核にある教えだとして、人様の物を取ってはならないという教えを子供の心に植えつける上で大切であるという話でありました。

勿論、これは正しいことであり、道徳教育としては欠くことの出来ない教えであります。このこと自体は、道徳上も社会倫理上も何らの疑念を差し挟む余地はありません。と一応は考えられます。しかし、果たしてそうなのか、これが絶対唯一無二の真理なのか。

他に考え方はないのか。というところからロータリーの思索は始まるのであります。

ロータリーのバイブルと謂われた１９２３年度のＲＩ会長ガイ・ガンディカー Guy Gundaker の著書「ロータリー通解」によれば、「ロータリアンは思索する人でなければならない」と説かれています。では、私達ロータリアンはこの問題についてどのように考えればよいのでしょうか。

先ず、栗は自分の物ではない、人様の物だから山へ返すべきだということは、自分の物と他人の物とを峻別する論理が前提となっています。この峻別の論理は本来、西洋の論理であります。自分の物は他人の物ではない。

他人の物は自分の物ではない。即ち、自他を峻別する論理であります。

しかし、この峻別の論理は、果たして絶対的なものなのか。私達２１世紀の人類社会の全てに当てはまる万古不易の論理なのでしょうか。例外はないのでしょうか。

この峻別の論理は、一つの物については一つの所有権しかない、ということでありますが、日本の社会には一つの物に二つ以上の所有権が併存するという所有形態があります。

それは村の山林などについての入会権即ち、村の人であれば誰でもその山の果実を取ることが出来る権利であります。これは共同所有形態の「共有」に対して「総有」と呼ばれています。

例えば、昔から日本の地域社会の慣習として、子供が山の柿の実を取ってもそれを許す文化がありました。また、柿の木の上の方にあるか木の実は敢えて採らずに残しておく、それは鳥達のために残すという文化がありました。

これは、人様の栗を採ることは悪いいことだとしながらも、子供が小さい時にはそれを許す、そして子供が成長して物心がついて是非の弁別が出来るようになれば他人の栗を採ることは許されないことだと解って、それをしなくなるだろうという考え方であります。

私は、これを包摂の論理だと考えています。

しかし、石門心学の論理は、社会的に許されないことは子供の時から厳しく躾けるべきだという考え方であります。どちらの考え方がよいのか。見方によれば、石門心学の論理は、法の世界の論理であり、子供を許す論理

は倫理の世界の論理であるとも言えます。

ロータリーは勿論、法の世界にあるものではなく、倫理の世界にあるものでありますが、さて、どう考えるべきでしょうか。

今、自分の物と他人の物とを峻別すると謂いましたが、そもそも自分の物というものなどあるのでしょうか。自分の物について絶対的な所有権を認めることは、紀元後３世紀に制定された古代ローマのローマ法にある原理であり、それ以来、１７００年の歳月を閲して今日の日本民法第２０６条にまで規定されているところであります。所有権とは、自分の物を自由に使用、収益、処分する権能を謂うと定義されています。これは、自分のものと他人のものとを厳然として区別する、所謂峻別の論理であります。

しかし、この論理は法の世界であります。

これに対して、ロータリーは倫理の世界であります。倫理の世界では如何に考えるべきか。

例えば、著作権とか、特許権は、自分の著作に就いて、それを権利として守り、その権利は自分だけの物だとして、他人の権利を排除します。

しかし、どのような著作物も、その人が独力で開発した物など在る筈はありません。その著作は、先ず自分を産んでくれた両親あってこそのものであり、その著作を作る能力は両親から授けられたもの、更に謂えば神仏から授かったものであります。のみならず、その著作は、学校の先生をはじめ、会社や業界、地域社会の先輩、同輩初め沢山の人達のお陰であります。このように考えれば、自分一人の能力で作りだしたものなど何もありません。したがって、謙虚に考えれば自分のものなどというものはなく、全ては全体のものなのであります。私が原則として自分の著作を出版しないのは、自分の物などはないと考えているためであります。

では先程の人を許すという文化について、日本の文化の中で育ってきた私達ロータリアンとしてはどのように理解すればよいのでしょうか。

ロータリーは、元来、アメリカで育った文化であります。では、そのアメリカで育った文化を私達日本のロータリアンとしてはどのように理解すべきなのか。

謂うまでもなく、このことは先ずアメリカのロータリーの歴史に学ばなければなりません。アングロサクソン文化の支配するアメリカは、キリスト教文化の世界であります。キリスト教は一神教であり、神を信ずるものだけが救われ、信じないものは蛮族という考え方であります。そして、キリスト教やイスラム教は、厳しく戒律を定め、それを守るべきだとして、その戒律を破ると例外なく罰せられる信賞必罰の原理主義社会であります。このような原理主義社会には、人を許すという文化はありません。勿論、日本にも刑罰はありますが、アメリカと異なり死刑から執行猶予まで大きな幅があります。

御承知のとおり、日本は一神教ではありません。日本人は無信仰者が多いとも謂われますが、宗教心はあります。したがって、無信仰というよりも寧ろ多神教であります。人間のみならす、動物や一木一草に至るまで佛の心が宿っているという考え方であります。したがって、例えば、私達多くの日本人は、キリスト教、マホメット教、イスラム教のような特定の宗教一つだけを信仰するのではなく、日本人の宗教心、宗教観には、各人それぞれに、仏教、儒教、神道、キリスト教その他諸々のものが混在しています。したがって、

アメリカのように日曜日には皆が必ず教会に行って唯一の神に祈るという慣習はありません。平素はそのような儀式は何もしないのに、正月には神社仏閣に初詣をし、春と秋の彼岸には先祖の墓参りをし、盆には、墓参りや寺参りをします。猟師は鮎供養など平素自分が殺生している魚や動物の供養をします。そして、クリスマスには教会に行ったり、家庭でお祝いをしたりします。要するに、一神教ではありませんから、特定の宗教を信仰することはありません、何でもよいのであります。

したがって、一神教のように厳しく戒律を守ると謂うこともありません。逆に言えば、戒律を破ったものには信賞必罰で望む原理主義社会ではなく、罪を憎んで人を憎まず、即ち、人を許す心があります。その代わり、日本文化の中には、自分の行動を規律する心構えとして、例えば、「お天道様が見てござる」だから悪いことはしない、という考え方があります。

要するに、無宗教といわれる日本人の宗教観は、キリスト教、イスラム教その他諸々の宗教を超えたもの、即ちこの宇宙を統べてある大いなるものを信じています。したがって、これらの日本人は、キリスト教のような特定の宗教は信じなくとも、その大いなるもの、それを神と謂ってもよい、佛と謂ってもよい、自然の摂理と謂ってもよい、要するに、森羅万象を統べて在るその大いなるものを信じていますから、その他のことはどうでもよいのであります。この大らかな心、動物のみならず一木一草に至るまで佛の心があるという、全てを包摂する大きな心、ここから人を許すという文化が生まれたのではないかとも思うのであります。

では、一神教を信奉する原理主義のアメリカには、人を許す文化はないのか、というと、実は、アメリカに育ったロータリーには、人を許す文化があります。そして、それを自覚したのは、敬虔なクリスチャン、ポール・ハリスでありました。

それは一体どういうことかと申しますと、それはロータリー奉仕哲学の中核に在る思想でありまして、これは約３時間位かかる可成り長い話になりますので、今日はその一部分だけを申し述べます。即ち、

１９０５年、ポール・ハリスは親睦を説いてロータリークラブを創りました。そして１９０７年、ロータリーは世のため人のための奉仕と謂うことを自覚しました。そこでポール・ハリスは、奉仕を親睦より高次元のものと考え、親睦を軽視したのでクラブは荒れ続け、これは１９１０年に全米ロータリークラブ連合会の創立により一応終息しました。そこでポール・ハリスは自分の過ちを反省した結果、ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿ると大悟したのであります。即ち、『親睦と奉仕とを等位の概念として捉えるべきであった。この両者は、ロータリークラブという社会制度において表裏一体の関係にある。いずれを優先させてもいけない。親睦と奉仕の調和の中にロータリーが宿る』と。このことを大悟した時に、将にロータリー思想の原点が確立されたのであります。

ポール・ハリスは、この時の気持を全米のロータリアンに訴えるべく論文を書きました。これが有名な論文 "Ratioinal Rotarianism" であります。これは、合理的な立場から考えると、ロータリーの思考というものは、どのような特徴を持った思考なのか、と謂うことを解説したものであります。ところで、"Ratioinal Rotarianism" においてポー

ル・ハリス曰く

『自分は、ロータリーの創立者として、神様の思し召しにより、一段と高いところに登ることを許され、ロータリーとは何かを問われれば、自分は躊躇することなく、【寛容】tolerationと答えるであろう』と。

これがポール・ハリスのロータリー理論、ロータリー＝寛容論であります。したがって、彼は『ロータリーは、親睦と奉仕との調和の中に宿る』と説いたわけであります。ロータリーとは、寛容である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。寛容な心を持つこと。自分の考え方を人に押しつけてはならない。人を責めるな、過ちがあっても人を許す心を持つこと。ロータリーはこのような思考の世界の中にある。これがポール・ハリスのロータリー理論でありました。

私は、ポール・ハリスが説いた「ロータリー寛容論」は、実は非常に東洋的な発想に基づくものと思うのであります。何故なら、初期ロータリーの１９１５年のサンフランシスコの国際大会で採択された「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」は、第１１条の「黄金律」に象徴されるように非常にキリスト教の色彩の強いものでありましたが、実は、ポール・ハリスの提唱した「ロータリー寛容論」は、その思想を越えるもののように考えられるからであります。

哲学者田中忠雄先生の説によりますと、イギリスの世界的な論客アーノルド・トインビーは『キリスト教的不寛容では、現代の対立を救い得ないという発想から、アジアの精神的基盤に人類の運命の希望を繋ぐ』ということを謂っています。

殊に、アジアの精神的基盤である「禅」の神髄は明らかに「寛容」にあります。それは、多くの流派を擁しながら度量の狭い縄張り争いをしたことは非常に少ないのであります。

禅の訓練は峻烈を極めたものではあっても、なお仏陀の慈悲を背負っています。慈悲とは他者の身になって感ずるという人間最高の能力のことであります。それが正に「寛容」ということの真義なのであります。

私は、昨今の国際社会、殊にアメリカを中心とする様々な対立の状況を見るとき、誠にアジアの寛容こそは今や世界救済の原動力でなければならないと思うのであります。

また、昔、イタリアのアンドレ・オッティ首相は、マルタ島で開かれた世界宗教者会議において、『宗教家は、「寛容」と謂うことを説くが、自分を絶対視して相手を許すというのは「寛容」ではない』と言い切っていますが、誠に傾聴すべき見解であると思うのであります。

「寛容」について哲学者田中忠雄先生は、仏陀の教えにある「一水四見の譬え」ということを説いておられます。これが判ると人間は度量が大きくなって「寛容」になれるようであります。その要旨は次のとおりであります。

先ず、「天人」は水を珠玉と見るというのであります。その意味は、天人が羽衣で水面を羽ばたくと水滴が飛び散って玉となり、七つの色に光るというのであります。したがって、天人にとっては、水が珠玉に見えるのであります。

ところが「鬼畜」は、水を血と見ます。その意味は、鬼畜が水に入ると、忽ち七転八倒して苦しんで死にます。したがって、鬼畜にとっては水が忌まわしい血に見えるのであります。

これに反して、「龍」は水を宮殿と見ます。

龍にとっては水ほど住みよい場所ありませんから、龍にとっては水は金殿玉楼であります。

もし、誰かが龍に向かって、「お前の住んでいるその宮殿は、実は流れているのだよ」と言えば、龍は「そんな馬鹿なことがあるか」と笑い飛ばしてしまうでしょう。

そして、最後に、「人間」は水を水と見るのであります。

そこで、道元禅師は「随類の所見不同なり」と謂われたのであります。「天人」「鬼畜」「龍魚」「人間」という具合に、それぞれ類に従って見るところが違うのであります。したがって、人間も自分達が水を水と見るからといって、他の種族も同じく水と見なければならないと強制することは出来ません。人間も、やはり多くの種族の内の一つにすぎないのであります。人間だけが「水それ自体」とでも謂うべき客観的真理を知っているわけではありません。これを道元禅師は、「本水なきが如し」と言われたのであります。

珠玉でもなく、血でもなく、宮殿でもなく、水でもなく、本水（本当の水）というようなものが別にあるわけではないのであります。

仮に、そのようなものがあるとしても、どうして人間がそれを知ることが出来るでしょうか。人間が知るのは、やはり「随類の所見」の一つとしての水に過ぎません。

然るに地上の人間は、随分思い上がって、宇宙を自分中心にばかり考えます。便所の糞壷が汚いものだとばかり思いこんで、それが、ウジ虫達にとっては無上の楽園であることを忘れています。

この思い上がった独りよがりの人間中心主義の思想が根本になって、人間の間にも独りよがりの「非寛容」が出てくるのであります。

宇宙が人間の為に存在するかの如く錯覚したのと同じ原理で、世界や社会は一民族、一国家、一階級のために存在するかの如く思いこんで行動します。そこに、救われ難く対立する「二つの世界」の葛藤が生ずるのであります。

刻々に起こる国際的並びに国内的な一切の問題は、例外なく「一水四見の理」で動いています。左とか右とかの色分けで、自分の主張を絶対化し、自分だけが正義だと思いこむ悪習から速やかに脱却する必要があると思うのであります。したがって、正にアジアの道に参ずるべきであります。東洋思想には本当のゆとりがあると思うのであります。

ところで、１９１０年、ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る、したがって、ロータリーは寛容であると大悟したポール・ハリスは、自ら敬虔なクリスチャンであり、キリスト教の「非寛容」の世界に住む人でありました。にも拘わらず、彼が敢えて東洋的な「寛容」の哲理を説いたということは誠に驚くべきことだと思うのであります。この意味において彼は偉大なる思想家であると思うのであります。

このように致しまして、ポール・ハリスが１９１０年、『ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る』と大悟した境地は、まさに「ロータリーの真髄」に当たるものなのであります。

重ねて申し上げます。『ロータリーとは寛容である。親睦も大切だが、奉仕も大切。奉仕も大切だが、親睦も大切。したがって、寛容な心を持つこと。決して自分の考え方を人に押しつけてはならない。人を責めず人を許す心をもつ。このような思考の世界の中にロータリーはある』これがポール・ハリスの

ロータリー理論でありました。

以上、今日の話の冒頭に申し述べました１９２３年度のＲＩ会長ガイ・ガンディカーGuy Gundakerの言葉「ロータリアンは思索する人でなければならない」と謂うことについて、石門心学の「栗を拾った話」をモチーヴに私の思索の一端を申し述べた次第であります。御静聴有り難うございました。

あ と が き

思い起こせば「純ちゃんのコーナー」発足のきっかけは２００１年の規定審議会で1業１会員制が多会員制へ変更となり、標準クラブ定款にとらわれないパイロット・プロジェクトの試行（e-クラブ）等、ロータリーの根幹を揺るがす決定が行われたことにあります。今年度も規定審議会開催年度で、そのパイロット・プロジェクト(ｅ－クラブ)は今や、各地区に2クラブまで認められた状況となっています。更に近年、経済社会では職業倫理に反した経済活動が世間の非難を浴び、一般社会に混迷を引き起こしています。
こうした社会情勢の今こそロータリーは本来の原理・原則即ち「ロータリーの心」を正しく理解し、地域社会に貢献することが求められています。
ＰＡＲＴⅨとなる今年度「純ちゃんのコーナー」は昨年に引き続き「永遠の課題・職業倫理」に始まり「日本のロータリー」等幅広く掲載されています。
今後とも、折に触れ、頁をめくって頂ければ幸いです。
最後になりましたが、深川純一先生の長きに亘るご厚意に心より御礼申し上げます。そして、発刊にご尽力頂いた前年度：武内利凞会長、松本輝明幹事、事務局の吉永恵子さんに深く感謝致します。

2010年7月　　伊丹ロータリークラブ　雑誌・ロータリー情報委員会

純ちゃんのコーナー
（ロータリー３分間情報）
Part X

目　　次

1.『ＳＡＡについて』その１ …… 2
2.『ＳＡＡについて』その２ …… 3
3.『ＳＡＡについて』その３ …… 4
4.『ＳＡＡについて』その４ …… 5
5.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１ …… 6
6.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その２ …… 7
7.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その３ …… 8
8.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その４ …… 9
9.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その５ …… 10
10.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その６ …… 11
11.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その７ …… 12
12.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その８ …… 13
13.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その９ …… 14
14.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１０ …… 15
15.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１１ …… 16
16.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１２ …… 17
17.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１３ …… 18
18.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１４ …… 19
19.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１５ …… 20
20.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１６ …… 21
21.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１７ …… 22
22.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１８ …… 23
23.「四大奉仕の活性化」 …… 24
24.「職業奉仕の原点」 …… 32

序　に　か　え　て

十年一昔と謂いますが、竹中秀夫会員の発想で始まったこの３分間情報「純ちゃんのコーナー」も早くも十年の歳月を閲しました。そして、この十年の間に国際ロータリーの動向も、かなりおかしくなりました。殊に、規定審議会の多数決原理による衆愚政治は、はっきり言って救いがたい情況にあるとも言えます。それだけに私は、正しいロータリー情報を根気よく発信する必要を痛感しています。

私達は、国際ロータリーが如何に衰退しても、自分達のロータリークラブは自分達で守らなければなりません。これがクラブ自治権であります。正しいロータリー運動、ロータリーの本来あるべき姿を守ることは、ロータリアン一人一人に課せられた義務であります。何故ならば、ロータリーというものは、将に２０世紀初頭の先輩ロータリアン達が開発してきた素晴らしい智慧の結晶であり、先輩ロータリアンからの預かりものであります。したがって、この「素晴らしきもの・ロータリー」を現在に生きる私達がしっかりと受け継ぎ、未来のロータリーへ譲り渡す義務があります。

現在、国際ロータリーが提唱しているＣＬＰその他様々なルールの問題は、将に現象の問題に過ぎません。したがって、現象の問題に一喜一憂することは愚かなことであります。私達ロータリアンは、常に現象に惑わされず、物事の本質を見抜く力を失ってはならないのであります。

ロータリーは本来如何にあるべきか、というロータリーの本質（核）にあるものをしっかり守らなければなりません。

例えば、２００１年の規定審議会で廃止になった一業一会員制の原則についても、これは、必ず一業種から５人を採らねばならぬという問題ではありません。一業種から何人採るかはクラブ自身が決めることであって、将にこれは、クラブ自治権の問題であります。ＲＩが干渉すべき問題ではないのであります。

規則的例会出席の原則について緩和されたルールも、これを守らなければならぬというものではありません。守るか守らないかは、個々のロータリアンの倫理の問題、思想・良心の自由の問題であります。したがって、個人として昔の厳しいルールを自らに科すということも自由であり、そのようなロータリアンが居てもよいのであります。因みに、私は出席免除会員などには金輪際なる気はありません。生涯、正会員であり続けたいと思っています。

最後に、この一年間、私の拙い話を辛抱して聴いて下さったクラブの皆さん方の友情と寛容に心から感謝を申し上げますと共に、このパンフレット発刊に御尽力を賜りました竹中秀夫会員、山村幸夫会員はじめクラブ事務局の皆様に心からなる感謝を捧げてペンを擱きます。有り難うございました。

２０１１年9月２２日　　深　川　純　一

1.『ＳＡＡについて』その１

元来、クラブという組織の管理原則を原理的に割るときは三つの尺度を立てるのであります。これは会社や国家の組織を考える場合も同じでありまして、このように原理の大きな柱を持って三つに割るという躾を何時も持つべきであります。

即ち、第１に審議系列であります。これは原則を立てるところであります。国家で謂えば国会に当たります。この審議系列は自治権のある団体には必ずあります。クラブではこの機関を理事会と謂います。標準クラブ定款第９条第１節『このクラブの管理主体はこれを理事会とする』というのがクラブ管理の大黒柱的な規定であります。

第２に執行系列であります。理事会が決めた原則は、執行しなければなりません。執行の中心人物をクラブ幹事と謂います。この他に会長、会計、ＳＡＡがあります。これら執行系列の問題は、クラブの役員の役割分担の問題であります。

第３に、審査系列であります。これは、色々な争い事が起こった時に、争いに最終的に決着をつける機能であり、総会がこれに当たります。

さて、そこでＳＡＡというのはSergeant At Armsの略語でありまして、ロータリーの組織管理上は執行系列に属します。ＳＡＡは、既に１９０６年のシカゴクラブに正式な職制として登場しています。当時は、ポール・ハリス、Max Walf、Charles A. Newtonの３人が組織管理の原則を作っていましたので、ＳＡＡもこの３人の何らかのアイディアの交換の中から生まれたものと思われるのであります。

ＳＡＡは、会場監督と訳されていますが、これは元来、中世イギリスの宮廷における官職の一つでありまして、当時この役職は宮内大臣権限をもっていましたから、中世の宮廷における最高の権力者の一人でありました。したがって、ＳＡＡは、宮廷内の会議、宴会等が計画され実施される時に、その会議の目的を遂げるがために会議の秩序を維持する最高の責任者でありました。

そこで、ロータリーにおいても、例会や会議や宴会等は、特定の時に、特定の場所に、特定の人達が集まりますが、それぞれ皆、主体性を尊重された一国一城の主であります。しかも生身の人間でありますから、例会の途中で何が起こるか判りません。したがって、ＳＡＡは、そのような突発的な事態に速やかに対応しなければなりませんから、審議系列である理事会に席を持って、プログラムを企画立案する場に居ることは望ましくないのであります。何故かというと、理事会で予断を持っていると執行機関としては動きづらいことがあるのであります。したがって、ＳＡＡは、原理的には、理事を兼ねてはならないのでありまして、ある意味では、ＳＡＡは、即戦即決の単独決議機関なのであります。標準クラブ定款第９条第４節によれば、『ＳＡＡは、細則の定めるところに従って、その全員または一部が理事会のメンバーであってもよいし、そうでなくてもよい』と規定しており、職務上の理事であるか否かはクラブ理事会の決するところによるということになっています。しかし、原理論からすると、ＳＡＡは、理事会に席を持ってはならないのであります。

要するに、ＳＡＡは執行機関たる性格を貫くべきであります。幹事が職務上の理事であるのとは任務の性質が違うのであります。

2.『ＳＡＡについて』その２

前回は、ＳＡＡは、標準クラブ定款上は、理事会に席を持っても、持たなくてもよい、詰まり職務上の理事であるか否かはクラブ理事会の決するところによるということになっているが､原理論からすると､ＳＡＡは、理事会に席を持ってはならないと申しました。何故ならば、ＳＡＡは、執行機関たる性格を貫くべきだからであります。

ＳＡＡは、その責任が重く、その地位高きが故に、理事会の決定に参加している暇はないのでありまして、自分が予備的に独断で決定することができるのであります。

例えば、第１に、ＳＡＡは、例会の時間配分について監督する権限があります。会長の挨拶が長引いた場合、会長に発言中止を命令できるのはＳＡＡだけであります。

第２に、元来、ＳＡＡには例会中の途中退席・途中入場を禁止する権限が与えられていたのであります。即ち、病気その他特殊の事情によって途中退席する人は、ＳＡＡの許可を得なければなりませんでした。途中退席・途中入場にＳＡＡの許可を求めるのが紳士のマナーに叶うからであります。

次に、ＳＡＡについては、標準クラブ定款第９条第４節に職務上の理事に関する規定がありますが、この規定は、ヨーロッパ大陸法と英米法とでは原則の立て方が全く異なるのであります。即ち、大陸法では、職務上の理事というものは一旦理事会に席を持てばその限りでは理事会メンバーでありますから、理事会で意見を述べ、決議権を行使できるのであります。日本の法体系はこの大陸法であります。

ところが、英米法では、職務上の理事は職務によって理事会に居るだけでありますから（本来、ＳＡＡは執行機関であり審議機関ではありませんから)、理事会で意見を述べることは出来るが決議権は行使してはならないことになっているのであります。

したがって、原理的には、執行権と審議権とを峻別する英米法の方が合理的なように思われます。しかし、理事会に席を持って意見は述べるが、決議権は行使できない、しかし理事である、というのは、頭の整理からしますと出来の悪い処理の仕方であります。頭の整理からしますと、大陸法の方がすっきりしているのであります。即ち、職務上の理事は、一旦理事会のメンバーになった以上は、理事と同一の権利を有し義務を負う。したがって､決議権も行使出来る、という方が頭の整理にはよいのであります。

実は、この問題は、どちらの法制度がよいかという問題ではなくて、この種類の事態を処理するために考えられる二つの方法に過ぎないのでありまして、二つの可能性が並び立つと考えればよいのであります。

そこで、実利的には英米法（ロータリーの立場）の方がよいと考えられます。即ち、ＳＡＡは執行機関であり、理事会は審議機関の中心でありますから、審議機関である理事会で原則を定立するときは、執行機関であるＳＡＡは、一歩下がって客観的に理事会の原則の定立を見守るのであります。

そして、理事会が原則を定立した以上は、ＳＡＡは、理事会が決めた原則を（これは自分が決めた原則ではないのだから誰に憚ることもなく）専ら執行することに専念することになるのであります。この方がＳＡＡが動きやすいのであります。

3.『ＳＡＡについて』その３

前回は、ＳＡＡの「職務上の理事」の規定の解釈について、英米法と大陸法の考え方があることをお話し申し上げましたが、ではこの規定を具体的なクラブ運営についてどのように理解するべきかという問題があります。

例えば、１８８３年に創立されたイギリス上流社会の貴婦人の社交クラブ・アレクサンドリアに、イギリスの皇太子が途中入場しようとしたところ、ＳＡＡが、『只今、例会中でございます』と言って断固として入場を拒否した例があります。これは、クラブというものは、途中入場・途中退席によって会議の雰囲気が乱されることを極度に嫌うからであります。

ただ、最近は、例会出席の６０％ルールを誤解して、例会時間の６０％在席すれば、途中退席する権利があるなどと考える人が多いようでありますが、これは大変な誤解でありまして、６０％ルールは、あくまでも病気その他の特殊の事情のある人が途中退席したときに出席と認められるための最低の条件にすぎないのでありまして、途中退席の権利を認めたものではありません。

本来、ロータリークラブは、社交クラブでありますから、クラブに出るか出ないかは、会員の自由であります。そうだとすれば途中退席も自由な筈であります。したがって、もし会長が例会場に鍵をかけて皆が退席できないようにすると、刑法上は不法監禁罪になります。

ところが、ＳＡＡが鍵をかけた場合は不法監禁罪にならないのであります。何故かというと、刑法第３５条に『正当な業務による行為はこれを罰せず』と規定されていてＳＡＡが、鍵をかけることは、現場の秩序を維持するための正当な業務行為であると認められるからであります。これはＳＡＡだけに認められた権限なのであります。

このようにＳＡＡの職務は大変重要でありますから、ＳＡＡには、元会長、元幹事等のロータリー経験の深い人が就任するのが通例であります。

要するに、ＳＡＡの地位は高いと言うことを認識しなければなりません。したがって、ＳＡＡの職責の重要性を認識しないとＳＡＡの数が不足します。

一般的に言って、例会の秩序維持というＳＡＡの職責の重要性からすると、ＳＡＡはクラブの会員総数の１０％プラスアルファーが必要であります。

これはガバナーの指導と助言事項であり、例えば、５０人のクラブであれば、６～７名のＳＡＡが必要であります。例会場の各テーブルに一人ずつ副ＳＡＡを配置します。そして、副ＳＡＡの一人か二人は会長経験者であることが望ましいのであります。

ロータリー経験の深い人の意見を背後にして会員と対応するので、クラブの現場の処置が非常にうまく行くのであります。私がガバナーの時の伊丹クラブでは、６０名の会員に対してＳＡＡの数が１２名でありました。これも素晴らしい一つの考え方であります。

4.『ＳＡＡについて』その４

前回は、例会の秩序維持がＳＡＡの最重要な職責であることを話しました。私の知っている限りでは、鹿児島の或るクラブは最古参のパストガバナーが正ＳＡＡを務めておられました。これほどＳＡＡという職務は、クラブにとって重要であることを認識すべきであります。

以上を要するに、ロータリーの世界は、ロータリアンがどのような役職を務めようとも、ロータリアンの上にロータリアンを作らず、ロータリアンの下にロータリアンを作ってはならないのであります。それは、ロータリーが果たさなければならない役割の配分でありまして、些かなりとも、縦社会の上下の関係で考えてはならないのであります。このような万人平等・対等の人間構造がロータリーという組織体の論理なのであります。

そして、自分の出番の時に、その持ち場で最高絶対の権限を行使することによって、生き生きとした例会を作ることが出来るのであります。したがって、もし、クラブの現場が死んでいるとすれば、それはＳＡＡの責任であります。もし、クラブの管理がうまく行かないとすれば、それはクラブ幹事の責任であります。そしてもし、ロータリーの理論が行きわたらないとすれば、それは、クラブ会長の責任であります。

以上がＳＡＡについての原理的な話であります。そこで、最後に実践的な話を少し致します。前回、イギリスの社交クラブ・アレクサンドリアの例を挙げて、クラブというものが不意の闖入者によって例会の雰囲気が乱されることを極度に嫌うものであることを話しましたが、実は、このような例会の秩序を乱すものは、途中入場者や途中退場者に限りません。例会中の私語も例会の秩序を乱す最たるものなのであります。これは、喋っている本人としては、ヒソヒソと話しているつもりでありますが、皆が静かにしているだけに実によく聞こえるのであります。伊丹クラブのこの会場も声がよく透ります。殊にヴェテラン会員が私語をすると他の会員に示しがつきません。

そこで、このような事態にＳＡＡとしては如何に対処するべきか。通常は、例会の数カ所に配置された副ＳＡＡが間髪を入れず直ちに対応しなければなりませんが、その方法はどのようにするべきか。このことについて私達の先輩達は色々と智恵を絞っています。例えば、鈴を鳴らす方法があります。伊丹クラブにもその鈴がある筈であります。昔、尼崎北クラブの三宅博さんが贈って下さいました。ただ、鈴は、例会に響き渡るから良くないという場合は、「私語は皆さんのご迷惑になりますからお慎みください。ＳＡＡ」と書いたメモを予め用意しておいて誰にも判らないようにソッと渡すのもよいかと思います。このようにすれば皆で気持ちの良い例会が過ごせると思うのであります。例会は人生の道場であることを肝に銘ずべきであります。

5.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１

世界社会奉仕という概念がロータリーの世界に現れたのは、今からほぼ５０年ばかり前の１９６２年でありました。それは、戦争という国家間の利害の対立の中で個人の善意をもって解決すべき奉仕の実践である国際奉仕のほかに、第二次世界大戦後、国家間の利害の対立を越えて戦争では決着のつかない新しい問題が出て来ました。所謂、南北問題であります。ロータリーは、この問題に対するロータリアン個人の善意の働きかけの分野を１９６２年から世界社会奉仕ＷＣＳと呼んでいるのであります。

したがって、この世界社会奉仕という概念は、国際奉仕とは必ずしも原理的には共通の基盤を持たないのであります。原理的に見ますと、世界社会奉仕ＷＣＳは、国際奉仕というよりは、むしろ社会奉仕の範疇に属するものなのであります。

さて、今、世界が激しく変動していることはご承知のとおりであります。私達は、既に日本という一国だけでは生活出来ないことを実感としてもっています。そこで、先ず、第２次世界大戦後、現在に至る状況を簡単に顧みますと、戦後は、ＧＡＴＴ体制によって、アメリカを中心とした経済体制が世界中である種のパターンを占め、アメリカの世界的責任という形で進められてきたのであります。即ち、先進工業国が世界の責任を持っている社会でありました。

ところが、１９７０年以降，アメリカとソ連のイニシアティヴが失われた時に、第３世界からの発言が自然に強くなってきました。

それは、第３世界の国々が同じように経済的な権利を主張するようになったとき、今までのように特定の国だけが利益を得るのではなく、開発途上国も同様に経済的なシェアーを受けなければならないという宣言をして、世界もこれに同調しなければならない動きになったのであります。そこで１９７３年、アルジェリアで非同盟諸国首脳者会議が開かれて、二つの宣言がなされました。

先ず政治宣言がその一つ。これは、超大国の取引の中で世界の平和があるのではなく、一つ一つの本当に平和を願った国々が勝ち取ったものこそ本当の世界の平和である、と宣言したのであります。これは、やがて１９７５年、ヴェトナム戦争として現れました。

次に経済宣言がその一つ。これは、自分の国から出る資源は、自分の国のものであり、したがって、その値段は自分で付けるという宣言であります。このことから世界の経済秩序が変わったことは周知の事実であります。１９７４年に日本も最初の石油ショックをうけました。

以上のような、１９７３年以降の世界の激動の中で、一方で One world problem 即ち一つの世界の問題という考え方が世界中に浸透しました。

これは、人口、食料、公害、平和等の問題は、全世界の問題であるというのであり、この一つの世界の問題を解決しようという声が第３世界から起こったのであります。したがって、昔は力で抑えることの出来た国連の舞台では、大問題であったわけであります。

6.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その２

前回は、１９７３年以降の世界の激動の中で、一方では、One world problem 即ち、一つの世界の問題という考え方が世界中に浸透して行きました。

これは、ロシアの核廃棄問題やタンカーの重油流出事故のように公害、平和、人口、食料等の問題は、自分の国だけの問題ではなく、全世界の問題であるというのであります。

そこで、この一つの世界の問題を解決しようという声が第３世界から起こって来たために、昔は力で抑えることの出来た国連の舞台が大きく変わったということを申し上げました。

このような世界の動きの中で国際社会を動かす主体もまた変わりました。従来は、国家や多国籍企業でありましたが、その後、そのほかに、民衆乃至ＮＧＯ（Nongovernment Organization）が大きな役割を果たすことになってきたわけであります。ＮＧＯというのは、例えば、赤十字、世界宗教連盟、グリーンピース、ＹＭＣＡ、ロータリー等であります。

アメリカがヴェトナム戦争で信頼を失い、ソヴィエトがチェコ侵略で信頼を失ったとき、第３世界からの発言が自然に強くなり、その結果、国際関係を形成していく主体は、最早、国家ではなくて民衆である、と考えられるようになったのであります。例えば、１９９０年代のソヴィエト連邦の主権の崩壊は、民衆の力に負うところが大きいのであります。

このようにして、一つの世界の問題 One world problem の考え方は、言い換えますと、『世界の問題を考えるとき、一人一人の人間を大切に考えていかなければ世界の問題は考えられない』という考え方であります。

実は、ロータリーは、１９７０年代におけるこのような状況 One world problem 一つの世界の問題を既に１９６０年代にいち早く予測して、その対応を自覚していたのであります。

それは、１９６０年以降、国家の対立を前提としないグローバルな世界社会というものの見方から来る実践の分野があるのではないか、という自覚が出てきたのであります。即ち、国際社会から世界社会へという考え方の発展であります。

その前駆的症状として、１９６２年度の国際ロータリー会長ニティッシュ・ラハリー（Nitish C.Laharry）の Oneness of the world の提唱、即ち、『世界中の何処かの片隅に一人でも不幸な人が居る限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることが出来ない。

心の中に火を燃やそう！Kindle the spark within！』という有名なターゲットによる世界社会奉仕の自覚に始まり、１９６３年度の国際ロータリー会長カール・ミラー（Carl P,Miller）の Matched district 地区提携というプログラムを経て、１９６６年度の国際ロータリー会長リチャード・エヴァンス（Richard.L.Evans）の時代に世界社会奉仕ＷＣＳ（World Community Service）というプログラムを実践するに至るのであります。そこで、一体、世界社会奉仕という考え方は、どのようにして出てきたのかという話に入ることになります。

7.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その３

前回に引き続き、世界社会奉仕 World Community Service（ＷＣＳ）という考え方は、一体どのようにして出てきたのか、という話に入ります。

先ず１９５１年、第３次世界大戦の緊張が高まるに及んで国際ロータリー理事会は、『世界平和の樹立を目的とする国際奉仕の実践の８原則』というものを宣言しました。これは、誠に素晴らしい宣言でありました。

しかし、この文章は大変難しかったので、国際ロータリーは、１９５３年にこの『８原則』を事例をもって判りやすく解説して『平和への七つの道』Seven paths to Peace を発刊したのであります。

この『平和への七つの道』をロータリーの原理に則って解説しますと、これはクラブ奉仕論の投影であることが解るのであります。ロータリーの奉仕の基本類型はクラブ奉仕でありますから、クラブ奉仕の原理パターンが判れば、その外部的投影が職業奉仕であり、社会奉仕であり、国際奉仕であることが解るのであります。即ち、第１．『ロータリアンは、自分の所属する国の固有の伝統に誇りを持つべきこと』即ち、日本人は、日本固有の文化伝統（社会的伝統、宗教的伝統、経済的伝統等）に誇りを持たなければなりません。

私達は、先祖代々、天照大神の時代からリレーのように精神的な法脈というものを伝えてきました。そして、各世代に亘って、皆真面目に生きてきたのであります。したがって、私達は現在の時点に立って、私達の先輩達が積み重ねてきた日本固有の文化の伝統の尊さというものを誇りを持って理解する努力をしなければ、国際奉仕というものは考えられません。したがって、外国かぶれは厳に慎むべきであります。

このことの一例として、１９３０年の日本の地区大会において１９１４年度の国際ロータリー連合会会長 Frank L.Mulholland が、ロータリーソングも日本語で唄うべきだと諭したのは傾聴すべき見解であります。『自国の諸々の伝統に誇りを持つべきこと』日本人は日本の文化伝統が世界一だと思うべし。アメリカ人は、アメリカの文化伝統が世界一だと思うべし。と謂うことは詰まり、各国の国民は各々自国の伝統が世界一だと思うべしということであります。そうだとすると、国家の数だけ最高の文化伝統があることになります。ところが、自国の伝統が最高だと思えば他国に対する優越感に結びつきます。

そこで次に、第２．ロータリーは、『自国の伝統に誇りを持つが故に、他国民の伝統に対して優越感を持つべからず』というのであります。

これをクラブ奉仕の原理に当て嵌めますと、ロータリアンは、職業分類によって示されている自分の職業の伝統に誇りを持つべし、となります。したがって、ロータリアンの数だけ最高の伝統があることになります。そこで、自分の職業の伝統に誇りを持つが故に、他の職業人の伝統に対して優越感をもってはならない、ということになるのであります。ここから出てくる次の原則は次号に申し述べます。

8.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その４

前回に引き続いて『平和への七つの道』をロータリーの原理に則って解説します。前回の第１．第２．の原則から出てくることが、第３．『他国民の伝統に対して、謙虚に頭を垂れて学ぶ姿勢を持つべきこと』と謂うのであります。ロータリアンは、クラブ例会では謙虚に頭を垂れて何かを学び、そして例会を去る、ということであります。

クラブ奉仕の原理としては以上で終わるわけでありますが、最後に、これは老婆心のこととして、第４．『国際社会の中で個人奉仕で実践するべきこと』と謂うのであります。しかし、国際社会は、大海原のように広いので、正に絶望的であります。にも拘わらず個人奉仕で実践しなさいというのであります。

即ち、ロータリーで個人奉仕ということは、因縁の熟したものから実践するべきことを意味するのであります。因縁が熟さないのに無理をして、背伸びをして実践しても何の効果もない、因縁の熟したものから個人奉仕で実践しなさいよということであります。最近は、金を集めては、団体奉仕で実践したがる傾向があります。

以上が『平和への七つの道』のあらましであります。何はともあれ国際ロータリー理事会は、第３次世界大戦が起こりそうな緊張が高まるに及んで、その予防のために誠によい原則の提示をしたのであります。

しかし、全世界のロータリアン達は、その意図するところを正しく理解することが出来ませんでした。

では、そのままどうして決着がついたのかと言いますと、この緊張は、ケネディとフルシチョフの米ソ両巨頭が「イデオロギーから発生する問題は、他人の存在がなくなるまで自分の存在を相手に押しつけない限り、戦争にはならない」という共存共栄の原理を自覚したことによって決着がついたのであります。

そこで、このような大国の指導者の認識によって、第３次世界大戦の勃発というものは、今後は小さな鍔迫り合いはあっても、世界大戦にはならないと考えられるようになりました。

要するに、これからは地球を破滅に導くような世界大戦は起こらないのではないか、という状況になりましたが、そうなると国際奉仕の要請というものは、必ずしも戦争の勃発を前提とするものではないけれども、戦争勃発の可能性が遠のけば、国際奉仕の実践の危機感というものは、多少薄れてくるのではないか、と思われるようになったのであります。それが１９６０年位のことであります。

ところが、ここに、従来とは全く別の重大問題が起こって来ました。それが所謂「南北問題」であります。

具体的にそれは一体どういうことなのかということについては、長くなりますので次号以下に順次申し述べたいと思います。

9.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その５

前回は、冷戦の終結とは全く別の重大問題即ち「南北問題」が発生したことを申しました。では、具体的にそれは一体どういうことなのか。現在の日本は、人類の歴史上、昔の如何なる王侯貴族にも勝る生活をしています。にも拘わらず、私達にはなお不平不満があり、社会福祉が充実していないとか政治が悪いなどと全く反省せずに暮らしています。

しかし、世界を広く見渡しますと、私達の想像を絶するほどの惨めな生活をしている人達が沢山います。例えば、私達が豊かな生活をしているこの瞬間にも、アフリカその他の発展途上国では、５歳以下の子供が１時間に５００人位も餓死し、毎日１３００人以上がエイズで死んでいると謂われています。また、アフリカでは、毎年８０００万人の人が食べるものもなく飢えて死んでいるとも謂われています。

このように、地球の一方には豊かな民族が居る半面、他方には生きるか死ぬかの瀬戸際にいる極貧の民族が居ます。この極貧の民族は、全世界の人口の８割に達しています。これが現在の世界の状況であります。

この状況を放置しておいてよいのか、まさに重大問題であります。

そこで、少し古い話になりますが、今から約５０年位前にブラジルの国際経済学者がこの問題について警告を発しました。

それは、『地球上の富の８０％は、僅か２０％の先進国の富める民族の独占するところとなっている。これに反し、８０％の開発途上国の貧しい民族には、残りの富の僅か２０％しか与えられていない。少数の民族が地球上の富を殆ど独占し、他の民族は赤貧洗うが如き生活を余儀なくされている。

更に問題は、開発途上国の人口の増加率は、目に余るものがある。したがって、事態がこのままに推移すれば、開発途上国の人口が急増して、これらの人達を生かすために先進国がどんなに食糧を増産しても２０年後には地球上に大飢饉がやってきて、先進国の繁栄を永続化することは出来なくなる』と謂うのであります。

果たしてこの警告通り、その２０年後にインドとアフリカに大飢饉が到来しました。

この対応策としてブラジルの国際経済学者は、『地球全体を一つの社会と考えて、先進国の国民が個人として自分の責任において開発途上国に行き、その国民に対して、人間の人間たる所以は、人と人との関係を強化すること、人と人との協力関係の尊さ、というものを教える、つまり自立心を育成して、しかも何物をも求めずに帰ってくる、即ち個人の Volunteer 活動乃至奉仕活動が必要である』と説いたのであります。

この話は、約５０年前の当時においては、国際感覚のないロータリアンや一般人には、甚だ奇異の目をもって見られていたのであります。

ところが、ロータリーは、世界的な組織でありますから、ブラジルの学者の提唱の７，８年前に既にこの問題を指摘していました。

10.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その６

前回は、ブラジルの学者が南北問題の対応策を提唱したと申しました。

ところが、ロータリーは、世界的な組織でありますから、ブラジルの経済学者の提唱の７，８年前に、既に『平和への七つの道』Seven paths to Peace の中に、南北問題に関して指摘した一章が出てくるのであります。

したがって、『平和への七つの道』というのは、実は、ロータリーが世界中の指導的な職業人を人間の善意によって結ぼうというグローバルな活動をしていますが、そのデータの中から後にブラジルの学者が提唱しようとするものを先取りする程の問題意識を持っていたということであり、これは私達ロータリアンの誇りとするところなのであります。

ところで、このブラジルの経済学者の話は、今から約５０年前には、非常に奇妙に聞こえるところがあります。何故かと言いますと、第１に、地球全体を一つの社会と考えるのでありますから風呂敷が大きすぎます。第２に、その対策として一人一人の先進国の人間が開発途上国に行って何かをするというのでありますから話の規模が小さすぎます。

したがって、これは奇妙奇天烈だというので、少なくとも効率を重んずる人達は、この考え方について行くことが出来なかったのであります。即ち、地球の問題や外国の問題は、元来、国家の仕事であって、国家は莫大な財力や武力も機動力も持っています。したがって、このような問題は、個人では何とも出来ない問題であるから国家が面倒を見るべきであると考えるのであります。

しかし、ブラジルの国際経済学者は、『国家では何ともならない、そこのところは既に計算済みである』と謂うのであります。

では、何故、国家では何ともならないのか。と言いますと、国が外国を援助するときには、国民の血税・税金をプールした公共財源を使いますから、国益に適うやり方で使わなければなりません。つまり、金を溝に捨てるような形で、損をするような形では、税金は絶対に使えないのであります。

したがって、例えば、開発途上国に２億ドルの借款を設定した場合でも、必ず利益が上がるようになっているのであります。

それは一体何故かと言いますと、借款を設定して相手国でダム工事や道路建設をする場合、その工事を請負うのは日本の建設会社でありますから、その会社が相手国の金即ち借款を設定した日本からの血税を全部もらって戻ってくることになります。そして、国はその会社から法人税を徴収するのであります。それから、海外における市場を確保することができます。

このような利益を計算しなければ、国は絶対に外国を援助すべきではないし、また、援助できる筋合いのものでもないのであります。つまり、国というものは、損をするような形で金を使うことは絶対にできません。したがって、国家では何ともならないのであります。

11.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その７

前回は、ブラジルの学者の南北問題の対応策について、国家は国益を考慮して金を使いますから国家では何ともならないと申しましたが、更に国の援助と言うものは、必ず紐付きであります。援助を受けた国はそれによって、かなりのものを失うことを覚悟しなければなりません。

その最たるものが、【ビアフラ戦争】であります。１９７０年頃、アフリカのビアフラで内乱が起こりました。反乱軍を援助しているのはソ連、政府を助けているのは、フランスとイギリス・アメリカであります。

ビアフラ人は、自分の国の内部のことでありますから、早く止めなければならないと思っても、金を出しているソ連やフランスの方がもっと頑張れと言って止めさせない。それで、最後まで戦って政府が倒れ、内乱は成功したのでありますが、大変な飢饉がやってきて３００万人が餓死したという事実があります。（フォーサイス著・“飢えと死の淵から”）

また、昔、西ドイツが未だシュミット首相の時代の古い話でありますが、首相が破産寸前のイタリアを救うために、返済の見込みのない２０億ドルの借款を与えようと議会に提案した時に、議会の猛反対に対してシュミット首相は、『イタリアの崩壊はヨーロッパ共同体の崩壊を意味する。ヨーロッパ共同体が崩壊すればドイツも危ない。したがって、ドイツが生き延びるためには、イタリアを救わねばならない』という論理をもって議会を説得したのであります。

やはり、他人を生かしてこそ自分の生きる道もある。共存共栄というのは、かなり厳しいところがあるのでありまして、このことも心に留めておかなければならないと思います。相手の身になって考えるということが非常に厳しいものであること、そして、その事がこれからの時代を生き抜く道でもあると思うのであります。

しかし、その西ドイツの援助の結果、イタリアはどうなったか。

イタリアの北部にガルダ湖という湖があり、そのあたりは、イタリアでも最高級の別荘地帯でありますが、その別荘地帯は、全て西ドイツの実業家の所有するところとなったのであります。

これを見ても判りますように、国の援助というものは必ず紐付きであり、援助を受けた国は、それによってかなりの物を失うことになります。

これは一体何を意味するのか。ブラジルの国際経済学者が指摘するように、国の援助と言うものは、貧富の格差の存在を前提とする南北問題では有害無益であるということであります。

したがって、先進国の国民が自分の責任において、開発途上国に行って自分の専門の小さな分野でよいから、彼等とスクラムを組んで、彼らの自立心を育てる、そして効果が上がれば、何物も求めずに引き上げてくるというボランティア活動が必要となるのであります。

実は、このブラジルの学者の考え方こそは、ロータリーの真髄に関する問題なのであります。

12.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その８

前回は、ブラジルの国際経済学者が説くように、先進国の国民が自分の責任において開発途上国に行き、自分の専門分野で彼等とスクラムを組んで彼らの自立心を育て、そして何物も求めずに引き上げてくるというボランティア活動が必要であると申し上げました。

実は、このブラジルの学者の考え方こそは、ロータリーの真髄に関する問題なのであります。ロータリーは、どんなに地球が大きくても『人類社会の基本は個人である』と考えます。これは大事な点であります。

人間社会の本質は一体何か。それは、地球の中心は、結局は、人間一人ひとりの自覚であります。今は、民衆が世界を動かすように、一人一人の人間の自覚が基本であります。ひたすら自分の内なるパーソナリティを高めていって、他人にもそれを慫慂します。このように一人ひとりの規模を大きくして、それらの心の通い合いをもって社会改良を目指すのであります。国の援助では何ともならないのであります。

この辺のところは、労働組合とかストライキとかいう団体の力を行使して社会を揺さぶろうなどという現象に惑わさますと、一人では何ともならないから皆で団結しよう、ということになります。しかし、些かなりとも自分というものについて自信のある人間は団結しません。

例えば、動物の社会を見ても、弱い鹿や縞馬は群れて団体行動をしますが、強いライオンや虎は群れることはありません。ポール・ハリスは、ロータリーは団結しないところに美徳があると謂い切っています。

要するに、一人々々の自覚が基本であります。只管、自分の内なるパーソナリティを高めて行き、他人にもそれを高めることを慫慂します。そして、その一人一人の規模を大きくして、その大きくしたものの心の通い合いというか、そのエネルギーをもって社会を改良しようというのであります。

実は、ブラジルの経済学者の提唱を純理論として図式化してみますと、個人奉仕の実践にピッタリ合うのであります。この広い地球社会の中で団体でなく個人で奉仕をしようというのであります。即ち、

第１に、地球を一つの地域社会と考えて、これをロータリーのテリトリーと考えるのであります。

したがって、世界社会奉仕と謂うものは、国際奉仕と謂うよりは寧ろ社会奉仕であります。

第２に、地球を一つの地域社会と考えるときに、そこに貧富の格差から来る社会のニーズ Community needs というものが存在します。

第３に、その Community needs に対して個人奉仕をもってその needs を解決しようというのであります。しかも、これは育てる奉仕であります。

そこで、決議２３－３４号第６項によると、先ず社会のニーズを調べます。そして、そのニーズに対する適切な奉仕として、個人奉仕を実践するのであります。そこで、これは将にロータリアンが取り組まなければならない問題だということになるのであります。

13.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その９

前回は、ブラジルの経済学者の提唱を純理論として図式化しますと、広い地球社会の中で団体でなく個人で奉仕をしようというのでありますから、ロータリーの個人奉仕の実践にピッタリ合います。そこでこれは将にロータリアンが取り組まなければならない問題であると申しました。そこで、国際ロータリーはこれについて色々と準備作業を始めました。国際ロータリーが動くときには、少しずつ動くのが原則であります。

先ず、１９６３年、ＲＩ会長カール・ミラーの時、地区の提携 Matched District から始まりました。これは、全世界のロータリークラブがそれぞれの地域状況というものをよく心得て居ますから、ＲＩが仲人となって、そのようなクラブとクラブとがお互いに情報交換をするところから、段々と視野を広げていこう、という作業を組み始めたのであります。

そして、１９６６年、リチャード・エヴァンス会長の時に、世界社会奉仕ＷＣＳという実践類型を確立するに到ったのであります。

地球と呼ばれる一つの社会に対して奉仕の実践を行う、ということであります。したがって、これは国際奉仕と謂うよりは、むしろ原理的には社会奉仕であります。そこで、ＲＩは何をしたかと謂いますと、実験をしようということになりました。

ところで、国際ロータリーレベルにおける役員というのは、会長、理事及び現ガバナーでありますが、現ガバナーは、地区管理で忙しいので予備役のパストガバナーを使おうということになりました。

そこで、数名のパストガバナーが選ばれ、これらの人達がＲＩの委嘱を受けて、南北問題を解決するために地球上のそれぞれの地域に派遣されたのであります。

日本からは、姫路の斉木亀次郎パストガバナーが、インドの或る地域へ行かれて、中小企業の経営相談をされました。斎木さんは、世界社会奉仕の実験に参加した只一人の日本人ロータリアンであります。

斉木さんが筆を執るときは、日本人ロータリアンの中で、米山梅吉氏、井坂孝氏を除けば、これ位美しい文章を書いた人はいない、といわれる位、文章のスタイルが美しい人でありました。

それから、斉木さんの思想、信条から申しますと、彼は敬虔な仏教徒でありました。

したがって、仏教の教理をもってロータリーの奉仕哲学を説いたという、大変見事なロータリーの解説をした人であります。

斉木さんは、この時の経験をもとにして【ミスターほてい】という本を大変美しい文章をもって書いておられます。但し、この本は、今日、殆ど手に入らないようであります。

斉木さんは、このほかにも幾つかの本を書かれましたが、その中でも【アホウ鳥よちよち歩く】という大変素晴らしい本を書いておられます。これは斉木さんがガバナー月信に毎月連載されたものを纏められたものであります。

14.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１０

前回は、斉木さんはじめ数人のパストガバナーがＲＩの委嘱を受けて世界社会奉仕の実験に参加されたことを申し上げました。

ところで、この実験では、或る人は南米のホンジュラスへ行って農業用灌漑技術を教えたり、或る人は初等教育を担当したりしました。

このようにして１年間の結果を集約したところ、ＲＩ理事会の期待にも拘わらず結果は明らかに失敗でありました。そこでＲＩ理事会は大変驚いて、当時ＲＩ理事会の下部組織としてあった世界社会奉仕委員会を廃止してしまったのであります。これは、実験が失敗に終わったので、残念ながら取り敢えず撤収しようということでありました。

では、何故失敗したのか。

第１に、それは、実験に参加した人達の心構えの問題もあったのではなかろうかとも思われるのであります。『我々は、功成り名遂げたロータリアンである。別に貴方達を助けなければならない因縁はないが、慈悲心によってここに来たのだ』という発想が私達の心の奥底にないかと謂えば、ないとは言い切れないのであります。これは、先進国の人達の悲しさでありまして、私達が、南北問題に取り組まなければならないときには必ず考えておかなければならない問題であります。このような発想が少しでもあれば開発途上国の人達は、一体どのように反応するかと言うと、開発途上国の人達にしてみれば、『何言ってるのよ。何時、自分達が貴方に慈悲心をもって此処に来てくれと頼んだか。慈悲心だか何だか知らないが、ああしろ、こうしろなど全く余計なお世話だ。帰ってくれないか。』ということになります。

人間というものは悲しいものでありまして、自分の内なる善意が必ずしも相手の心に伝わるかどうかは判らないのであります。

国際社会には、この問題がありますから相手と目の高さを同じにしなければなりません。

第２に、言葉の障害があります。したがって、こちらが善意で話したことを相手が悪意で受け取る場合があります。もっとも、このようなことは、同じ国の言葉でもあります。

第３に、風俗習慣、ものの考え方の相違もあります。原理社会と状況論理社会のように異民族社会の間では、誤解は付きものであります。

以上のような問題があって、慈悲心に名を借りたロータリアンの思い上がりがあると開発途上国の人達の反発を買うばかりであります。反発を買う原因は、上から下への恵む上下の奉仕だからであります。

ロータリーの奉仕は、上下の縦の奉仕ではなくて横の奉仕であります。これは、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕、全て同じであります。

世界社会奉仕にあっても、『私達は先進国の国民であるから汝ら承れ』という意識が少しでもあれば、奉仕というものは、永遠に実現されるものではありません。必ず、同じ対等の立場に立って、スクラムを組んで、『一緒にやろう』という意識が絶対に必要なのであります。

15.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１１

前回は、ＲＩが世界社会奉仕の実験をしたところ失敗であったこと、その原因が彼らと対等の立場に立たなかったことにあると申しました。これは、彼らの立場に立って、彼らがどんなに愚劣に見えても、彼らと同じ立場に立って一緒に行動しなければならないのであります。国際理解には、先ず人間の理解、詰まり思いやりの心が必要なのであります。

したがって、或る種の教育的手段を使って、開発途上国の人達に自立心というものを育てていく、そして、それが出来上がれば何ものも求めずに帰ってくる、というやり方が必要であったと思われるのであります。

ところが、パストガバナーの人達は、問題意識は高かったのでありますが、開発途上国に対する適切な方法を開発することが出来なかったがために、実験は失敗に終わったと思われるのであります。

このように、実験は失敗に終わったので、ＲＩは、One step back して、世界社会奉仕の純度を下げました。即ち、その純度の高さからすると、

１．地球を一つの地域社会だと考える。

そこに、

２．貧富の格差から来る community needs が存在する。

これに対して、

３．個人奉仕をもってボランティア活動をしよう。

というのでありますからこれは労務奉仕（個人奉仕）であります。

そこで、労務奉仕（個人奉仕）ということになりますと、金銭の投下による団体奉仕では世界社会奉仕の適切な実践にはなり得ない、ということを意味するわけであります。

しかし、個人奉仕で実験をしてみたところ失敗したので、ＲＩ理事会は、これからは団体奉仕、金銭奉仕で行こうということになったのであります。謂わば、個人奉仕、労務奉仕を本質とする本来の世界社会奉仕からその純度を下げたわけであります。

但し、ＲＩのライブラリー即ち、仲人機能を使おう、それが世界社会奉仕になる、という議論の整理をしたわけであります。

これが、１９６６年にエヴァンス会長が２度目の世界社会奉仕の提唱をしたときに新たに付け加えた第４番目の要素であります。即ち、

１．地球を一つの社会と考えるべきこと。

そこに、

２．貧富の格差から来る世界社会のニーズ World community needs がある。

３．これに対して、今度は個人奉仕ではなく、団体奉仕、金銭奉仕をもって、この World community needs を解決する必要性がある。

４．ただ、しかし、地球は広いのでＲＩがこの仲人になろう。

というのであり、これがエヴァンス会長が付け加えた４番目の要素であります。

即ち、ＲＩは、ライブラリーというものを持って、community needs を明らかにするクラブと、これに対して community service を提供するクラブとの間に立って、これの仲人をしようというのであります。

ただしかし、この考え方自体はよいのでありますが、果たしてＲＩにはこれが出来るだろうかという問題があります。

16.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１２

前回は、貧富の格差から来る世界社会のニーズに対してＲＩがライブラリーを持って、needs を提示するクラブと service を提供するクラブとの間に立って、これの仲人をしようというのでありますが、果たしてＲＩにはこれが出来るのかという問題があると申し上げました。その理由は、この種類の問題というのは、追跡調査が必要であります。したがって、兎に角仲人はしたのだから後のことは委せるというわけにはいきません。後のことについては、一体どのような community service が提供されて、どのような効果を挙げたのか。成功したのであれば、何故成功したのか。失敗したのであれば、何故失敗したのか。その原因の追究をしておかなければ無責任な一発勝負に終わってしまいます。

ＲＩは、元来ロータリークラブと同じように追跡調査が出来ない団体であります。

したがって、クラブの事業計画に取り入れられた社会奉仕については、出来るだけ単事業年度内、即ち１年以内に決着のつくものに限り、長期に亘って同じプログラムを取り組んではならない、ということになっているのであります。これは、元来、ロータリークラブには追跡能力がないことを示しているのであり、ＲＩも全く同じであります。したがって、ロータリーは、長期に亘るプログラムは個人奉仕で実践せよと言います。個人であれば、その人の執念のある限り追跡的に面倒をみることが出来るのであります。したがって、ロータリーの本質が個人奉仕にあるというのは、大変意味の深いところでありまして、団体奉仕では、一発勝負の線香花火的なことしか出来ないのであります。

したがって、ＲＩが仲人をするというエヴァンス会長の提案の最大の誤りは、追跡調査をしなければならない事業に対して、追跡調査の出来ないＲＩが仲人をしようとした点にあるのであります。仲人だけでは、何ともならないのであります。

ところが、ＲＩがライブラリーをもって仲人をしようというこの方法は、大きな欠点があります。何故かと言いますと、国際奉仕と世界社会奉仕という実践の類型の分け方が、貧富の格差是正を目的とする奉仕の実践活動では区別が出来なくなってしまうことであります。

例えば、フィリピンで水害のために米が足りなくなった時、或るロータリークラブが直接フィリピンのロータリークラブへ空輸しますと、これはＲＩのライブラリーを使っていませんから国際奉仕であります。

ところが、ＲＩのライブラリーを使って空輸しますと世界社会奉仕になります。しかし、送った米の量も米の受取人も同じであります。全く同じことをしていて、やり方によって奉仕の実践の呼び方が変わるのであります。このようにこの両者を区別することは出来ないのであります。

これは、結局、ＲＩの考え方の純度が下がったので、どちらでもよいような形になってしまったわけであります。もともと区別が出来なくなったのでありますから区別できる筈はないのであります。

17.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１３

前回は、国際奉仕と世界社会奉仕との区別について、ＲＩの考え方の純度が下がったので区別が出来なくなったということを申し上げました。

元来、世界社会奉仕は、個人奉仕という純度の高いものでありましたが、最初の実験に失敗した結果、個人奉仕から団体奉仕へと純度を下げたために国際奉仕と世界社会奉仕とが区別出来なくなったのであります。

この純度を下げた世界社会奉仕の日本での第１号は、【６６計画】というフィリピンの農村復興運動を援助しようというものでありまして、鹿児島のＲＩ３７０地区とフィリピンのＲＩ７１７，７１９，７２１地区が協力して、４地区内の９０００名のロータリアンが一人６６セントずつ金を出そうというもので、１９６６年の６月６日レイクプラシッドの国際大会で決定されたものであります。

ところで、世界社会奉仕の本来のものは個人奉仕でありますから、因縁が熟さなければ実践は出来ません。そして、私達にとっては未だ因縁が熟していないのであります。

したがって、開発途上国に行って個人奉仕で世界社会奉仕の実践をしようと思っても出来ないのであります。

しかし、出来ないことを恥ずかしいと思う必要はありません。全ての奉仕は何でも因縁の熟したものから実践すればよいのであります。

そこで、地球は広いので中には因縁の熟した人達もいます。例えば、オーストラリアのロータリアンが３ヶ月の有給休暇を利用して、パプアニューギニアに行ったところ、カソリックの神父さんが布教活動の一つとして、病院を建てて無料奉仕で現地人の医療救済をしておられました。

しかし、何もないところからボランティア活動をしていたので建物はボロボロでありました。そこで、そのロータリアンは、建築会社の社員でありましたので、一つ助けてやろうというので、３ヶ月の間に建物を修理して大変感謝されてオーストラリアに戻ってきたわけであります。

実はこのような種類の活動を国家的な活動にまで高めたのがＦＡＩＭ Fourth Avenue In Motion という運動になって発展するようになったわけであります。

これは、只単に、ロータリアンがこの種類の活動に金を出したというだけではなくて、ロータリアンが行なったこの種類の活動に対して、国民がその価値を認めて、活動資金をここにドンドンプールしてくるようになったのであります。そこで、或るロータリアンは、『俺はボルネオへ行こう』とか『フィリピンで中小企業を育てることを助けよう』とかいう具合に色々なことするようになったのが、このＦＡＩＭであります。

このＦＡＩＭは、１９６４年、ケイスホッパーパストガバナーの提唱したものでありますが、１９７７年、国際ロータリー理事会が正式プロジェクトとして承認しました。その時に、１９６５年のＩＰＡＣ（International Project Advisory Committee 開発途上国援助事業）も同時に承認したのであります。

18.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１４

前回は、先進国の実業家達がＦＡＩＭ Fourth Avenue In Motionという誠に立派なことをしていると申し上げました。そこで、やがて日本のロータリアンにも因縁が熟することは間違いないと思われるのであります。したがって、日本のロータリアンにとって世界社会奉仕というものは、近い将来の夢の実現の世界なのであります。

ただ、私達日本のロータリアンにとっては、未だ因縁は熟していませんが、この因縁の熟する機会は、突如としてやってくるかも知れないのでありまして、私達は心の準備をしてそれを待つだけの腹構えがなければならないと思うのであります。

以上が、世界社会奉仕についての原理の概要であります。

ところで、奉仕の実践の問題として世界社会奉仕の実現のための最大の課題は、南北問題の解決であります。そのためにはボランティア活動が必要であることは明らかであり、現実に献身している人達も居ます。

例えば、神戸大学の岩村昇博士は、開発途上国の人達に自立心を育てるためにネパールで２０年間にわたり結核の予防に献身されました。先生はロータリアンではありませんが、バングラディッシュに戦争が始まった時、難民が出たという話を聞いてネパールの草の根の人達と共にバングラディッシュへ行って難民のための給食センターを作りました。

ところが、世界中から援助を貰いすぎたため、上は大臣から下は給仕に至るまで、貰い得の乞食根性になってしまった結果、評判が悪くなり、援助がストップされました。

その結果どうなったか。給食センターが出来た村の子供達は、ドラム缶の粉ミルクが来なくなったので飢えて死んで行ったのであります。

ところが、給食センターが出来なかった鄙びた村は、元々自給自足でありましたので自立心によって生き延びることが出来たのであります。

また、カンボジアの難民キャンプの後をどうするかという国連の会議で、カンボジアの母親が言いました。『確かに緊急の時には世界中からの援助物資が有り難かった。給食センターへ空きっ腹で行きさえすれば、あてがい扶持がいただけたし、裸で震えている体を持っていけば、日本から来た古着をお仕着せしていただいた。しかし、緊急時が去った今、それだけでは駄目だということが判った。

何故かと言うと、家の娘は、もう７歳にもなったのに台所の手伝いが全然出来ません。カンボジアの村が平和であった頃には、母親の台所姿を後ろから見て、７歳にもなれば、手伝いが出来るのが普通でした。

今、平和になったカンボジアの村へ帰って、台所を作り、村を起こそうという時に、母親から娘に伝えなければならない生活の知恵の鎖がたちきれてしまっている。今から必要なのは、自分の人生を自分で作っていくという自立心です』と。このように、南北問題の解決には金銭奉仕・与える奉仕では全く効果がないのであります。

19.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１５

前回は、南北問題の解決には金銭奉仕・与える奉仕では全く効果がないということを申し上げました。したがって、開発途上国の人達が経済的に自立して行くためのまたボランティア活動がどうしても必要になります。

そこで、ネパールの草の根の人達自身のボランティア活動によって、自分達を貧困から解放し、飢えから解放するという自立のボランティア活動が、ネパールの僅かな村で起こった例を紹介しておきます。

それは、櫻井さんという日本人女性のボランティアの栄養士が播いた種が芽生えたものでありました。それはどういうことかと言いますと、ネパールでは、折角ＢＣＧを打っても、体内に免疫を作る材料になるタンパク質が足りないために免疫が出来ず、結核に犯されてしまいます。しかも、ヒンドゥー教徒は牛肉、回教徒は豚肉が宗教上タブーであります。そこで、岩村先生は、ネパールで誰でも食べられる大豆のタンパク質を何とか採り入れたいと櫻井さんに頼んだのであります。

櫻井さんは、９ヶ月間雨が降らない乾燥地帯、味噌も豆腐も作れないところで、苦心の結果、きな粉の活用を思いついてくれたのであります。

ネパールには、トウモロコシを火で焙り石臼で挽くトウモロコシコガシという食習慣があり、これとよく似た大豆蛋白のきな粉は、抵抗なくネパールの人達に受け入れられたのであります。

櫻井さんは、同じ女性として、女性の悩みがよく判ります。そこで、栄養失調の赤ちゃんを連れたお母さんと一緒に、掘立小屋に栄養教室を作りました。何時の間にか、この草葺き小屋がリハビリテーション・センターという英語で呼ばれるようになり有名になりました。

ビルディングでなく、草の根のお母さん達の台所と全く同じ草葺小屋であったことが、普及した第一の原因であります。何故ならば、センターで習ったことは、自分の家の台所でも直ぐ実践出来るからであります。センターで身につけたことは、生活の現場で、明日から直ちに実践できなければ、何もならないのであります。

櫻井さんがソッと手を貸したことによって、草の根のお母さん達は、自分で作ったトウモロコシコガシ、小麦コガシ、大豆コガシ（きな粉）の三種混合栄養食で、子供達を栄養失調から守ったのであります。そして、そのお母さん達の中からまたボランティアが生まれていったのであります。このように、開発途上国において病気や飢えを救済するには、自立のボランティア精神の種を播く以外に方法はないのであります。

自分の人生は、自分で責任がもてるように、自立心を育てていくことが絶対に必要なのであります。

したがって、絶対的貧困の社会へ行って、黒柳徹子さん流に『この子に愛を、この子にコインを』と言って集めた金で食料をいくら送っても、送られた間だけは食べることが出来ますが、長期的に慢性化した貧困は、金銭を与えるだけでは絶対に解決できないのであります。

20.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１６

前回は、長期的に慢性化した絶対的貧困の社会貧困では、金銭を与えるだけでは問題は解決できないことを申し上げました。そこでこの南北問題解決のためにＰＨＤ協会（PEACE・HEALTH・HUMAN DEVELOPMENT）があります。

これは、岩村先生にロータリーの第１回世界理解賞が与えられた時に、その賞金をもって設立された財団であります。

したがって、この賞金は、先生自身が使うのではなくて先生の働きを引き継いでいくリーダーシップを養成するために使うという条件がついているのであります。

では、具体的にはどんな仕事をしているのか、と言いますと、毎年、アジアや南太平洋から研修生を日本に招きます。それは、お百姓さん、漁師、村の女性等々であります。

但し、エリートは除きます。

何故かと言いますと、現地の人々の健康を守るには、人々を栄養失調から救い出し、絶対的貧困から救い出すことでありますから、草の根の人達自身に、食料を増産する意欲とか技術とかを持たせることが貧困を克服するためにどうしても必要だという考え方であります。

更に、何種類かの食事をとることにより、栄養のバランスがとれるという栄養と料理の知識と知恵を草の根の母親達が知ることが出来れば、８割の病気がなくなるという公衆衛生学上の計算からでもあります。

ところが、南北問題には、殆ど解決出来ない問題点があります。

ＰＨＤ協会の総主事であった故草地賢一さんの体験では、南の貧困は構造的なものだというのであります。

即ち、アジアの貧富の格差は、想像を絶するものがあります。例えば、スリランカの土地の６０％を僅か２％の人達が所有しています。この地主が、小作人に土地を貸して５０％の小作料を取ります。

ネパールでは、国民の１％の人達が９９％の土地を所有しています。

インドでは、国民の２％の人達が９８％の土地を所有しています。このように、僅か一握りの人のところへあらゆる物が集中していく構造になっているのであります。

このような世界で、貧しい人が経済的に力を持ち始めると、やがて、富裕な地主達は彼らを潰しにかかるのであります。

例えば、農薬を使わずに堆肥を使った有機農業方がよいことを学んで帰った研修生が自立して自分の畑を作ろうとしますと、開発途上国の地主と日本の農薬に関連する企業が絡んで、自立しようとする研修生を殺しにかかると草地さんは言うのであります。直接殺すのではなくて、交通事故で死んだように見せかけて彼らの命が奪われていくのであります。

このような視点から見ますと、社会構造が何処かで変えられなければ、人道主義的に現地へ行って何かをしてやるということでは、南北問題を根本的に解決することは出来ないことが判るのであります。

21.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１７

前回は、開発途上国の社会構造が何処かで変えられなければ、南北問題を根本的に解決することは出来ないということを申し上げました。

例えば、タイのチェンマイの東北にカレン人という少数民族がいますが、そこのコマ君は、日本で有機農業を学びました。

ところが、彼の住む村では、バンコックの金持ちがチェンマイの村人から米や野菜を作る畑を借りてトマトを作らせ、村人にそのトマト作りの賃金を支払っています。村人としては、自分の食べるものを自分の畑で作るよりも、チェンマイの金持ちから頼まれたトマトを作る方が、畑の賃貸料とトマトを作る労賃の二重の収入が入る訳であります。

しかし、そのためには収穫を上げるために農薬を使います。トマトは連作を嫌いますから次々と畑を移していきます。その結果、５年位でその辺の川に魚がいなくなったり、人々の健康が蝕まれてしまいます。

また、その農薬の被害を受けたトマトが日本に来て、トマトケチャップの材料になります。私達が、安いトマトケチャップを買って食べれば食べるほど村の畑が傷められ、人々は農薬の被害をうける結果となるのであります。（註）松本和正会員のアメリカのトマト栽培の話。

彼らの健康や自然が傷ついて行く代償の形で私達はトマトケチャップを使っているわけであり、この点に、国とか民族を超えた関係が出来上がってしまっているのであります。将に国際化社会であります。

ところが、農薬を使わない有機農業を学んで帰ったコマ君が畑を作ろうとする動き、即ち、タイの資本家のトマト畑では働かないという声に、このバンコックの金持達は、彼らを殺しにかかると言われているそうです。即ち、交通事故のように見せかけて彼らの命が奪われていくそうであります。したがって、これらが事実であるとすれば、社会構造が何処かで変えられなければ、人道主義的に彼らの自立を助けること自体全く無意味になるのであります。

また、フィリピンのネグロス島は、九州の３分の２位の島であります。そこには、８８万ヘクタールの砂糖黍畑を中心とした農地があります。この殆ど全てを２５６０人の地主が所有し、その内、８６０人の地主が２４万ヘクタールを持っています。この無茶苦茶な構造をずっと守っていくためには、砂糖黍が段々作れなくなったと言って農民が耕作を放棄し、米や野菜を作り始めますと、地主はこれを追い出しにかかります。

そこで、土地を守り豊かさの構造を守ろうとする地主達と、日雇いの農民達との間で生存のための戦争が始まるのであります。

地主が雇った兵隊が居ます。これが警察軍、国軍を助ける準兵士であります。

この兵士達の中にも非常に貧しい人達が居ますから、兵士達が同じ貧しい人達を殺すことは大変つらいことであります。そこで、この準兵士達に朝から非常に強い酒を飲ませたり麻薬を与えることにより仲間を殺すことを麻痺させるのであります。これが現実の社会構造であります。世界社会奉仕の道は遙かに遠いと言わざるを得ません。

22.『世界社会奉仕ＷＣＳ』その１８

今日は年度末でありますので世界社会奉仕の話も一旦終っておきます。

さて、先進国は、様々な商業製品を作り販売することによって強い経済力を持ち、しかも南の貧しい人達を消費者としてこれを売りつけます。

そして、この商品が売れるためには、先ずマーケットが確立されなければなりません。そして、マーケットを広げるためには、相手の国の代表的な人達と繋がって行かなければなりません。その人達の数は、フィリピンでは大体６％、タイでは１５％だと言われています。このような人達と繋がっていくことによって、マーケットは拡大されて行きます。と謂うことは、その人達の安定した生活を保つために政治が行われることであり草の根の人達のためではありません。開発途上国の一部の政治的、経済的、宗教的な力を持った人達を代表する政治に対して日本のＯＤＡ（政府開発援助）が流れていくのであります。

また、南の国の食糧難の問題があります。

昔は、沿岸の漁民は少し沖に出れば魚が沢山獲れましたから人々の生活と栄養が支えられて来ました。しかし今、その漁場は、外国資本のハイテクの大型漁船が来て能率よく漁をするため、感を頼りにする小さな漁船の手に負えなくなりました。そこで、漁民は、タブーである沿岸の稚魚に網をかけます。稚魚を捕れば魚が育たず、益々痩せた海になることを承知の上のことであります。この自暴自棄的な漁によって、育ち盛りの子供に与える魚を捕るのであればまだ納得出来ます。しかし、もっと悲しい現実があります。

それは、沿岸で獲れる稚魚や雑魚を買い叩いている業者がいます。漁民はそれを子供に与えるよりもお金ほしさに業者に売ります。そして、その稚魚は日本のスーパーマーケットのペットフードの缶詰の中身になるのであります。（犬飼道子著「人間の大地」1983 年中央公論社）このようにして私達は、意識しないままに南の国の豊かな食料を食べ尽くし、時には「まずい」とか「古くなった」と言っては捨てます。私達の知らず知らずの傲慢や見栄が南の国の人達を苦しめているのであります。

以上を要するに、現在、人類の共生が構造的に不可能な状況になっている仕組みや基本的な理解がないと、人々が共に生きるという世界社会奉仕の理想は、一時的なキャッチフレーズに終わってしまいます。

現在のＲＩや各クラブの実践している世界社会奉仕の活動の実体は、金銭奉仕・団体奉仕ばかりであります。自立心の養成を目的とする非金銭奉仕、労務奉仕・個人奉仕という本来の世界社会奉仕の実現ということを考えると、道は遙かに遠いと謂わざるを得ません。

しかし、世界社会奉仕は、現代の 国際ロータリーの夢のあるところであります。しかも、世界社会奉仕は、ロータリーの悲願であり、ロータリーの嫡流であります。原理の流れの視点から見ると国際奉仕の方がむしろ亜流なのであります。したがって、私達は、何としても世界社会奉仕の理想の実現に努めなければならないと思うのであります。

「四大奉仕の活性化」
ＲＩ第２５８０地区大会パネルディスカッション発題

2011.2.23

深　川　純　一

今日は、四大奉仕の活性化というテーマのパネルディスカッションの発題をするように、とのことであります。そこで、先ず、プロローグであります。

昔々の原始時代の未だ明けやらぬ夜明けの場面から話に入ります。真っ暗闇の世界に心臓の鼓動のようにリズミカルな太鼓の音が聞こえてきます。やがて暗い画面が次第に明るくなり始めると、小鳥の囀りが聞こえ始めます。そしてナレーションが流れます。「早起き鳥が朝鳴いて、やがて夜が明け朝が来る」黒人のヴォーカルグループ "Golden Gate　Qualtet" が、リズミカルな Nigro spiritual 黒人霊歌を歌い始めます。

これは私の青春時代、昭和２４，５年頃に観た或る映画の一場面であります。「はじめにリズムありき」やがてリズムに合わせてメロディーが生まれます。このようにして Jazz が生まれて来たのであります。

これをロータリーについてみますと、「はじめに親睦ありき」先ず親睦のリズムがありました。それは規則正しい例会のリズムであります。やがて、その例会のリズムに世のため人のための奉仕のメロディーが生まれ、そして、ロータリーの世界が明るくなりました。時に１９１０年、ポール・ハリスが「ロータリーは、親睦と奉仕の調和の中に宿る」と悟ったときでありました。これがロータリーの思想の原点であります。

そこで、当時のロータリアン達は、親睦と奉仕をどのように考えていたのか。

先ず、クラブを中心に考えて、クラブの内では、親睦の内に奉仕の心をつくる、即ち、ここは心を作るところ、即ち親睦の世界。したがって、親睦は奉仕の元であります。

これが一番大事なところであります。

そして、クラブを一歩外へ出ると、そこは作られた奉仕の心を日常生活万般に適用するところ、即ち実践の世界。したがって、実践は奉仕の末であります。このように、クラブの内は親睦の世界、クラブの外は実践の世界であります。

そして、１９２７年、ＲＩは、それまでの原理探求のロータリーから実践のロータリーへと奉仕活動の重点を置くために、奉仕の元である親睦の世界をクラブ奉仕と名付け（謂わば内なる奉仕）、奉仕の末である実践の世界を三つに割って、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕としたのであります（謂わば外なる奉仕）。

そこで、先ず、クラブ奉仕であります。これは、今申し上げたとおり、内なる奉仕、即ちロータリーの奉仕の基本類型であります。

ところで、クラブ奉仕には二つの側面があります。

第１は、ロータリーの組織の側面、即ち、定款細則の側面であります。ロータリー運動を法的な原則の面から原理立てて理解することであります。即ち、クラブ奉仕とは、自己研鑽の自覚をもって、定款細則の定めるところに従いクラブの管理運営の一翼を担うべき奉仕の実践類型のことであります。

第２は、ロータリアンの精神世界の側面、即ち、倫理の側面であります。これは、法的なルールに従って行動しても、それが直ちにロータリアンとしての正しい行動にな

るかどうか判りません。したがって、全てのことは、ロータリー運動に参加するロータリアンの自覚、即ち、精神世界の問題がどうしても一枚入って来ざるを得ないのであります。

この精神世界の問題は、権利義務の問題ではありませんから『これをしなさい』と言っても法的に強制出来るものではありません。『勉強しなさい』と言っても、本人が勉強する気にならなければ教育効果は上がりません。これは将に教育の課題でありまして、このように法的強制の出来ない分野のことを倫理の世界と謂うのであります。

要するに、クラブ奉仕論を理解するには、先ず第１に、定款細則を中心に法律論的な理解をすること、即ち、客観的な行動のルールを身に付けることが必要であります。それと同時に、その根底に道徳的な、倫理的なルール、即ち、主観的な精神面のルールを身に付けなければならないのであります。

それなくしてクラブ自治権を確立することは出来ないのであります。

したがって、倫理的な意味におけるクラブ奉仕論がどうしても必要であって、定款細則だけのクラブ奉仕では、心がありませんから三百代言のロータリーになってしまいます。これでは本当のロータリアンが育たないのであります。

したがって、ロータリアンが親睦の内に奉仕の心を作るという観点から、倫理的な意味におけるクラブ奉仕の原則を立てて、それを根底に法律的な定款細則の議論をしなければならないと思うのであります。これがクラブ自治権確立の基本前提なのであります。

では、クラブ奉仕における倫理原則とは、一体どのようなものか。

第１に、自己研鑽の自覚を持って、ロータリーのあらゆる会合に参加することであります。自己研鑽の自覚、即ち、忙しいのに何故例会に出なければならないのか。忙しければ忙しいほど例会に出よとロータリーが言うのは一体何故か。それは自分を磨くという倫理的な目的を持って会合に参加しなければならないということを意味しているのであります。

第２に、自分を磨くためにロータリーの会合に参加するのでありますから自分自身が出席しなければなりません。

例えば、クラブ会長は自分を磨くために会長職を務めるのであり、クラブ幹事は自分を磨くために幹事職を努めるのであります。したがって、幹事は事務職員にはあまり仕事をさせてはなりません。その分だけ自分が磨かれないことになるからであります。出来るだけ自分自身で事務処理をするべきであります。事務職員を使うとしても事実的な行為で重要でない仕事に限ることが望ましいのであります。これを法律的には履行補助者の理論というのであります。

したがって、事務職員は、ロータリー運動の履行補助者なのであります。

そして、事務職員は効率を重んずる世界に棲んでいますが、ロータリアンは奉仕哲学という質の世界に棲んでいます。両者は棲んでいる世界が異なります。したがって、効率の世界の論理をもって奉仕哲学という質の世界の事務をコントロールすることは厳に慎まなければならないのであります。

ロータリー運動というものは、全て奉仕哲学に基づいて営まれるものでありますから、ロータリアンは、奉仕哲学という質の世界の論理をもって、ロータリー運動をコントロールしなければならないのでありまして、些かなりとも、ロータリー運動上の重要な事務処理を事務職員に任せてはなり

ません。

要するに、ロータリアンは、自己研鑽即ち自分を磨くためにロータリー運動に参加するということを忘れてはならないのであります。

したがって、ロータリアンは、ロータリー運動上の義務を他人に委ねてはならないのであります。何故かと言いますと、それが自己研鑽の契機だからであります。したがって、ロータリアンのロータリー運動上の権利義務は、ロータリアンの一身専属権であると謂えるのであります。

それは、代理とか代行とかに親しまないことなのであります。例えば、結婚は必ず本人がしなければなりません。代理人によって結婚することは出来ないのであります。新婚初夜の代行を頼むような人は居ないと思います。

第３に、クラブの中における均一的平等の原則があります。ロータリー運動というものは平行運動の要素がありまして、福沢諭吉先生の『ロータリーは、人の上に人を作らず、人の下に人を作らず』即ち、ロータリアン同士の間においても、人の上に人を作り、人の下に人を作ってはならないのであります。このことを保障するために、ロータリーは創立以来、クラブの通常経費は、クラブ会員の頭数で割って、均分に負担すると言う原則があるのであります。したがって、パストガバナーも、昨日入会した新会員も、クラブの会費は同額なのであります。

何故、同額なのか。それは、クラブの財産権を同じ持ち分で共有するが故にクラブを管理するに当たっては発言権は平等なのであります。

これは、クラブというものが完全にリベラルな平等対等の社会だからであります。

これがクラブという社会制度の論理なのであります。

ロータリアンは、ロータリーの例会に参加するときには、世俗の憂きことを忘れて、人の上に人を作らざる、人の下に人を作らざる、そのような純粋心の世界の中から純度の高い心と心を通わせるのでありまして、これがクラブ奉仕の中核にある考え方であります。そうでなければ心は通わないのであります。

昔、桐生のロータリークラブの初代会長が、『ロータリーの例会はロータリアンがお互いに神様になり合う時間である』と言いました。これは多少当てずっぽうなところもありますが、将に正鵠を射た表現であると思うのであります。『ロータリーの例会は、ロータリアンがお互いに神様になり合う時間である』世俗の憂きことを忘れて、神様と神様との間には格差はありませんから、大企業の社長も、小企業の社長も、大学卒も、そうでない人も、ロータリーの世界では対等であり平等であります。これを均一的平等の原則というのであります。これは、非常に大事なところであります。

第４に、この均一的平等の原則があればこそ、ここから『ロータリー精神』即ち、Spirits of Rotary が出て来るのであります。

したがって、ロータリー運動に参加して、お互いに心と心を通わせて、自分の心の中に他のロータリアンの良質な心の状態というものを映し植えて、そこから何某かのものを学んで立ち去るという、その最も良質なものを学んだことによって、自分というものが育てられて行く、ロータリーというのはこのような動態的な概念なのであります。

例えば、私というものは今ここに居ますが、この私は例会に出る前の私ではありません。また、例会に出た後の私とも一寸違

います。しかし、今の私として固定されるべきものではありません。絶えず自分というものの内容がドンドン高まっていく。そのエネルギーを与えるものは他のロータリアンであります。他のフェローロータリアンが、毎週一回の例会でエネルギーを与えてくれるのであります。これが切磋琢磨であります。それによって自分の精神世界が無意識的に質的に高まって行くのであります。即ち、『心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る』他のロータリアンとお付き合いをすることによって、自分というものが育てられて行くのであります。これを、ロータリーのフェローシップとかロータリー精神を育む世界というのであります。

１９７４－７５年度の国際ロータリー会長 William R.Robbins は、『ロータリー精神を奮い起こせ』"Renew the spirit of Rotary" というターゲットを打ち上げましたが、これはクラブ奉仕の中核を突いている意味において、将にホームラン的な素晴らしいターゲットであると謂えるのであります。

次に社会奉仕は、例会で得た新しい発想をもって家庭及び地域社会を潤すべき奉仕の実践類型であります。

第１に注意すべき点は、１９２７年以前と以後とでは奉仕という言葉の意味が全く異なることであります。１９２７年以前は、ロータリーの奉仕全般、即ち、クラブ奉仕、社会奉仕、職業奉仕、国際奉仕を一括して、単に奉仕という言葉を使っていました。決議２３－３４号で使われている奉仕がこの意味であります。

これに対し、１９２７年以降は、この奉仕を四つに割って、クラブ奉仕、社会奉仕、職業奉仕、国際奉仕となりました。したがって、現在、社会奉仕と謂えば地域社会奉仕の意味であります。

このようにして、ロータリーの奉仕には内なる奉仕としてクラブ奉仕、外なる奉仕として社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕があります。沿革的に見ると社会奉仕は外なる奉仕の最初のもの、謂わば原始類型であります。

社会奉仕の行動類型は、千差万別であります。例えば、新聞売り子や馬を死なせた牧師を助けたり、シカゴの町の公衆便所を作ったりしています。やがてこれが、青少年奉仕、身体障害者奉仕、精神障害者奉仕そして高齢者奉仕などに類型化されていきました。そして、これらのどの類型にも当てはまらないものに、ロータリー本来の社会奉仕があることを忘れてはならないのであります。例えば、清掃奉仕や社会の歪みに落ち込んで救済を求めている人達に対する弱者救済等であります。これには個人奉仕的なものも団体奉仕的なものもありますが、ＲＩレベルにおいて、従来の個人奉仕のロータリーに団体奉仕を導入したのが決議２３－３４号でありまして、その歴史的意義は非常に大きいのであります。

さて、話を個人奉仕に戻します。初期ロータリーは、クラブを中心に考えて、クラブの中では親睦の内に奉仕の心を作り、クラブの外では、その奉仕の心を実践すると考えました。したがって、親睦とは奉仕の心を作ることであり、奉仕の心を作らずして実践を考えることは出来ないのであります。

達磨大師の伝法の言葉に、『一花五葉を開く。結果自然にして成ず』（奉仕の心を作れば実践は自ら至る）という言葉があります。

即ち、蒔いた種が芽生えて茎が伸び、やがて葉が開き、その頂きに花が咲くように、物事の結果は自然に成就する、という意味であります。したがって、ロータリーも、奉仕の心を作れば、その心は自然に実践さ

れる、即ち、結果自然にして成ず、と考えたのであります。しかし現実は、奉仕の心が作られてもそれが実践されないことが多かったのであります。

実は、これを防ぐために、決議２３－３４号第４項が規定されたのであります。即ち、『ロータリーの奉仕とは、単に心の状態に止まるものではなく、その心が行動（実践）として客観化されたものをいう』と規定されたのであります。

要するに、１９２３年のセントルイスの国際大会において、ロータリアンは、実践を通じて原理を検証する世界を開発しなければならないという自覚が生まれ、それが決議２３－３４号という国際大会の決議となったのであります。

そしてこの決議を踏まえて１９２７年のＲＩ理事会は、『今までのロータリーは原理探求のロータリーであった。これからのロータリーは、実践活動を通じて、逆に原理を検証する世界を運動の路線として取り上げよう』ということになりました。そこで、心を作るクラブの内をクラブ奉仕、心を実践するクラブの外を三つに割って社会奉仕、職業奉仕、国際奉仕として四大奉仕としたのであります。

ただ、一つ注意しなければならないことは、ロータリーは実践が大切だと言ってロータリーにだけ集中し、一般地域社会の弱者に対しては一切関与しない人がいます。例えば、ロータリー財団や米山奨学会には多額の寄付をするが地域社会に対しては一切寄付をしない人がいます。これはよろしくないのであります。私達はロータリアンである前に地域社会の住民であることを忘れてはなりません。

そこで、次は国際奉仕であります。元来、クラブというものは閉鎖的なものであります。そのことは原始ロータリーを見れば判るように、それは会員だけの親睦の世界でありました。

しかし、やがて世のため人のための奉仕という考え方が入ってきて、世のため人のためのクラブであればシカゴにだけ在って然るべきものではない、全アメリカの地域社会に在って然るべきものだと考えてロータリーの拡大が始まりました。しかも、一業一会員制によって地域社会の全ての職種から会員を集めるだけでなく、社会的地位・身分そして人種・信条更に宗教までも全く異なった人達がロータリーで友達になるようになったのであります。

昔、１９１１年、ロータリーをイギリスに拡大しようとした時、あの階級意識の強いイギリス人をロータリーに入れることなど到底無理だという悲観論がありました。

イギリス貴族が町の八百屋の親父さんと友達になれると思うのかというのであります。

しかし、現にロータリーはそれを実現してしまったのであります。

そして、人種、宗教、社会的身分の垣根を取り払ったロータリーは、今や国境の壁も乗り越えて、世界中に拡大されています。

これは、多種多様であることを財産とするロータリーだからこそ出来たことでなのであります。

これは将に、ロータリーにおける親睦の効果であります。このように、色々なクラブがあってよいのあります。色々な傾向の人達がいてよいのであります。そして、皆が仲良くなって世の中に役立つことをすればよいのであります。

そこで、一つ心に留めておくべきことがあります。それは最近２０年来、ＲＩの指導者の多くは、人類愛を説き、人道主義的ロータリーを提唱しています。

しかし、ロータリーの根底に流れる愛は、このようなキリスト教的な人類愛に限るものではありません。この世に生きとし生けるもの全てに対する愛であります。それは鳥や獣のみならず将に一木一草に至るまで、神様から与えられた命を懸命に生きているのであります。このことを忘れては、真の環境保全も公害予防も果たせないと思うのであります。私は、曾て佐藤千壽パストガバナーが自社の工場建設に際し、奥羽街道の松並木を伐採せずに残されたことを想うのであります。これは現象的には環境保全の一環でありますが、私は、佐藤先生の心の根底に松の木に対する深い愛を感じるのであります。この愛は、キリスト教などの宗教を超えた大いなるもの「この宇宙を統べて在る大いなるもの」の愛であります。

要するに、ロータリアンは、職業奉仕や社会奉仕更には国際奉仕や世界社会奉仕を実践するときに、このような生きとし生けるもの全てに対する愛の心を忘れてはならないと思うのであります。

さてそこで、国際奉仕の論点は一体何か。

第１に、世界中には、国家と呼ばれる最高、絶対且つ無責任の団体が乱立し、利害の対立するときは力の行使をもってこれを解決しようとます。これが戦争であります。

このような状況の中で、ロータリーは、個人の善意を育てていく立場から一体何が出来るかという問題があります。このように、国際奉仕は、国家の存在を前提とし、戦争を契機として出てきた概念であります。

このように、国家間の利害の対立の中で、個人の善意をもって解決すべき奉仕の実践類型を国際奉仕というのであります。

第２に、国家間の利害の対立を越えて、戦争では決着のつかない全く新しい問題が出てきました。所謂南北問題であります。

ロータリーは、この問題に対するロータリーの個人の善意の働きかけの分野を１９６２年から世界社会奉仕ＷＣＳと呼んでいるのであります。

したがって、この概念定義は、国際奉仕とは必ずしも原理的に共通の基盤を持たないのであります。概念の立て方の理由が違いますから、国際奉仕を世界社会奉仕と狭義の国際奉仕とに分ける考え方は原理的に正しくないのであります。

原理的に見ますと、世界社会奉仕は、国際奉仕と謂うよりはむしろ社会奉仕の範疇に属するものなのであります。即ち、地域社会奉仕の延長線上に、それをそのまま世界大に拡大したものが世界社会奉仕でありまして、社会奉仕とその原理的基盤を共通にするものなのであります。したがって、世界社会奉仕の方がロータリーの本流に属する奉仕であり、社会奉仕の嫡流というべきものであります。

これに対し、国際奉仕は、国家の存在を前提とし、戦争を契機として生まれた概念でありますから、原理的にはむしろロータリーの奉仕としては傍流に属するものなのであります。

なお、１９６２年に始まった世界社会奉仕は、純理としては将にロータリーの悲願とも謂うべきものでありましたが、１９６３年にＲＩの世界社会奉仕委員会は、先ず数名のパストガバナーによって世界各地で約１年間の実験をしました。そしてその結果を集約したところ、言語上の障害や風俗習慣の相違その他の原因によって失敗に終わったので、この委員会を解散してしまったのであります。

そこで、ＲＩは、それまでの個人奉仕、労力奉仕による本来の高潔な世界社会奉仕からレベルダウンして、団体奉仕、金銭奉

仕によることになったのが現在の世界社会奉仕であります。

そして、１９６６年にリチャード･エヴァンスＲＩ会長が、このプログラムにもう一つ付け加えた要素があります。それは、援助を求めるクラブと援助を提供するクラブとの間にＲＩが立って仲人になり、そのプログラムのライブラリーを作って実践するという方法であり、これが現在の世界社会奉仕であります。

第３に、ロータリーは、国際奉仕のニーズを解決する方便の問題として､ロータリー財団という原理的に真に奇妙な制度を作り上げました。

これは原理的には非常に問題のあるところでありますが、しかし、今日、ロータリー財団は、立派な仕事をしていますので、私達の腹構えを作るためにも理解を深めなければならない分野だと思うのであります。

第４に、クラブが事業計画として企画、立案する国際奉仕及び世界社会奉仕のプログラムとロータリーの本願である個人奉仕の実践の問題があります。以上が国際奉仕の主たる論点であります。

最後に職業奉仕であります。人はその顔が皆違うように、考え方もそれぞれ皆違うのであります。したがって、クラブでも仲間が増えれば増えるほど違う意見も増えるのであります。だからこそ、お互いを理解するためには話し合うことが必要なのであります。

ここに、ロータリーでは職業の違う人達が毎週例会に集まって話し合うことの意味があるのであります。

昔、ポール・ハリスは「一種類の花、同じ色ばかりの花壇に何の面白さがあろうか。色々あってこそ人生に薬味がきくというものだ」と言っています。

人によって様々な意見の違いがあってこそ人生は面白いのであります。ここに､ロータリーが一業一会員制をもって、それぞれ違った職業から会員を集めることの良さがあるのであります。

元来、ロータリーも色々な顔を持っています。したがって、職業奉仕も色々な視点から分析する必要があります。先ず、職業奉仕の歴史の視点、思想の視点、原理の視点そして実践の視点があります。したがって、これを総括的に纏めることは、かなり難しいのであります。

そこで、職業奉仕を理解する上で一番大事なことは一体何か、と言いますと、『ロータリーとは、人類文化史が２０世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である』ということであります。この倫理運動であるという視点を見失いますと、ロータリーの職業奉仕が判らなくなり、ひいてはロータリー自体が判らなくなるのであります。

では、ロータリーが倫理運動であるということが、一体どこに書いてあるのかと申しますと、標準ロータリークラブ定款第４条の『ロータリーの綱領』をみますと､ロータリーが将に倫理運動である、ということが一目瞭然に判るだろうと思うのであります。殊に、ロータリーの綱領の第２は、職業倫理に関する規定であり、これは職業奉仕の中核部分であります。

何はともあれ、ロータリーは、倫理運動であるが故に、古来、色々な理念を提唱し、様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーと謂うものは、２０世紀初頭以来、先輩達が残してくれた尊い知恵の結晶なのであります。したがって、縁あってロータリーに入った以上はこの知恵に学ばなければなりません。

そこで、知恵に学ぶ、ということについて若干の補足をしておきます。即ち、ロータリーというものは単に知識として知っているだけでは駄目でありまして、ロータリーの中で色々な体験を積み重ねることによって初めてロータリーが身に付くのであります。したがって、ロータリアンは、例会で卓話を聞き、異業種の良質な人達との接触を通じて人生万般のことを学びます。そして、学んだことは忘れてもよろしいが、その体験を積むことによって、初めてロータリーが身に付いていくのであります。一挙手一投足がロータリーになっていくのであります。単なる知識に止まることなく、そこに智慧が生まれるのであります。したがって、ロータリーの奉仕の実践、殊に職業奉仕の実践は、先ず例会に出席することから始まるのであります。したがって、『私は職業奉仕が忙しいから例会には出席できません』などという言葉は、職業奉仕を全く理解していないことを物語るものであります。

以上をもって、四大奉仕活性化のディスカッションの発題と致します。御静聴ありがとうございました。

「職業奉仕の原点」
ＲＩ第２５８０地区大会会長代理基調講演（９０分）

2011.2.24

深　川　純　一

只今、ご紹介をいただきました２６８０地区の深川でございます。このたびは、歴史と伝統に輝くこの２５８０地区年次大会にレイ・クリンギンスミスＲＩ会長の代理として出席させていただくことになりました。誠に光栄に存じおります。

今日は、この地区大会の主催者である上野操ガバナー始め田中作次国際ロータリー会長エレクト、そして元ＲＩ理事、地区内外のガバナー、パストガバナー、ガバナーノミニー、そして各クラブの代表権者である会長幹事の皆様、そして沢山のロータリアン並びにその奥様方がご臨席でございます。真に身の引き締まる思いであります。

御覧のとおりの弱輩でございますので、どうかよろしくお付き合いのほどお願い申し上げます。

実は、ここの地区大会は、５年前の古宮誠一ガバナーの地区大会にも、やはりＲＩ会長代理としてお邪魔していますので、親しくお顔を存じ上げている方も沢山居られまして誠に懐かしく、また心強くも思っている次第であります。

殊に上野ガバナーは、私と同業の弁護士であられまして、一昨年お亡くなりになりました東京東クラブの佐藤千壽パストガバナーの謦咳に親しく接しられた方であります。殊に職業奉仕についての造詣も深く、私も佐藤先生と一緒に幾たびか同席致しましたが、その語り口は、実に簡潔にして要を得たものであり、静かに説き来たり説き去るというお人柄そのものの暖かさを感じるものであります。今日の地区大会が上野ガバナーのお人柄を象徴するような高潔な地区大会になるように祈って居る次第であります。

さて、通常、地区大会におけるＲＩ会長代理の話というものは、ＲＩ会長の紹介に始まりＲＩの現況報告及びＲＩ会長代理の所見の披瀝ということになるのでありますが、今回は、上野ガバナーの御意向により、ＲＩ会長のプロフィールなどは既にロータリーの友を始めガバナー月信等により皆様方周知のことであり、また、ＲＩの現況についても今日の発達した情報化社会では、既に皆様方に公知の事実でありますので、これらのことは時間の関係上割愛致します。

ただ、ＲＩの現況については、一点だけ特筆すべきことがあります。それは、もう皆様方既に御承知のとおり、埼玉県八潮ロータリークラブ所属の元ＲＩ理事田中作次先生が２０１２～１３年度の国際ロータリー会長エレクトとして選出されたことであります。

顧みますと、我が国は世界第２のロータリー国と言われながら、１９８２年度の中津の向笠広次元ＲＩ会長以降、実に３０年の長きに亘ってＲＩ会長を選出していなかったのでありまして、今般、田中先生がエレクトに選出されたことは、日本のロータリーにとって真に目出度く且つ意義のあることであり、満腔の敬意を表するものであります。なお、皆様御承知のとおり、国際ロータリー会長は大変な激職であります。

したがって、先生には何よりも健康第一、呉々も御自愛の上この大任を全うされるこ

とを祈っております。

このような次第で、今日は、従来の一般の地区大会とは若干趣を異にしまして上野ガバナーより、「職業奉仕の原点」というテーマで講演をするように、との御依頼を受けております。そこで今回はロータリー創立記念日でもありますので、古き佳き時代のロータリーにも触れながら、「職業奉仕の原点」について私なりの所見を申し述べたいと思うのであります。

さて、「職業奉仕の原点」というテーマは、ロータリー思想の中核にある非常に大きなテーマでありますので、色々な視点から分析しなければなりません。

しかし、今日は、とてもその時間がありませんので、「職業奉仕の根本原理」を中心に、それに関わる限りにおいて職業奉仕の歴史の視点と思想の視点そして実践の視点から若干のお話を申し上げたいと思うのであります。

さて、何事に寄らず物事の原点ということになりますと、どうしても歴史の話に関わって参ります。

そこで先ず、１８５０年にこの世に生を受け、１９０６年、ロータリーが始まった翌年に突如としてこの世を去ったイギリス法史学会の権威、ケンブリッジ大学のフレデリック・メイトランド教授 Frederic William Maitland の言葉を引用致しますと、「我々が歴史を学ぶのは、単に過去を追憶するためではない。過去に学ぶことによって初めて正しく現在を認識することが出来るのであり、過去、現在の正しい認識を踏まえて初めて正しく未来を展望することが出来る。したがって、歴史を学ばないものには、現在及び未来を語る資格はない。」と断言しているのであります。そこで、今日は、ロータリーの歴史についての若干のイントロダクション的な話から入っていきたいと思うのであります。

さて、２０世紀の初め、シカゴの町の片隅に生まれた真に小さな集いが、やがてアメリカ全土に拡がり、遂に世界中に広がっていきました。それが後に至ってロータリーと呼ばれる運動体でありました。そのエネルギーの源泉は一体何か。

ロータリーは「始めに親睦ありき」。その親睦のエネルギーが、やがて奉仕を生み、その親睦と奉仕のエネルギーが、シカゴの町からアメリカ全土に拡がり、やがて国境を越えて世界中に拡がって行ったのであります。

ここに、今年度のＲＩ会長レイ・クリンギンスミス氏の提唱した「地域を育み、大陸をつなぐ」というテーマの全ての意味があります。即ち、地域はロータリーの育つところであり、ロータリーは先ずクラブの親睦を育むところであります。したがって、ロータリーは親睦に始まり、奉仕を育て、そしてロータリーの拡大へと発展して行ったのであります。

では、何故、地域から大陸へ、即ち地域社会から世界社会へと拡大されたのか。

それを語るには、ロータリーのそもそもの濫觴の物語から始めなければなりません。そこで、この親睦と奉仕のエネルギーを生み出した原点は一体何か。

それは、ポール・ハリスという１人の青年弁護士の頭脳に宿った只一滴の発想、即ち、一業一会員制の発想でありました。一つの職種から１人だけ選ばれた良質な職業人の親睦のエネルギーが、やがて世のため人のための奉仕という考え方を生み出したのであります。そして、世のため人のためのクラブであれば、それはシカゴにだけあるべきものではない。全米の地域社会にあっ

て然るべきものだということになり、このようにして、親睦が奉仕を生み、奉仕が拡大を生んだのでありまして、そのそもそもの濫觴は親睦であったのであります。

そこで私は、この親睦というものを考えるとき、原始時代の人々に思いを馳せるのであります。原始時代の人々は、大自然の厳しい寒さから身を守るために、お互いに身体を寄せ合い、肌と肌を寄せ合って身体を温め合いました。そして仲良くなって、心が通い合ったのであります。これが親睦の始まりであります。鳥や獣もお互いの体温で温め合い暖を採ったように、そのことによって自分が温かくなると共に相手も温かくなるということを本能的に知っていました。

やがて、人々は、自分の温もりを相手に与えて、相手の温もりを自分に授かる、ということに気づきます。ここから相手に対する愛が始まり、奉仕の心が生まれたのであります。これが親睦と奉仕の原始形態であります。したがって、親睦そのものの中に奉仕の要素があった、即ち、親睦と奉仕は本来一体のものであったのであります。

ということは、ロータリーは、親睦に始まり親睦に終わるのであります。

このように、親睦と奉仕は本来一体のものであったという深層心理から、やがてポール・ハリスは「親睦のエネルギーを世のため人のための奉仕に」と考えるに至り、遂に１９１０年、「ロータリーは親睦と奉仕の調和の中に宿る」と大悟するに至ったのであります。これがロータリーの思想の原点であります。したがって、ロータリーの中心概念は、親睦と奉仕なのであります。

さて、この親睦と奉仕を考えるとき、その根底にあるものは一体何か。先ず、一つの俳句を紹介しておきます。

　　爛々と昼の星見え菌生え　　高浜虚子

これは、正岡子規と共に日本の近代俳句を唱導した高浜虚子の代表句の一つであります。終戦直後の昭和２２年、１９４７年の作品であります。

「爛々と昼の星見え菌生え」

国破れて山河あり。当時、戦災で何もかも焼き尽くされ、荒涼とした日本の原風景がありました。工場の煤煙もなく澄み切った大空。公害もなく活き活きとし山川草木。そして、国民は、食べる物も着る物も住むところもなく、私達は貧困のドン底にありました。

そのような状況の中で、神経の研ぎ澄まされた高浜虚子が見たものは一体何か。それは真っ昼間の大空に爛々と輝く星、そして、荒れ果てた大地に群がり生えている菌であったというのであります。おそらくこれは毒茸であろうと思います。ただ、私は、この一句から、太陽の限りない恵みと、生きとし生けるものの逞しい生命力を感じるのであります。

ところで、この一句の意味は一体何か。

真っ昼間の大空に爛々と星が輝いて見える、そして菌が群がり生えている、という将にこの世のものとも思えない異様な情景であります。即ち、菌は目に見えますが、真昼の星は目に見える筈がありません。しかし、虚子はその星が見えるというのであります。

一体、彼は何を言わんとしているのでしょうか。

私の解釈は、目に見えている菌は現象の世界のものであります。一方、目に見えない昼の星は本質の世界のものであります。

現象の世界というのは、般若心経に所謂「色即是空」の「色」の世界、即ち、美人だとか、肌の色が白いとか黒いとか、背が高

いとか低いとか、所謂、私達の目に映っている世界であります。

これに対して、本質の世界というのは、例えば、「月落ちて天を離れず」という言葉がありますように、お月様が西の空に沈んでも、月は大空即ちこの宇宙を離れる訳ではありません。したがって、この「月落ちて天を離れず」という言葉は、この宇宙を統べてある物事の真理を述べたものなのであります。即ち、星というものは真っ昼間は目に見えなくても、厳然として大空に存在し、輝いている、というのであります。

これが物事の本質であります。

したがって、高浜虚子は、この世の中には、菌という目に見える現象の世界と、真昼の星という目に見えない本質の世界があるということを感じ取って、その時の感懐を花鳥諷詠詩としての俳句に詠み上げたのであります。

そこで、私は、ロータリーの世界でも、制度とかクラブ活動のような「目に見える現象」に惑わされることなく、ロータリーは本来如何にあるべきか、という「目に見えない本質」を見抜くことが大切であると思うのであります。

したがって、今日の私の話に一貫して流れるものは現象と本質についての思索であります。

そこで、冒頭に申し上げました「爛々と昼の星見え菌生え」という俳句に話を戻します。実は、高浜虚子がこの俳句を作った１９４７年、この年とその前年に二人の偉大なるロータリーの指導者が相次いでこの世を去りました。

一人は、ロータリーの創立者ポール・ハリスであり、いま一人は、日本ロータリーの創立者米山梅吉先生であります。

それ以後今日まで約６５年の歳月を閲します。その間ロータリーは随分変わりました。そのことについての善し悪しは、今日私の論ずるところではありません。

私は、ただ、ロータリー創立記念日に因んでお二人の遺徳を偲びロータリーにおけるお二人の活躍の軌跡を簡単に振り返ってみたいのであります

先ず、ポール・ハリスは、ロータリー創立の１９０５年から戦後１９４７年１月２７日にこの世を去るまでの４２年間、アメリカの繁栄と共に燦然と輝くロータリーを見届けてこの世を去りました。したがって、その後のロータリーの変貌を知らずにこの世を去ったのであります。もし、彼が今のロータリーの状況を見たとすれば、果たして何と思うでしょうか、興味のあるところであります。

一方、米山先生は、東京ロータリークラブの創立即ち、日本ロータリーの創立された大正９年から昭和１５年の軍閥の弾圧による日本ロータリーの壊滅までの２０年間、そしてその後、戦中、戦後の隠れキリシタンの如きロータリーの東京水曜会時代、その昭和２１年４月２８日、日本の国際ロータリーへの復帰を見届けることなくこの世を去られました。さぞ無念であったろうと思うのであります。

また、米山先生は、個人奉仕の実践については、“Service,Not self”の自己犠牲の世界に生きた人でありました。その個人奉仕の対象はロータリーに限らず、広く一般地域社会に向けられたものでありました。

その結果、最後は破産直前に瀕してまで世のため人のための奉仕に尽くされたのであります。

このように先生のロータリー活動は、将に波瀾万丈を極めたものでありました。この点、ポール・ハリスとは非常に対照的で

あります。

しかし、このお二人に共通しているところは、ロータリーのために素晴らしいリーダーシップを発揮されたことであります。

殊に、米山先生は、東京ロータリークラブ初代会長２期連続、日本のガバナー制度が出来る前のSpecial Commissioner ２期連続、初代ガバナー３期連続、日満ロータリー連合会初代会長２期連続、日本の無地区時代のＲＩ理事など、日本の戦前のロータリー運動の中でこれ位ロータリーの支柱となってリーダーシップを発揮したロータリアンは、米山先生をおいてほかにないのであります。

日本ロータリーの歴史上、過去、現在、未来を見て、これ位ロータリーのために貢献出来るロータリアンは、今後おそらく現れることはないであろうと思うのであります。将に空前絶後と謂うべきであります。

そこで、この米山先生の遺徳を偲んで戦後、東京ロータリークラブが米山記念奨学会を発足させたことは周知の事実であります。

さて、この米山先生のリーダーシップによって始まった日本のロータリークラブは、どのような発展を遂げたのか、その現象の歴史を少し振り返ってみますと、大正９年１０月２０日ダラスロータリークラブをスポンサークラブとして東京ロータリークラブが創立されました。これが日本の第１の本家クラブであります。

次いで、大正１１年１１月１７日、今度はＲＩの直轄によって大阪ロータリークラブが創立されました。これが日本の第２の本家クラブであります。

この東京クラブと大阪クラブという二つの本家クラブを基軸として、それぞれが子クラブを生むという形で日本ロータリーの拡大が始まり、その後昭和１５年までの２０年間に４８クラブが創立されたのであります。

ところが、昭和初期から始まった軍閥の台頭、そしてロータリーに対する軍閥の弾圧によって日本のロータリークラブ群が右往左往しながら、挙げ句の果てが壊滅状態に追い込まれて遂に解散してしまったのであります。時に、昭和１５年９月のことでありました。これが戦前の日本ロータリー拡大の系譜であります。

解散当時のクラブ数は４８クラブ、ロータリアン数２１４２名、今日のロータリーから見ると、１地区にも満たない真にささやかなロータリーでありましたが、皆粒選りのロータリアンの集団でありました。このようにして、戦前の日本のロータリーは、思想的にも、理論的にも、そして実践的にも素晴らしいものを創り上げて居たのであります。

殊に、アメリカで生まれたロータリーを日本的にアレンジして日本の社会に馴染み易いものにしようというロータリーの日本化の問題については、例えば、大連クラブの古沢丈作氏が１９１５年の職業倫理訓１１箇条を日本的にアレンジしてこれを５箇条の日本文に翻訳し、これを昭和３年の大連クラブのロータリー宣言として発表しました。そして、これが翌年、昭和４年の日本最初の地区大会において米山ガバナーによって紹介され、古沢さんこそロータリアンの鏡であると激賞されたことは有名であり、これが戦前の職業奉仕のバックボーンとなっていたことは紛れのない事実なのであります。

更に、大阪ロータリークラブの土屋大夢氏による二宮尊徳翁の報徳教の思想の紹介等によって、日本ロータリーの職業奉仕の精神伝統が築き上げられたこともまた歴史

上顕著な事実であります。

このような戦前における職業奉仕論の展開は、アメリカ本流の職業奉仕の考え方を日本ロータリーに同化させようとした一つの現象の問題ではありましたが、その根底に流れる思想は、将に職業奉仕の中核を掴んだ本質的なものであったのであります。

そこで次に、職業奉仕の根本原理は一体何か、ということを検討しておきたいのであります。先ず、若干のイントロダクション的な話として、先ほど、俳句を引用しながら申し述べましたように、職業奉仕についても現象と本質の二つの側面から見ていきたいと思うのであります。

実は、ここ僅か５０年ばかりのロータリーの歴史を顧みましても、ロータリーは随分と変貌してしまったと思います。

先ず、「一業一会員制の原則」所謂「職業分類の原則」は、２００１年の規定審議会の決議によって廃止され、規則的例会出席の原則は、職業奉仕の基本前提になっている原則なのでありますが、１９６８年以降、規定審議会の決議による度重なる規制緩和によって全く有名無実になってしまいました。

また、ロータリアンの個人倫理の核であった１９１５年の「ロータリー道徳律」は、１９８０年の規定審議会で廃止され、実践原理の核「決議２３－３４号」は、今後は手続要覧に歴史的文書としてのみ保存されることになってしまいました。このように現象としてのロータリーは、２０世紀初頭に形成された素晴らしい原理・原則の殆ど全てを失ってしまったと謂えるのであります。

これをロータリーの変貌と見るか、或いは衰退と見るかは、人それぞれ見方の分かれるところでありましょうが、それもロータリーであります。現象としては色々あってよいのであります。それが将にロータリーであります。

しかし、大事なことは、ロータリーは本来如何にあるべきか、というロータリーの本質・核を見失うと、それはもはやロータリーではなくなるのであります。

このように、ロータリーは、目に見える現象としては将に大きく変貌しました。しかし、目に見えない本質の問題即ち、ロータリーの核にあるものは些かなりとも変わってはならないのであります。

謂わば、目に見える現象としてのロータリーは、外なるロータリー、これに対して、目に見えない本質としてのロータリーは、内なるロータリーであります。

そこで、次に、ロータリーにとって一番大事な内なるロータリーの世界に重点を置きながら、外なるロータリーの世界を眺めてみたいのであります。

さて、１９０５年当時のロータリアンは、皆がお互いに仲良くなる親睦ということしか考えていませんでした。しかし、親睦活動をしながら次第に豊かになって行ったのであります。

そして翌年、Donald Carter の『世のため人のためのことも考えるべし』と謂う刺激を受けて、『我らの親睦のエネルギーを世のため人のために』という奉仕の概念を考え出すに至るのであります。ここに一つの思想の芽生えがあったと謂えるのであります。

ただ、この親睦と奉仕という二つの考え方で纏めたときに、ロータリー運動の初期の段階で、ポール・ハリスが犯した最大の過ちは、親睦と奉仕というものを価値の世界で上下の関係において捉えて、しかも奉仕を親睦に優先させたことでありました。それは一体何故か。

彼の考え方は、「始めに親睦ありき」その後で奉仕という考え方が出てきたが、奉仕

の方が親睦よりも次元の高い概念であるとして、奉仕を親睦より優先させたのであります。その結果どうなったか。

当初、親睦だけを楽しんでいたクラブの中に、世のため人のための奉仕という全く異質なものを持ち込み、しかも、その奉仕ということを最優先課題としたものでありますから、当然のことながらシカゴクラブは物凄く荒れました。そして遂にクラブは親睦派と奉仕派に割れて、クラブ崩壊の危機に瀕したのであります。

そして、この葛藤の中から１９０８年、多数派の親睦派が少数派の奉仕派を追い出すという大変厳しい事態となってしまったのであります。

そこで、ポール・ハリスは痛く反省しまして、『ロータリーは、親睦と奉仕の調和の中に宿る』と悟りました。そして、親睦と奉仕とを等位の概念として捉える考え方を提唱するようになったのであります。

では、親睦と奉仕とを一体どのようにして調和させるのか。

ポール・ハリスは、ロータリーは親睦と奉仕との調和であるという立場から、『ロータリーの本質は、寛容の中にある。寛容な態度をもって皆がお互いに仲良くしながら、その仲良くするエネルギーが世のため人のために使われる』という図式を開発したのは大変見事なことであったと言わなければならないのであります。これがポール・ハリスのロータリー理論「ロータリー寛容論」であります。

この寛容論につきましたは、上野ガバナーが今月のガバナー月信第８号の巻頭言において、アーノルド・トインビーの見解を引用しながら、大乗仏教の根本思想からロータリー寛容論を説いておられるのは傾聴に値するものであります。

ところで、『我らの親睦のエネルギーを世のため人のために』ということは、言うことは易しいが、これを原理的に理解するのはかなり難しいものであります。と申しますのは、親睦というのは、ロータリアン同士がクラブの中でお互いに心と心を温めることでありますが、これに対して、奉仕というのは、ロータリアンがクラブの外に向けてロータリアン以外の人達のことを考えることだからであります。

このように、エネルギーの方向が全く正反対でありますから、『我らの親睦のエネルギーを世のため人のために』ということは、一体どのように理解すればよいのか、これはかなり難しい課題であったと謂えるのであります。

そこで初期のロータリアンは、１９０７年時点においては何らの先例もなかったので、何もないところから考えて行かなければなりませんでした。

そこで先ず、最も素朴な考え方を採りますと、親睦は親睦、奉仕は奉仕と考えます。

したがって、親睦というのは、ロータリアンが物心両面の助け合いをすることであり、具体的には、会員は親類付き合いをするのだから利益を貪ってはならないというのでお互いに原価で取引をしたり、お互いの職業を地域社会の人に宣伝し合ったのであります。また、会員相互の企業経営上の悩みや問題点について智慧を出し合ったのであります。所謂アイディアの交換、発想の交換であります。このようにして、親睦活動の結果、皆が豊かになればその所得の一部を世の中の恵まれない人達に提供すること、これが奉仕であると考えたのであります。

勿論、世の中の恵まれない人達を救済することは国または地方自治体の役目である

という建前にはなっていますが、これには公共財源の限界がありますので、国が全ての人を救済することは出来ません。そこでロータリアンが豊かになった自分の所得の一部を提供することによって、その人達が喜ぶならば、これが世のため人のための奉仕をしたということになるのであります。

実は、初期の素朴で善意なロータリアン達は、皆この路線を採ったのであります。

即ち、ロータリーの親睦は、ロータリアンがお互いに助け合って豊かになること、即ち、金持ちになるための作業である。そして、金持ちになった以上は、その金を恵まれない人達のために使おうという考え方であります。したがって、この考え方では、親睦のために結集するエネルギーと世のため人のために考えるエネルギーとは、その基盤が全く異なるのであります。

シカゴの初期のロータリアン達の作業の中には、このような種類のものがあって色々な活動をしているのであります。

例えば、新聞売り子の少年を助けたり、馬を死なせて宣教活動が出来なくなった牧師にクラブで金を集めて助けるとかして、個人奉仕的なものもあり、団体奉仕的なものもあったのであります。

要するに、親睦に集まる時には金儲けのことを！奉仕をするときには儲けた金を世のため人のために！という考え方であります。したがって、ここからは当然のことながら職業奉仕というものが生まれる余地はないのであります。

そこでロータリーは、金を恵むことだけがロータリーの奉仕なのかという反省から、１９０８年以降、ロータリー的な奉仕概念を開発するに及んでこの考え方、即ち、儲けた金で奉仕するという考え方を捨ててしまったのであります。では、それは具体的には一体どういうことなのか。

ロータリーは、親睦のために考えるエネルギーと世のため人のための奉仕のために考えるエネルギーとは、向かって居る方向は逆であるがその行動を起こす基になる心は一つの心、即ち、親睦の心は同時に奉仕の心であると考えるに至ったのであります。

これは将に、この話の冒頭に原始親睦について申し上げたこと、即ち、親睦と奉仕は本来一体のものであるという考え方であります。したがって、ロータリーは、このような考え方を採るに及んで、奉仕哲学の世界を開拓せざるを得なくなったのであります。

何故、このような大袈裟なことを謂うのか、と申しますと、実は、ロータリー以外の奉仕クラブは全てロータリーの考え方ではないからであります。

例えば、Exchange Club , Kiwanis Club , Lions Club, Y's mens Club などは全てロータリーの考え方ではありません。

ロータリーだけが初めて親睦イコール奉仕、即ち、一つの心をもって親睦を行い、同じ心を持って奉仕をする、という考え方を開発したのであります。

この考え方を採るからこそ、親睦の内容を発想の交換・精神的相互扶助というような精神的なものとして捉えることが出来るのであります。したがって、親睦と奉仕とが一元となり、ここから職業奉仕の概念が出てくるのであります。

したがって、親睦の本質を感性的な次元において捉えますと、それは、ロータリーの親睦とは似て非なるものとなってしまいます。例えば、酒を飲んだり、ゴルフをしたりすることは、親睦活動であって親睦そのものではありません。このような楽しいことを感性的な次元においてのみ捉えます

と、それはロータリーの本来の親睦とは離れてしまいます。

確かに、ロータリーは親睦から始まったのでありますから、そのような感性的な親睦も大事であります。しかし、このような親睦は、ロータリーでなくても、地域社会の人達にもあります。極端なことを謂えば、暴力団でもそれがグループ活動である以上、感性的な親睦はあります。彼らもロータリアンと同じように、酒を飲み、ゴルフをしています。では、暴力団の親睦とロータリーの親睦とは、一体何処が違うのか。この点を煮詰めておかなければなりません。

実は、ロータリークラブは、社交クラブでありますから、酒を飲んでも、ゴルフをしても、楽しいことは何をしてもよいが、ただ一点忘れてはならないことは、何をするにつけても相手から何某かのものを学んで自分を高めようという精神面の開発の問題を頭の中に入れておかなければならないのであります。即ち、「心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る」これがロータリー思想の中核にある考え方なのであります。

このような精神的な親睦を前提にして親睦論を確立したところに、ロータリーにおける親睦と奉仕の調和の考え方があるのであります。

要するに、倫理的に許される感性的な喜びであれば、何をやってもよろしい。酒を飲んでもよろしい。ゴルフをしてもよろしい。しかし、何をするにつけても、自分を磨く、自分を高めるという精神的な要素を忘れてはならないのであります。

これがロータリーの親睦論の中核にある考え方であります。そして、このような立場をとるからこそ、職業奉仕論が出てくるのであります。

このように、親睦を『精神的親睦』の形で把握出来ないと、職業生活をマネージしている心の根底において、奉仕ということを把握することが出来ないのであります。

したがってまた、職業奉仕を Occupational service と謂わずに、敢えて Vocational service と謂いますが、その意味は、自分の職業は、ただ単に金を儲けるためのものではなく、神様の思し召しによってこの職業を授かったのである。したがって、自分は物を商ってはいるが、商っていること自体、これは神様に対して商って居るのだという自覚を持ちますと、これ即ち、『職業をもって奉仕と考える』という考え方になるわけであります。

したがって、『あらゆる職業に聖職者意識を』という考え方を頭に入れて、初めて職業奉仕の概念が正当化されるのであります。

これ以外の立場を採りますと、職業は、単に『私的利潤追及の行為である』とか『金儲けの手段である』という形になって来ます。これは、職業をもって世のため人のための奉仕と考えるという考え方とは、全く次元の異なるものとなるのであります。

このようにして、ロータリーの職業奉仕論というものは、他の一切の奉仕クラブの中に定着していないのであります。即ち、職業奉仕はロータリーにしかないのであります。このことから誰言うとなく感覚的に唱えられ出した言葉が『ロータリーのロータリーたる所以は、職業奉仕の実践にあり』という言葉でありました。つまり、他の奉仕クラブでは、職業奉仕の概念を確立できないのであります。確立出来ない根本の原因は一体何処にあるのか、というと、今申し述べたように、親睦の本質を如何に理解するか、という一点にあるのであります。

実は、私が最初に親睦の話から入って行っ

た意味はここにあったのであります。

要するに、親睦というものを精神的なものとして捉える、言い方を換えますと、ロータリーは当初、感性的な親睦から始まりましたが、やがて奉仕を考えるようになって精神的な親睦に昇華していったのであります。即ち、ロータリーは親睦に始まり親睦に終わるのであります。

さて、そこで、今日のテーマである「職業奉仕の原点」とは一体何時か。

ロータリーの世界に職業奉仕という概念が現れたのは、１９２７年、ＲＩ理事会がロータリーの奉仕をクラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕そして国際奉仕という四つに類型化した時であります。

しかし、職業奉仕という原理の実体は、既にそれより２０年前の１９０７年、Arthur Frederic Sheldon がロータリーの奉仕概念を確立した時に既に存在していました。即ち、当時、職業奉仕という原理の実体は既にありましたが、その原理を職業奉仕とは呼ばなかっただけのことであります。

恰も、夏目漱石の小説「我が輩は猫である」の冒頭の一節「我が輩は猫である。名前はまだない」という状態、即ち、猫は既に実在するが名前は未だ付けられていないという状態であります。したがって、職業奉仕という言葉が現れたのは確かに１９２７年ではありますが、職業奉仕という原理が生まれたのは１９０７年，Arthur Frederic Sheldon が「親睦のための一業一会員制の原則」を「奉仕のための一業一会員制の原則」に理論構成したときであります。そして、これによって「規則的例会出席の原則」も単に親睦のためのものから奉仕を目的とするものになったのであります。

したがって、この二つの基本原則は、職業奉仕実践の基本前提なのであります。したがって、「職業奉仕の原点」を語るには、先ずこの二つの基本原則から検証しなければなりません。

そこで、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則が職業奉仕実践の基本前提であるということは、具体的には一体どういうことなのか。

先ず、１９０５年、創世記のロータリーには、世のため人のための奉仕などという考え方は影も形もありませんでした。そこには、クラブ会員が皆で仲良くして助け合う「親睦だけの世界」がありました。

この助け合うということの具体的な意味は何か、と申しますと、ロータリアンは、皆、職業人でありますから、自分の企業経営上の悩みをクラブに持ち寄って智慧を出し合ったのであります。「うちの会社では今こういうことで悩んでいるんだ。何かいい考えはないかな」と言いますと、当時は一業一会員制でありますから会員は皆それぞれの所属する業界が違います。したがって、それぞれの業界の発想もまた違います。

そこで、「そのことならうちの業界ではもう解決済みだ。こうして御覧」と言って教えてくれます。「有り難う」といって早速そのアイディア（ノウハウ）を企業経営に役立てます。

また、或る問題については、皆未だ未解決であった場合には、三人寄れば文珠の知恵と謂いますから、皆で衆知を集めて解決して行ったのであります。

このようにして皆が智慧を出し合い、アイディアを交換して、助け合ったのであります。したがって、当時は、恰もクラブが経営相談所のような機能を果たすようになり、会員達は次第に豊かになって行ったのであります。

そして、この「発想の交換機能」

Exchange of Ideaの機能によって、やがてロータリーは、１９２７年、職業奉仕という類い希なる概念を生み出すに至ったのであります。

このクラブ例会における「アイディアの交換機能」「発想の交換機能」こそ、ロータリークラブが創立当初からもっていた「本質的な機能」なのでありまして、このことは当時のクラブの定款にも「発想の交換」Exchange of Ideaという言葉が記されていたのであります。

ところが、何時しか、この発想の交換という言葉が定款から消えてしまったのであります。それは一体何故か。というとクラブ例会における「発想の交換」Exchange of Ideaと謂うことは、ロータリークラブにあっては至極当然のことではないか、当たり前のことであれば、わざわざ書いておく必要はないだろう、と謂うので、消してしまったのであります。

したがって、言葉は無くなりましたが、現在も「発想の交換」Exchange of Ideaという機能は、ロータリークラブの「本質的要素」として厳然として存在するのであります。

我が国でも、昔、私が入会した頃のクラブには未だこの発想交換機能が残っていました。私は、或る学校法人の理事長として団体交渉のノウハウを実業家の先輩によく教えられたものであります。

しかし、今のクラブには、私の知る限りこのような発想交換の情景は全く見受けられないようであります。したがって、今の日本のロータリアンがこの発想の交換による例会出席の重要性をどれほど認識しているかについては、疑問なしとしないのであります。

しかし、一方、今、日本のクラブの中には、例えば、御当地第２５８０地区のように、職業奉仕の原理認識を高めよう、職業奉仕の実践によって素晴らしいロータリーを実現しようとする意欲に燃えているクラブが沢山あります。

翻って、２０世紀初頭のロータリアン達はどうであったか。彼らは、例会出席の重要性を強く認識して、自己研鑽・切磋琢磨による企業経営上のアイディアの交換・発想の交換をしていたのであります。

そして、その発想の交換機能の中からロータリー的企業管理論とでもいうべき原理を開発し、その原理を実践しました。そして１９２７年、遂にその実践原理を職業奉仕と名付けたのであります。

そして、その２年後の１９２９年、アメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニックの時にロータリアンは一人も倒産しなかったのであります。

これは、クラブ例会における発想の交換機能によって職業奉仕の原理を開発し、それを自らの企業に実践していった功徳だと言われているのであります。だからこそ、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則が職業奉仕実践の基本前提なのであり、職業奉仕の実践は、先ず例会出席から始まるのであります。

これは、職業奉仕の重要な柱であり、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面なのであります。この故に『ロータリーは、人類文化史が２０世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である』と謂われているのであります。したがって、職業人の倫理運動であるというこの考え方が正にロータリーの核にある考え方なのであります。したがって、この点が解らないと職業奉仕が解らなくなるのであります。

実は、この「ロータリーの核」にある考え方を文章として明確に表現しているものが標準クラブ定款第４条の「ロータリーの綱領」なのであります。したがって、“綱領を知らずしてロータリーを語ることなかれ”と言われているように、綱領を身につけることはロータリアンであることの絶対条件なのであります。

ロータリーの綱領は、ロータリーの般若心経ともいうべきものでありますから、ロータリアンとしては、大悟徹底的に理解していなければならない問題なのであります。ところが、最近は、綱領を知らないロータリアンが増えてきたということを時々耳にします。これは誠に由々しきことであります。

昔は、このようなことは絶対にあり得なかったのであります。クラブとしては、クラブ自治権を確立するためにも、新会員を迎え入れる時には綱領の解説を徹底するべきであります。綱領が理解できなければ、ロータリーが倫理運動であることが理解出来ません。したがってまた、職業奉仕も理解できないのであります。

ところで、職業奉仕という言葉は、ロータリーの専門用語であります。ライオンズクラブには職業奉仕という概念はありません。キワニスクラブやオプティミストその他ロータリー以外のアメリカ系奉仕クラブにも職業奉仕という言葉はありません。

更に、一般世間の人達も、職業奉仕という言葉は使っていません。辞書を引いても職業奉仕という言葉は見当たりません。正に、職業奉仕という言葉は、ロータリーの専門用語なのであります。考えてみれば、これは奇妙な言葉であります。

元来、職業というものは、私達が生きて行くための所得を得るための手段、即ち、金儲けの手段でありますから、これは自分のためのものであります。

一方、奉仕というものは、世のため人のために何かをすること、即ち、自分以外の人のためのものであります。このようにエネルギーの方向が全く正反対の二つの言葉を一つに合体させて、職業奉仕と言っているのでありますから、判りにくいのも無理はないのかも知れません。

一体、自分のためのものである職業が、人のためのものである奉仕のテーマになり得るのでありましょうか？

職業を営むこと、即ち、金を儲けることが、何故、世のため人のための奉仕となるのか？職業即ち金儲け、これを奉仕と考えるためには、一体如何なる考え方が必要なのか？この一点が判らないと、職業奉仕は永久に判らないことになります。これを論証していくのが、将に今日の課題であろうかと思うのであります。まず、世のため人のための『奉仕』についての最も素朴な考え方については、先ほど申し述べたところでありますが、大事なところなので重ねて申し上げます。即ち、職業は、所得獲得の手段、即ち、金儲けの手段であります。それは、あくまでも自分のためのものであって、そこには、世のため人のためという他人のための考え方は一切入る余地はありません。したがって、職業は奉仕になりません。

職業と奉仕とは、それぞれ別の世界に存在すると考えることになります。

この考え方からすれば、職業を営むことが同時に奉仕になるとは考えられないのでありますから、世のため人のために『奉仕』をしようとすれば、職業以外の方法によらざるを得ません。

例えば、職業によって得た所得の一部を恵まれない人達に与えるとか、自分の労力や時間の一部を割いてボランティアー活動

をするとかして、いわば弱者保護をもって奉仕と考えるわけであります。したがって、職業をもって奉仕と考えることはできないのであります。

勿論、弱者保護については、ロータリーも社会奉仕の範疇においてこれを重視し実践しているのではありますが、この素朴な考え方では、職業という視点から奉仕ということを考えることが出来ないのであります。

要するに、所得を得るために行動する時の心、即ち金儲けの心と、世のため人のために奉仕する時の心とは、全く次元を異にしているわけであります。

ところが、ロータリーは、職業を営む心も奉仕の心も共に同じ一つの心、つまり、金を儲けるために考えるエネルギーと世のため人のために考えるエネルギーとは、その向かっている方向は異なるが、その行動を起こす元になる心は、一つの心だと考えるのであります。即ち、一つの心をもって、職業を営み且つ奉仕すると説くのであります。詰まり、金を儲けること、職業を営むことが同時に世のため人のための奉仕になる、と考えるのであります。

言い換えますと、世のため人のために奉仕をする心をもって職業を営むべし、と説くのであります。したがって、この考え方では、必然的に、職業を営むことに、世のため人のためという倫理性を要求することにならざるを得ないのであります。即ち、砕いて謂えば倫理的な金儲けをする、と謂うことであります。

さて、そこで私達は、倫理の問題を考えるとき、人間の行動パターンを考えてみる必要があります。それは、『打算の世界』と『愛情の世界』に大別出来ます。

(1)『打算の世界』とは、人間が価値を求めて行動する分野であります。

人間は、本来、価値のないものは相手に致しません。例えば、１万円の商品と１万円の貨幣とが交換されるのは、その交換によって売主・買主双方にそれぞれ何らかの利益があると考える時に、この等価交換は成立するのであって、一方が交換によるメリットがないと判断した場合には、この等価交換は成立致しません。このように、打算の世界とは、人間が等価交換の原則の下に常に何らかの価値を求めて、打算によって行動する分野のことであります。

(2)「愛情の世界」とは、貨幣価値などでは計ることの出来ないほど価値のある世界、そこには、打算や等価交換の原則などは一切存在しない、そういうものを一切必要としない世界、例えば夫婦の関係のように「私の物は貴方の物よ、貴方の物は私の物よ」という考え方の支配する世界であります。

そこには、一切の打算がありません。しかし、限りなき愛情があります。この価値は、計り知れないものと言わなければなりません。

ところで、打算の世界では、等価交換が終了するまでは、人と人とが関係づけられていますが、一旦、交換が終了すると、その人間関係は貸し借りなしに精算されてしまいます。例えば、１万円の商品と１万円の貨幣が交換されることによって取引は終了し、売主・買主の間は、一切貸し借りなしに精算されて、後には何も残りません。

ところが、愛情の世界では、例えば、ご主人が今月の手形の決済が出来なくて困っている時に、奥様が実家から貰ってきた５００万円を提供し、例えそれが返して貰えないことになったとしても、それを裁判にかけてまで請求することは絶対にありません。その限りにおいて、精算されないままに因縁が残っています。打算の世界から

見れば、まさに奥様が損をしたことになるのでありますが、それを損とは考えない、

即ち、打算的思考の圏外にある思考であります。そこには、一切の打算がありません。

しかし、限りなき愛情があります。

ところで、私達の職業の中にも、只管この愛情の世界にのみ生きてきた職業があります。例えば、宗教家の世界も愛情の世界であります。

僧侶は、ただ只管に仏の道を説きます。

それは、御布施を求めて仏の道を説くわけではありません。人々に対する限りなき愛情をもって、人々の悩みを救うために、ひたすら仏の道を説くのであります。

その結果、人々が感謝の気持をもって御布施を差し出せば、感謝の気持をもってそれを受けとるのであって、それはあくまでも結果の問題であります。

したがって、人々が貧しくて、御布施を差し出すことが出来なければ、出さなくともよいのであり、それを僧侶の方から請求すべき筋合のものではないのであります。

したがってまた、この関係は精算されないままに、僧侶の生活は、その分だけ社会に対して貸し方になっているのであります。

その故にこそ僧侶は、世の中から尊敬と信頼をもって報いられることになるのであります。

これは何も宗教家に限ったことではありません。中世ヨーロッパにおいて宗教即ち、神学から派生した学問である法学、医学、哲学、教育学皆然りであります。ロータリーは、これらの分野の職業を一括してprofession専門職業と称して、利潤追求を第一義とするbusiness実業と区別しているのであります。

したがって、宗教家をはじめ大学教授、弁護士、医師等は、神様から与えられた客観原理をもって人々を救済することを第一義とする職業であると考えられているわけであります。そして、このような沿革的には中世ヨーロッパにおけるprofession専門職業の原理が、やがて１６世紀における商人階級の擡頭、そして１８世紀の産業資本主義の勃興を経てbusiness実業の社会にも次第に浸透して行ったのであります。

実は、職業奉仕というのは、この愛情の世界の考え方をもって、打算の世界をコントロールして行こうという考え方、即ち愛情をもって職業をコントロールして行こうという考え方であります。これが「職業奉仕の根本原理」であります。

愛情の世界は、人間関係が精算されないで、常に人と人とが或るものによって因縁づけられている世界、色々な出会いがいつまでも尊重されて行く世界であります。そのような関係の中から尊敬と信頼が生まれて来るのであります。そして、実業家の場合には、更に信用が生まれるのであります。

尊敬と信頼そして「信用」があるからこそ実業家は、長期的に安定した経営をすることができるのであり、個々の取引が常に貸し借りなしに精算されていく打算の世界からは、尊敬も信頼も信用も生まれないのであります。世の中の成功した実業家は、必ず、愛情の世界の原理をもって自分の企業をマネージしているのであります。

例えば、先程の１万円の商品の売買の例で謂えば、売主と買主の間に、商品と貨幣の交換という目に見える現象の世界と同時に、感謝と満足の交換という目に見えない本質の世界がなければならない、とロータリーは説くのであります。

要するに、ロータリーは、倫理運動の立場から、愛情の世界に生きる心、即ち世のため人のための心をもって職業を営んでい

ると、その結果として、『信用』という保護膜に包まれて、長期的に安定した利潤を着々と獲得する強靭な体質の企業を作り上げることができると説くのであり、その「原理の総体を職業奉仕」と呼んでいるのであります。

さてそこで、この職業奉仕の根本原理を如何にして実践するのかという心構えについて一言申し述べます。それは一言で謂えば、職業奉仕とは、職業を倫理的に営むべし、倫理的な商売を営むべし、ということであり、それを実践すれば、自ずから職業は栄えていくとロータリーは説くのであります。

では具体的には、一体どのようにすれば職業を倫理的に営むことになるのか。「職業を倫理的に営む」というは、言い方を換えれば、ロータリアンが全ての生活関係において、自分の行動に愛を込める、ということであります。このことについては、前回の地区大会でもお話致しましたが、重ねて紹介しておきます。

実は、明後日の２月２６日は、あの有名な２．２６事件の起きた日であります。昭和１１年２月２６日、陸軍の一部の青年将校達が反乱を起こしました。この時、反乱軍に殺された人達の中に、時の教育総監渡辺錠太郎大将がおられました。

渡辺大将には、当時、小学生のお嬢さんがおられましたが、その人が今、ノートルダム清心学園の理事長をしておられる渡辺和子先生であります。

実はこの話は、私がこの３３年間関わっています兵庫の２６８０地区のライラセミナーで渡辺和子先生から伺った話であります。そのエキスだけ要約しますと、

渡辺先生は、外資系の会社でエリートの立場に居られましたが、感ずるところがあって２９歳にしてカソリックの信仰の道に入られました。そして、修道女としてアメリカのボストンに渡られたときの話であります。

暑い夏の或る日、食堂で約１３０人位の夕食のために、皿とナイフとフォークをテーブルにセットする仕事をしておられましたが、その時、先輩のシスターが先生に、『シスター、貴女は、今、何を考えていますか』とお尋ねになりました。先生は、『何も考えていません』とお答えになりました。

すると、その先輩のシスターは、厳しい顔になって『貴女は、時間を無駄にしています』と言いました。先生は自分の耳を疑ったそうであります。『何故？』

するとその先輩は、『おなじくお皿とナイフとフォークを並べるのであれば、やがてその席にお座りになる人のために、何故、心の中で「お幸せに！」と祈りながら並べないのですか。何も考えないで、ただ漫然とお皿とナイフとフォークを並べるということは、時間を無駄にしています』と諭されたそうであります。

渡辺先生は、『私は、今まで如何に効率的に仕事をするか、ということを教えられてきましたが、時間に愛を込める、仕事に愛を込めるということは、初めて教わりました。時間に愛を込めること、お皿は同じ早さで、同じ姿で並びます。しかし、目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって、世の中は大きく変わるということ、それは一つには、私がお幸せにと祈って置いたお皿で召し上がった方は、必ずお幸せになるという信仰であります。

ただ、それよりも私にとって大切なことは、私が救われたということ、つまり、私にとって、つまらない仕事はなくなったということ、お皿並べというつまらない仕事、雑用だと思っていた仕事が実はそうではない。雑用は、私が仕事を雑にした時に雑用

になるということを教えられました。だから、救われたのは私です。

つまらないと思ってお皿を置く、お幸せにと祈ってお皿を置く。外から見た限りは全く同じに見えます。かかった時間も変わらない。しかし、仕事の量は同じでも、仕事の質が変わっている、ということは、その人自身が変わったということです』と述懐しておられました。

お皿を並べるというつまらない行為に愛を込めるように、自分の仕事に愛を込める。

私達の全ての行動に愛を込めると言うことは、言い換えれば、ロータリーのいう倫理的な生活をする、と謂うことであります。

これは人を育てる基本前提なのであります。

このように、ロータリアンは、企業経営においても心の問題を重視しなければなりません。したがって、渡辺先生の言葉は、ロータリアンの企業経営の基本的な在り方を示していると思うのであります。仕事に愛を込める、時間に愛を込める、そのことなくして倫理的な人間を育てることは出来ないと思うのであります。

渡辺先生は、お皿を並べるという単純な行為に、「幸せを祈るという目に見えない大切なものが籠められるか籠められないかによって、世の中は大きく変わる」と言われました。このことは、私達ロータリアンが職業奉仕の実践についても肝に銘ずべき言葉であろうかと思うのであります。

要するに、私達一人ひとりの心の中に宿るもの、それが大事なのであります。そこで、このことのロータリー的な意味を少し補足しておきます。

ロータリーでは、毎年、国際ロータリーの会長が、自分の個人的な所信の表明として、「ターゲット」を出して来ました。最近は、このターゲットにＲＩ理事会の決議の裏打ちを付けてＲＩの「テーマ」と称しています。

私の大好きなターゲットは、１９６０－６１年度の国際ロータリー会長エド・マクローリン（J.Edd McLaughlin) の“You are ROTARY”というターゲットであります。

即ち、“You are ROTARY”貴方がロータリーですよ。ロータリーというのは、国際ロータリーのことではない、ロータリークラブのことでもない。あなた方、一人ひとりのロータリアンの心の中に宿るもの、それがロータリーなのですよ、と呼びかけているのであります。

実は、これは優れてアメリカ的な発想なのであります。アメリカの法律即ち、英米法的なものの考え方によりますと、国家というものは、政府のことではない、国会のことでもない、あなた方国民一人ひとりの心の中に宿るもの、それが国家なのだと考えるのであります。即ち、英米法の考え方では、国家とは国民の総体・全体であると考えるのであります。

しかし、例え日本国民が１億２千万人集まったとしても、それだけでは烏合の衆に過ぎません。この人間の集団を国家という統一体にするためには、統治権とか主権などという所謂プラスアルファーがなければなりません。

では、このプラスアルファーは一体何処にあるのか、と謂うと、英米法は国民の一人ひとりの心の中に宿る、即ち、一人一人の国民に分属する、と考えるのであります。

日本国憲法の国民主権とか主権在民という思想も、その根底にはこの考え方があるのであります。日本では、明治の先覚者福沢諭吉先生がこの考え方をとっておられました。即ち、『国家とは国民一人一人の心の中にある或る種の政治的実像である』と説かれたのであります。

このように英米法は、国家とは一人ひとりの国民のことだという立場をとるのであります。したがって、一人ひとりの国民が理性の命ずるところに従って自分の徳性を磨けば、その徳性の総和は、必ず国の政治に反映し、国家の徳性も上がって行くと考えるのであります。したがってまた、国家の徳性が上がれば、あの忌まわしい戦争も予防できると考えるのであります。

ロータリーもこれと同じでありまして、マクローリン会長が「ロータリーは、一人ひとりのロータリアンの心の中に宿る」と説いたように、一人ひとりのロータリアンが自分の徳性を磨く、心を磨くことによって、地域社会、国際社会の徳性が磨かれ、社会全体が明るくなるとマクローリン会長は説くのであります。

これは取りも直さず、一人ひとりのロータリアンによる個人奉仕の提唱であります。

私達ロータリアンがお互いに例会で心を磨き、幸せを祈る、ということが、将に「ロータリーの核にある」考え方でありまして、これを職業奉仕的に謂えば、自分の職業に愛を籠めることであり、皆の幸せを祈り合うことなのであります。

そして、世界中の人達がお互いに心を磨き合い、幸せを祈り合う世界、そのような世界になることがロータリーの夢なのであります。

ロータリーの例会で心を磨き心を通わせる、その親睦のエネルギーが、やがて地域社会、国際社会そして世界社会へと拡がっていく。このことが、ＲＩ会長の謂う「地域を育み、大陸をつなぐ」ということになるのであります。

そして、「地域を育み、大陸をつなぐ」という現象の世界の根底にあるものは一体何か。それが将にロータリーの親睦なのであります。先ほど申し上げましたように、ロータリーの親睦は、感性的親睦から精神的親睦へ。このようにして、「ロータリーは親睦に始まり親睦に終わる」のであります。

ご静聴ありがとうございました。

あ と が き

「純ちゃんのコーナー」も本年度、PartXを発刊する運びとなりました。伊丹ロータリークラブの会員と、本冊子の読者の方は、１０年の永きにわたり、深川純一先生の幅広い知識と、考え方を吸収出来る機会に恵まれたことになります。

本年度は、①ＳＡＡの果たすべき役割と、運用上のノウハウ、②世界社会奉仕ＷＣＳのあり方や、その具体的活動事例を通じて、ロータリーのあり方を学びました。

近年、ＲＩの唱える活動方針は変質しつつある、と考える会員もいらっしゃるようです。「ロータリーの本質とは何か」について思索を巡らす時、本冊子のシリーズをめくることもヒントになるかもしれません。既刊資料については、当クラブのホームページで、いつでも御覧になることができます。ご参照下さい。

１０年間の永きにわたり、多大なるご尽力を戴いております深川純一先生の御厚意に、改めまして心より御礼申し上げます。また、本冊子発刊に当たりご尽力戴いた、中島勝美前会長、入潮晃暢前幹事をはじめとする会員の皆様、事務局の吉永恵子さんに深く謝意を表します。

２０１１年９月　　伊丹ロータリークラブ　雑誌・ロータリー情報委員会

純ちゃんのコーナー
（ロータリー３分間情報）
Part Ⅺ

目　　次

1.『再びニコニコ箱について』その１ …… 2
2.『再びニコニコ箱について一言』その２ …… 3
3.『再びニコニコ箱について一言』その３ …… 4
4.『リーダーとリーダーシップ』…… 5
5.『品格のあるスマートなクラブ』その１ …… 6
6.『品格のあるスマートなクラブ』その２ …… 7
7.『品格のあるスマートなクラブ』その３ …… 8
8.『品格のあるスマートなクラブ』その４　～高明満座～ …… 9
9.『品格のあるスマートなクラブ』その５ …… 10
10.『品格のあるスマートなクラブ』その６　～韋駄天の心～ … 11
11.『品格のあるスマートなクラブ』その７　～韋駄天の心～ … 12
12.『決議２３－３４号の存在意義』その１ …… 13
13.『決議２３－３４号の存在意義』その２ …… 14
14.『露口四郎』その１～クラブ幹事歴任１３年～ …… 15
15.『露口四郎』その２～大阪クラブ創立～ …… 16
16.『露口四郎』その３～大阪クラブ創立～ …… 17
17.『戦前の日本ロータリーの特徴』その１ …… 18
18.『戦前の日本ロータリーの特徴』その２ …… 19
19.『ロータリークラブの発祥』その１ …… 20
20.『ロータリークラブの発祥』その２ …… 21
21.『ロータリークラブの発祥』その３ …… 22
22.『ロータリークラブの発祥』その４ …… 23
23.『ロータリークラブの発祥』その５ …… 24
24.『ロータリークラブの発祥』その６ …… 25
25.『ロータリークラブの発祥』その７ …… 26
26.『ロータリークラブの発祥』その８ …… 27
27.『ロータリークラブの発祥』その９ …… 28
28.『ロータリークラブの発祥』その10 …… 29
29.『ロータリークラブの発祥』その11 …… 30
30.『ロータリークラブの発祥』その12 …… 31
31.『ロータリークラブの発祥』その13 …… 32
32.「ロータリーあれこれ　大いなる春といふもの来るべし　高野素十」
伊丹 RC 卓話 … 33
33.「ロータリーにおける日本古来の倫理思想」伊丹 RC …… 38

序　に　か　え　て

竹中秀夫会員の発案で始まりました３分間情報『純ちゃんのコーナー』は、既に満１０年の歳月を閲することになりました。

最近のＲＩの動向は、バーナード・ショーではありませんが、将に「ロータリーよ、何処へ行く」の感がありますが、これは全て目に見えている現象の世界の出来事であります。現象の世界は、時代の変遷に応じて日々に新たに日にまた新たに変化して行きます。したがって、人の心もまた移ろいます。しかし、大事なことは世の中の目に映る現象の世界が如何に変わろうとも、世の中は本来如何にあるべきか、人間は本来如何に生きるべきか、という本質の問題を忘れてはならないと同様に、ロータリーは本来如何にあるべきか、という本質の問題を忘れてはならないと思うのであります。したがって、私達は、常に現象に惑わされることなく、物事の本質を見抜かなければなりません。

ロータリーは、創立以来、常に物事の本質を見抜いてきた思想であります。だからこそ、２０世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動であると謂われているのであります。それなるが故に、ロータリーは、古来、色々な理念を提唱し、様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーと謂うものは、２０世紀初頭以来、先輩達が素晴らしい知恵を残してくれているのであり、将にこれは先輩達の尊い知恵の結晶なのであります。したがって、先輩達に敬意を表して、その知恵に学ばなければならないと思うのであります。

そして、知恵に学ぶ、ということは、単に知識として知っているだけでは駄目でありまして、ロータリーの中で色々な体験を積み重ねることによって、初めてロータリーが身に付いていくものなのであります。したがって、私達は、単に知識を学ぶだけでなく、例会を始めあらゆる会合を通じて良質な職業人にお目にかかり、その一挙手一投足からなにがしかのものを学ぶという体験を積むことが大切であります。これが、社会奉仕、職業奉仕そして国際奉仕の実践の基本前提であろうかと思うのであります。

何はともあれ、昨年度は、『純ちゃんのコーナー』を３１回に亘って話しました。しかし、年間の卓話数に比べると若干少ないように思いますので、今回はそれに加えて、私の今年の３月２９日の伊丹クラブ卓話「ロータリーあれこれ～大いなる春といふもの来たるべし　高野素十～」と私の寸感「ロータリーにおける日本古来の倫理思想」を巻末に付け加えさせて頂きました。誠に拙いものではございますが御叱正を賜りますれば幸甚に存じます。

そして、この一年間、飽きもせず私の話を聴いて下さったクラブの皆様方の友情に心から感謝を申し上げますと共に、このパンフレットの発刊に御尽力賜りました杉本啓次会員はじめクラブ事務局の皆様に心からなる感謝を捧げペンを擱きます。

深　川　純　一

1.『再びニコニコ箱について』その１

ニコニコ箱については、既に２００１年度から始まった純ちゃんのコーナー第１巻第２１講と第２２講においてその概要を紹介致しましたが、その後、新しい会員も増えてその原理的な意味をご存じない方もおられると思いますので、今日は簡単にそのエキスだけを話しておきます。

まず、ニコニコ箱と謂うものは、世界中どこの国にもあるというものではないのであります。即ち、世界的な慣例ではありません。

日本でニコニコ箱の慣例が出来たのは、１９２３年の関東大震災の被災孤児達を東京ロータリーホームという孤児院で世話をしていましたが、１２年後の１９３５年即ち、昭和１０年、東京ロータリークラブの人達が当時オープンした多摩川園という遊園地に孤児達をつれて行ってやろうということになりました。

ところが、その資金は何処にあるのか。ロータリークラブは営利団体ではありませんから、クラブの必要経費の総額を会員の頭数で割って会員が均分に負担するものであり、クラブの経費以外に余分な金は一銭もありません。即ち、クラブの会員個人はお金持でありますが、クラブ自体には金はないのであります。

そこで、日本橋の羅紗問屋上村伝助商店の筆頭番頭であった関幸重という人が一計を案じまして、あり合わせのボール紙の箱をもって、『明日はあなたの誕生日ですよ』とか『昨日お嬢さんが結婚されたでしょう』とか言って、色々なことを軽妙洒脱に面白く話しながら例会場を回ったのであります。そこで会員達が皆笑いながら財布の紐を解いて幾ばくかの金を寄付しました。これが日本におけるニコニコ箱の始まりであります。

当時、大学卒の初任給が６０円くらいの時代に６００円の金が集まったと謂いますから、流石は東京ロータリークラブであります。この金で被災孤児達を多摩川園に連れて行くことが出来たのであります。

それから以後は、関さんが何かことあるごとにその箱を持って回ったのでありますが、皆がニコニコして金を出してくれるのに、ボール紙の汚い箱では具合が悪かろうと謂うので、三越に注文して「えびす様」の顔を彫った箱を誂えました。これがニコニコ箱の起こりであります。いずれにしても、戦前のロータリアン達は、金を集めるにしても色々考えてユーモラスにやったのであります。ただ現在のロータリーには、このユーモアがやや乏しいように思うのであります。曾て西宮クラブから出た今田恵ガバナーは、ロータリアンはユーモアを解すべし、と説かれたことも心に留めて置くべきであろうかと思います。

このニコニコ箱は、戦時中、軍閥の弾圧によって日本のロータリーが壊滅した時に、後難を恐れて他の書類と共に廃棄されたと謂われていましたが、今から約２０年ほど前に東京クラブに無事保存されていることが判りました。また、関東大震災を契機として東京クラブの奉仕活動が社会奉仕に大きく傾斜していったこと、その副産物としてニコニコ箱の慣例が生まれたことなど考えますと、今年の東北大震災に際しても先輩の智慧に学ぶべきことも多々あろうかと思います。

2.『再びニコニコ箱について一言』その２

前回申し上げたように、ニコニコ箱というものは、クラブの会員に何か嬉しい事があったときに、それを記念して社会奉仕のためになにがしかの浄財を入れるものでありますから、クラブにとっては会員からの預かり金であります。即ち、原理的に謂えば、会員からクラブに対する一つの信託財産であって、クラブの金ではないのであります。この金は、クラブの会員がこの善き因縁のお金で社会奉仕をして下さいよ、という形で、予めクラブ理事会に預けておくお金でありますから、これはあくまでも会員の預託金であってクラブ自身の金ではないのであります。したがって、例えば、クラブの通常会計が赤字になった場合、この金をクラブの赤字補填に使うことは出来ないのであります。もし、クラブがこの金を赤字補填に使えば、会員が社会奉仕のためにクラブに預けた金をクラブが横領したことになるからであります。このような恥ずかしいことは絶対にしてはならないのであります。したがって、クラブの通常会計が赤字になった場合は、クラブの会費を値上げするほかありません。

元来、ニコニコ箱は、クラブの会員が何か嬉しい事があったことを記念して出す金でありますから、何時入って来るか判らない､いわば不時の収入であります｡したがって、予め予算を立てることが出来ません。

したがって、予算に基づいて事業計画を立てるということも出来ないのであります。

したがって、ニコニコ箱の金は、当該会計年度に使うことは出来ません。

では、ニコニコ箱の管理はどのようにするのかと言いますと、その年度の６月３０日で〆て、その〆た金を次の年度の社会奉仕の事業予算科目に載せるのであります。

そして、次年度に使ってしまうのであります。このように、ニコニコ箱財源の支出方法だけは、会計年度が１年遅れになってくるのであります。

もし、当該会計年度に使うものとして予算を立てますと、５月頃になってニコニコ財源が予算額に満たなくなると、『今年度の予算額には未だ大分不足していますので皆さん御協力を御願いします』と言って、例会で各テーブルにニコニコ箱を回すようなことになります。これは会員に義務なき出費を強制することになり、ロータリーの原理に反することになります。このような恥ずべきことは絶対に慎むべきであり、いささかなりとも強制にわたることがあってはならないのであります。

第一、ニコニコ箱財源は、会員の善意で集まった金をもって社会奉仕に役立てるものでありますから、予めいくら集めなければならないという予算などを立てること自体、全くナンセンスなのであります。クラブとしては、その年度に集まった不時の収入金をどのような社会奉仕に使うべきかを考えればよいのであります。

このように、ニコニコ箱は、原理的には寄付金ありますから、『金を出したい人が、出したい時に、出したい金額だけ出す』ものなのであります。そして『出した人必ずしも尊からず、出さざる人必ずしも卑しからず』というのが寄付金の原則であります。

したがって、強制的要素の一切ないものをニコニコ箱というのであります。

3.『再びニコニコ箱について一言』その３

前回は、ニコニコ箱は寄付金でありますから、『金を出したい人が、出したい時に、出したい金額だけ出す』ものなのであり、『出した人必ずしも尊からず、出さざる人必ずしも卑しからず』というのが基本原則であり、強制的要素の一切ないものがニコニコ箱であると申しました。

ところで、東京ロータリークラブのこのニコニコ箱の慣例に対して、大阪ロータリークラブでは、既に昭和５年にニコニコ箱の慣例があったという説があります。

しかし、大阪クラブの慣例は、その実体は『罰金箱』でありまして、ニコニコ箱とは原理的にその性格が全く異なるのであります。罰金箱というものは、会員が例会に遅刻したときなどにＳＡＡが５０銭乃至１円を取り立てたものでありまして、昭和５年当時、６１円５０銭が集まったという記録があります。

このように、大阪クラブの慣例は、ニコニコ箱とはその原理的性格が異なるのであります。ニコニコ箱は、あくまでも会員に何か喜び事があったときにそれを記念して、社会奉仕のために心ばかりのお金をクラブに預けるものでありまして、罰金箱のように人を責める形で金を集めるものではありません。罰金という恨み辛みの籠もった金を社会奉仕に使うなどということは、心を大切にするロータリーの趣旨に合わないのであります。したがって、当クラブでは、私の会長年度から、ニコニコ箱とは別に罰金箱の制度を設けて、これを『すまんボックス』と名付けたのであります。

このように当クラブの『すまんボックス』は、罰金箱でありますから、クラブの赤字補填に使うことも出来るのであり、その他にも貯まった罰金をクラブ会員の親睦のために使うことも出来るのであります。何故なら、罰金箱は、原理的には、恨み辛みの籠もった金でありますから、このような金は、本来、社会奉仕に使うべきではないからであります。このように、ニコニコ箱と罰金箱とは原理的に区別して取り扱わなければなりません。これを混同するとロータリーが衰退するのであります。

要するに、ニコニコ箱の収入支出は、寄付金の原則によりますから、強制力はありません。『金を出したい人が、出したい時に、出したい金額だけ出す』『出した人必ずしも尊からず、出さない人必ずしも卑しからず』という原則に服することになるのであります。詰まり『出してよく、出さないでよいニコニコ箱』であります。したがって、これは浄財でありますから社会奉仕にだけ使うべきであります。しかも、これは不時の収入でありますから、予め予算を立てることは出来ないのであります。

これに対して、罰金箱は、徴収のルールを理事会で決めれば、これは一つの契約でありますから強制力があります。会員の意に反しても強制的に取り立てることが出来ます。そして、これも不時の収入でありますから予算化は出来ません。しかし、これは、罰金でありますから、原理的には恨み辛みのこもった金であります。したがって、クラブ財源の赤字補填に使うことも、その他クラブや会員のために自由に使うことが出来るのであります。

4.『リーダーとリーダーシップ』

今の世の中には、国家をはじめ地方自治体、会社、病院その他公私に亘って色々様々な組織があります。したがって、組織の長たる立場にあるリーダーも色々様々であります。これは将に現象の世界であります。

中には、リーダーとして欠くべからざる適格即ち、リーダーシップの本質を辨えないリーダーもいます。リーダーにリーダーシップがないと組織が滅びます。リーダーは目に見えますが、リーダーシップは目に見えません。これは、体験によって身に付くもの、授かるものであります。世の中の色々な人と出会い、話を聞き、その人達の一挙手一投足から授かり、学びとるものなのであります。そして、学んだことは実践して初めて身に付くものなのであります。

ロータリーは例会に出ておれば解る、というのはこのことなのであります。

そこで、真のリーダーシップの一例として一つの物語を紹介しておきます。

江戸時代の寛保年間、京都に山下京右衛門というかなり名の知られた俳優がいました。ある時、当時売り出し中の女形沢村四郎五郎を相手役として演じたところ、京右衛門の評判は圧倒的に高かったのですが、四郎五郎の方は人気がありませんでした。

ところが、その芝居を当時、一代の名優といわれた二代目坂田籐十郎が見物に来たので、京右衛門は敬意を表して挨拶に出て、「未熟者故、どうか御批判を…」と頼みました。すると、籐十郎は、「全く下手だね」と言ったきり、帰ってしまいました。京右衛門はムッとしましたが、相手が名優なので、思い直して、演技に一層の工夫を凝らしましたので観客の受けは益々よくなる一方でありました。

そこで、京右衛門は、もう大丈夫だろうと思って、辞を低くして頼んで観て貰ったところ、籐十郎はやはり「何度観てもお前さんは下手だよ」とにべもなく言いました。

京右衛門は怒りを抑えましたが胸の中は納まりません。その晩、籐十郎の家に出かけて行って、「自分としては精一杯で、これ以上の工夫の凝らしようがありませんが…」と頭を下げて尋ねました。すると籐十郎は、「お前さんの芸は、どうにか出来ているが苟も一座の頭となれば、出来るだけ相手役なり、下の役者を引き立てて、一人で場をさらってしまうような仕草は慎まなければならない。お前さんの相手役の四郎五郎は、今売り出しの若手なのに、お前さんが先へ先へと出るので彼は手の出しようがない。観客の拍手喝采は、お前さんに集まっているが、それは真の拍手喝采ではない。お前さんが自分を抑えて、相手役や若手の芸を引き立たせながら、観客の拍手喝采を浴びたならそれこそ本物なのだ。お前さんを下手だと行ったのはその心組みを言ったわけだ」と答えたのであります。

今の世の中のリーダーに欠けているのはこの点であります。自分だけが輝いていたいというリーダーが多過ぎます。自分のことはさておいて先ず世のため人のためのことを思うのがロータリアンであります。このことは芸の世界に限らず、企業でも政界、官界そしてロータリーでも全く同じことが言えます。したがって、リーダーにリーダーシップがない組織は、やがて亡ぶことになるのであります。

5.『品格のあるスマートなクラブ』その１

竹中会長は、今年の第１例会の会長挨拶の劈頭、品格のあるスマートなクラブを目指したい、ということを説かれました。この言葉を聞いてすぐ思いだした言葉は、昔、日本海軍の士官の心得として説かれた３Ｓという言葉でありました。３Ｓというのは、Smart,Speed,Smile の略語であります。

ところで、スマートなクラブを作り上げるには、先ず会員１人１人がスマートでなければなりません。では、スマートとは具体的にはどのようなことなのか。それは、会員の身なりや態度・行動が洗練されて粋なことであります。それには先ず、会員の身も心も洗練されなければスマートなロータリアンになることは出来ません。

では、具体的には一体どうすればよいのか。一つの物語を紹介しておきます。

１９３６年、イタリア国立聯合病院のエンリコ・ジュッポーニ博士が「鏡の前の外科医」という一種の「想い出の記」とでもいうべき名著を発刊しました。この本の題名は、その一節の「鏡～言葉なき批判者」という文章が極めて印象的であり、感激を覚えるものなので命名されたらしいのであります。

さて、どこの病院でも、手術室に入る前に消毒室があります。その消毒室の壁には、大きな鏡が取り付けられています。外科医は、手術室に入る前、ここで手洗いをして手の消毒をします。そして、鏡の前に立って、鏡の中の自分の目に問いかけるのであります。今から行おうとする手術は、人の道に反してはいないか、良心に悖るところはないか、自分の全能力を発揮できるか、を確かめて後、静かに手術室に入ります。

そして、手術が終わり最後の縫合が行われると、元の消毒室に戻り、手術衣と手袋を脱ぎ、マスクをはずしてから、また鏡の前に立ちます。そして、今行ってきた手術の批判を鏡の中の自分の目に見るのであります。鏡の中の目から、手術は正しく行われたか、全力を発揮できたか、全て良心に従って行われたかと反省するのであります。

エンリコ・ジュッポーニ博士は、ここで次の言葉を書き加えています。即ち、「鏡は一瞬にして全てを表す。鏡は冷たく、隠蔽することを知らない」と。

私は、この話の根底に、自己を厳しく見つめ、他者を優しく思いやる職業奉仕の心を見るのであります。そして、クラブの１人１人の会員が毎朝、厳しく自分を見詰めて一日の行動を始めることによって、初めて品格のあるスマートなクラブが出来上がると思うのであります。

自分の目を見詰め、その奥に自分の心を観て自己研鑽の糧とし、自分の行動の一挙手一投足を洗練されたスマートなものとするのであります。そして、例会で他の会員の一挙手一投足から学んだことを自分の心に植え付けることによって、初めて人は育つのであります。これが自己研鑽であり、例会で仲間によって育てられるのが切磋琢磨であります。だからこそロータリーは、例会出席をやかましく言うのであります。

これがクラブ奉仕の基本であります。「ロータリーの例会は人生の道場である」と謂う米山先生の言葉の全ての意味がここにあるのであります。

6.『品格のあるスマートなクラブ』その２

前回は、竹中会長が今年度第１例会で提唱された品格のあるスマートなクラブについて、昔の海軍士官の心得としての３Ｓ即ち、スマート、スピード、スマイルSmart,Speed,Smileという言葉のうちのスマートということについて一言申し上げました。そこで、今日は３Ｓの中のスピードという言葉について話したいと思います。

実は、この３Ｓという言葉は、戦時中、元海軍航空隊の教官をしておられた海軍大尉の亀井宰さんから聞いた言葉であります。亀井さんは、私と酒を酌み交わしながら、曾て海軍士官として受けた躾が、今、実業家になっても大変役に立っていると述懐しておられました。即ち、海軍士官が自分の行動を規律するモットーとしてスピードということを重視しているのは、軍艦という複雑な閉鎖社会では仕事をスピーディに処理する能力が要求されるからだというのであります。しかも拙速でなく、巧緻でなければなりません。そうでなければ、一旦緩急あるときに戦争に負けてしまいます。したがって、自分の行動の一挙手一投足がスマートにしてスピーディでなければなりません。そして、このことは軍艦に限らず一般社会においても、何事によらず仕事を処理する上で重要なことはスピーディでなければならないというのであります。

では、これをロータリーについて謂えばどのようなことになるのか。

私は、クラブに入会後３年目の１９７６～７７年度にクラブ幹事を務めましたが、その時のクラブ会長は名誉会員の松谷英次郎さんでありました。そして、会長と共に幹事エレクトとして地区協議会に出席しましたが、その年度の幹事部門のリーダーは、神戸東クラブの末正久さんでありました。末正さんは、千種会でも勉強されたロータリーの理論家でありましたが、その末正さんが、地区協議会の幹事部門で説かれた言葉に、私が肝に銘じて忘れ得ぬ言葉が一つあります。

それは、「幹事は、手紙を受け取ったら２４時間以内に必ず返事を出すべし」ということでありました。手紙を貰った相手に直ちに返事を出す、そのことが将に相手に対する思いやりであり、同時に自分の信用を高めることになるというのであります。

幹事は、クラブ内外の情報を一身にプールしていますから、あらゆる情報は全て幹事を経由することになっています。したがって、幹事は、クラブ管理の全ての実権を握っているのでありますから、クラブの中の事務処理はスピーディでなければならないのであります。

そして、このことは、何も幹事だけに限ったことではありません。社会の管理者であるロータリアン全てに当て嵌まることであります。現に私の体験で謂えば、多くのパストガバナーや指導的立場にあるロータリアンに手紙を出しますと、谺が返ってくるように直ちに返事が来ます。そのことがロータリーに所謂良質なロータリアンであることの証なのであります。極稀に返事の返ってこないロータリアンもいますが、その人は、そのことによってロータリアンとしての信用を失うことになるのであります。この意味では、ロータリーの世界は真に厳しいものであります。これが、将に、お互いが厳しく自己を見つめ合う精神的親睦の世界なのであります。

7.『品格のあるスマートなクラブ』その３

前回は、品格のあるスマートなクラブという竹中会長の提唱ついて、スマート、スピード、スマイル Smart,Speed,Smile という３Ｓの言葉の中のスマートについてお話申し上げました。そこで、今日は、の最後のスマイルについてお話し致します。

さて、海軍士官が忙しい艦隊勤務の中で、常にスマイル・微笑みを忘れないという心得は、真にスマートな海軍士官らしいモットーだと思うのであります。

では、これをロータリーについて謂えばどのようなことになるのか。

私がスマイルという言葉を聞いてロータリーについてすぐ思いだしたのは、日本のロータリーがまだ５地区しかなかった頃に西宮クラブから出た名ガバナー今田恵先生のことでありました。今田先生は、主としてアメリカで唱えられたプラグマティズムの心理学の大家であられまして、曾て私の母校関西学院の院長でもあられました。

先生の没後、西宮クラブが発行した追悼録『今田恵～人とそのロータリー思想～』（昭和５７年発刊）に西宮クラブの元会員達が今田先生の想い出を語っておられますので、その二、三を紹介しておきます。

元会員の寺本清次郎さんは、「…私は、毎週例会に出席し、今田先生のにこやかなお顔を拝見するのが楽しみでございました。また、ある時期には、名ガバナーとして大変忙しくご活躍の日々を送っておられましたが、いつも、いわゆる「今田スマイル」を湛えられながら、どんな人ともにこやかに談笑せられておられた御姿が未だに私の瞼に浮かんでまいります」

また、元会員の長部俊三さんは、「ロータリー・フェイスという言葉が許されるなら、今田先生をおいてほかにあるまいと思うのでございます。いつも変わらぬ笑顔、静かな口調で話しかけられる先生の温顔を私は忘れることは出来ません。しかも、先生のお話になることの全てが､「誠」であり、「善意」であり、ロータリーを愛する精神であったと思うのでございます」

また、当時の西宮クラブ会長八木弦三郎さんは、その追悼録の冒頭の挨拶において、「…先生の話になると、何か春風にも似たあたたかい雰囲気が私達のまわりに漂い、つい先日の事のように思い出されるのです。先生のスピーチや講演は、御承知のように聞く者を魅了せずにはおかない独特の魅力がありましたが、ふだんは、どちらかといえば、にこやかで物静かな紳士のようにお見受けしました」と述べておられます。

クラブの人達から「今田スマイル」と崇められ、また､「ロータリー・フェイス」と讃えられた今田恵パストガバナーは、将に「和顔愛語」の人であったと思うのであります。

何はともあれ、スマイルは、ロータリーの核にある親睦の大切な要素であります。

「どこで会ってもやあと言おうよ」というロータリーソングのように、ロータリアン同志であれば、会えばすぐ、ごく自然に微笑みが生まれます。これがロータリアンの証しであり､「ロータリー・スマイル」とでも謂うべきものであります。

8.『品格のあるスマートなクラブ』その４　～高明満座～

前回は、品格のあるスマートなクラブという竹中会長の提唱ついて、スマート、スピード、スマイルという三つの言葉の中の最後のスマイルについてお話申し上げました。そこで今日は、クラブの品格について申し上げたいと思います。

実は、私が伊丹クラブに入会したのは、１９７３年、昭和４８年３月でありますが、その年度のガバナーは、西宮甲子園クラブから出られた古河滋ガバナーでありました。そして、入会した月に頂いた３月３０日発行のガバナー月信第１０号の巻頭言の言葉は、私にとって終生忘れ得ぬものでありましたので紹介しておきます。

古河ガバナーは、この巻頭言においてクラブの品格について説いておられました。

即ち、「ロータリーの集まりは、ただの友愛の場であってはならない。それは互いに高め合うための場であってほしい。決して堅いことばかり言う会ではなく、素朴で、ありのままに語り合える会、気楽なゆとりのある会でなければならぬが、香りの高い集まりでなければならない。

『歩々清風を起こす』一歩一歩清々しい風を起こす、というが、それは平面的な集まりでなく、盛り上がる会でなければならない。生命力に充ちた集まりであってほしい。

『高明満座』互いに高明と呼べる集まりであってほしい。

先ず我々自身を高めることである。いかに背伸びしても、我々が持たぬものは人に与えることは出来ない」というのであります。

更に、古河ガバナーは、その３ヶ月後の月信第１３号において南禅寺派管長の柴山全慶老師の扁額に見た『歩々起清風』という五文字に触れて、「これは、我々の日々の歩みのあとに清風を起こす。我々の行動は、その都度周囲の人々によき影響を与え、世の中を浄化すべきであるという意味に解釈している。もし、一人一人のロータリアンの言葉に、態度に、行動に、またクラブの活動のあとに清々しさと後味のよさを地域社会に強く感じて貰えるようであればと願う。ロータリアンとクラブは、是非そうであってほしいものである。

或る財団奨学生が私に聞いた。「ロータリークラブの会員になるのには、どの程度以上の金持という規則があるのでしょうか」と。笑えぬ話である。我々の残す風に若干でも黄金臭があるのであろうか。金持ちの飯食い会。寄付の会。大衆と縁遠いエリートの会と見られている間は、ロータリーも清風を起こしているとは言い得まい」と。実にいい話であります。

この話は、クラブの品格ということを大切にするロータリーの一面をよく伝えていると思うのであります。一業一会員制で選ばれた良質な職業人が自分の人格を高める自己研鑽、これは自分一人だけで自己研鑽をするのではなく、毎週一回の例会で良質なフェローロータリアンと触れ合いながら、その人格的な影響を意識的・無意識的に受けながら、お互いを高め合う自己研鑽・切磋琢磨でなければなりません。このことによって初めて品格のあるクラブが出来上がると思うのであります。

9.『品格のあるスマートなクラブ』その５

前回は、品格のあるクラブを作るには、会員各自が自分一人だけで自己研鑽をするだけでなく、毎週一回の例会で良質なフェローロータリアンと触れ合いながら切磋琢磨しなければならない、ということを申し上げました。ということは、クラブの品格を高める前に、会員各自の品格を高めることが基本前提になっているのであります。

そのためにロータリーは、創立以来、一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則を採ってきたのであります。品格のある良質な会員を集めることによって品格のあるクラブが出来るという論理であります。

では、如何にして良質な会員を選ぶか。元来、ロータリークラブというところは、入会したい人が入会申し込みをすれば入会出来るというようなシステムを採っていません。クラブが主体的に、秘かに地域社会の中から良質な人を選び出し、会員選考委員会、職業分類委員会等々１４段階の手続を経て、初めて入会が許されるものでありました。これは、クラブの閉鎖性がら当然のことでありまして、それ故にこそ、クラブの会員になることは名誉なことであり、会員もロータリアンであることに誇りを持っていたのであります。

ところが、その後、１４段階の手続が６段階に簡略化され、更に 国際ロータリーの会員増強の声に押され、規制緩和によって現在は、会員の良質性のチェックが余り為されていないようであります。そのために、クラブの魅力がなくなり、入会しても簡単に退会していく会員が増えているのであります。会員の品格がなくなれば、クラブの品格もなくなり、クラブの魅力もなくなるのは当然のことであります。

昔は、クラブの入会は厳格なものでありました。

10.『品格のあるスマートなクラブ』その６　～韋駄天の心～

今日は「韋駄天という仏様」の話をします。

これは、天皇陛下が未だ皇太子殿下であらせられた頃、宇治の黄檗宗の総本山万福寺をお訪ねになったときの話であります。

接待にでられた御老師は、「自分は禅坊主だから、この寺が紀元何年に建てられたとか、この扁額は誰が書いたとか、そのような俗な話をするわけにはいかない」と言われて、皇太子殿下に『韋駄天』という仏様の話をなさいました。

韋駄天という仏様は、どのような仏様かと申しますと、仏様にも色々位がありまして、最も位の高いのが、阿弥陀如来、大日如来のように名前の下に如来という言葉のついている仏様、そして、その次の位が、勢至菩薩、普賢菩薩のように菩薩という言葉の付いている仏様、そして、更にその下の位が、毘沙門天、帝釈天、韋駄天のように天という言葉のついている仏様であります。この天という字のついた仏様は、どのような役目をもった仏様かと言いますと、私達の日常生活万般のことを司る役目をもった仏様のことなのであります。

では、その中で、韋駄天という仏様は、どのような役目をもった仏様かと申しますと、夜の帳に終わりが参りまして、東の空が白んで参ります。やがて、山の端に太陽がチラッと覗きます。朝日がサッと大地にさして来る、その一瞬を捉えて、仏様の懐から出て、仏様の御使いとして、全世界の家庭を訪れます。

そして、竹中会長のお宅を訪れて窓を開けて、今日一日この竹中家に仏の幸せがありますようにと祈ります。そして、今度は、隣のお宅を訪れて、今日一日この一家に仏の幸せがありますようにと祈ります。このようにして、朝日が大地に差し込んだ一瞬の内に全世界の家庭を訪れて幸せを祈り、そしてまたその一瞬の内に舞い戻って、只今全世界の家庭に仏の幸せを祈って参りました、と復命をする役目をもった仏様のことを韋駄天というのであります。

御老師は皇太子殿下に『貴方は、やがて天子様になられるお方でございます。今日の老僧との出会いを大切になさって、毎朝、全ての人達の幸せを祈る韋駄天という仏様のいることを心に留めておかれますように』という話をされたそうであります。

申すまでもなく、この物語は、帝王学の根底に流れる思想を説いています。即ち、私達は人間である以上、世の中には、好きな人も、嫌いな人も、憎い人も沢山居ます。

にも拘わらず、毎朝その全ての人達の幸せを祈る韋駄天の心、これは天子様にとっては、欠くことの出来ない心であろうかと思うのであります。

ところで、私は、この韋駄天の心は何も天子様に限らず、ロータリアンの心の根底に流れる思想でもあると思うのであります。何故ならば、ロータリアンは、皆、社会の管理者として長たる立場にある人でありますから、凡そ組織の長たる立場にある者は須くこの韋駄天の心がなければならないと思うのであります。例えば、ロータリアンの会社について言えば、社長が、毎朝、自分の部下将兵の幸せを祈る心をもっているか否かにより、その会社のあり方が違って来るだろうと思うのであります。

11.『品格のあるスマートなクラブ』その７　～韋駄天の心～

前回は、毎朝全ての人達の幸せを祈る韋駄天という仏の心は、天皇陛下だけでなく、すべてのロータリアンの心の根底に流れる思想であるという話を致しました。

即ち、この韋駄天の心をもったロータリアンの会社は、恐らくどのような不況期にも潰れないであろうし、長期的に安定した利潤を着々と獲得して行くであろうと思うのであります。では、一体そのようなことを証明する事実があるのか。

実は、１９２９年に始まるアメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニック。あの時に、ロータリアンは一人も倒産していなかったという事実があります。これは、ロータリアンが毎週１回の例会において、企業経営上のアイディアを交換し、倫理的な企業活動のノウ・ハウを開発して、それを自らの企業に実践してきたという職業奉仕実践の功徳であると謂われています。したがって、韋駄天の心は職業奉仕の核にある思想でもあると思うのであります。

そして更に、世界中の全ての人達の幸せを祈るこの韋駄天の心は、何も職業奉仕に限らず、社会奉仕、国際奉仕、世界社会奉仕等ロータリーの全ての奉仕の実践をするについても、ロータリアンの心の根底に流れる思想であろうかと思うのであります。

世界中の全ての人達の幸せを祈る韋駄天の心、将に、これはロータリアンにとって欠くことの出来ない心、終生肝に銘ずべき心であろうかと思うのであります。

１９６２－６３年度の国際ロータリー会長、インドのカルカッタ・ロータリークラブから出ました偉大なロータリーの思想家ニティッシュ・ラハリーは、『世界中の何処かの片隅に、一人でも不幸な人がいる限り、我々ロータリアンは永久に幸せになることが出来ない。心の中に火を燃やそう。Kindle the spark within !』と謂う有名なターゲットを打ち上げました。

これは、真に東洋的な神秘なターゲットでありまして、心の中に火を燃やすことによって、この世の中を明るくして行こうというのであります。そして、そのためには、私達ロータリアンがこの世の中の全ての人達の幸せを祈らなければならない、とラハリー元会長は呼びかけているのであります。

ロータリアン全てがお互いに幸せを祈り合う、そのようなロータリーであって始めて世界平和の実現に寄与することが出来ると思うのであります。したがって、ロータリアンの皆さん方が、自分の企業を管理するに際しても、更に、地域社会、国際社会に奉仕するに際しても、毎朝全ての人達の幸せを祈る韋駄天という仏様が居ることを心に留めておくべきであると思うのであります。実は、ロータリアンとは、その心の根底に韋駄天の心を持っている人達のことであると思うのであります。

このように、ロータリアン一人ひとりの心の中にあるものが大切なのであります。

幸せを祈るという目に見えない大切なものを心の中に籠めること、これがロータリーの中核にある考え方なのであります。したがって、私は、ロータリーは祈りの哲学である、とも考えているのであります。

12.『決議２３－３４号の存在意義』その１

決議２３－３４号というのは、１９２３年のセントルイスの国際大会における第３４号決議案が紛糾の結果、それを解決するために提案された代案としての第３４号決議案の決議のことであり、１９２３年の大会決議であることから「決議２３－３４号」と呼ばれているのであります。

さて、この決議２３－３４号は、１９２３年までに築き上げられたロータリーの原理体系を総括して、これを一言で言えばロータリーとは斯くの如きものである、ということを恰も般若心経のように短文に凝縮して、簡明直裁に宣言したものであります。就中、奉仕の実践原理として特に重要なのは、従来、個人奉仕を原則とした初期ロータリーが、この決議の第６項において、初めて団体奉仕的な社会奉仕というものに厳重な枠を嵌めた上でこれを認めたことであります。

元来、ロータリークラブは、社交クラブとして自治団体でありますから、奉仕の実践についてもクラブ自治権に基づいて自由闊達に行われていたため、その実践の態様は将に様々であり、個人奉仕もあれば団体奉仕もあったのであります。例えば、牧師が馬を死なせて困っていいるのを見たシカゴクラブの会員達が皆で金を集めて馬を買い与えたり、身体障害者の養護学校を作るためにクラブで金を集めたりして、真に自由闊達に団体奉仕も行われていたのであります。

このように、個人レベルやクラブレベルでは、団体奉仕はロータリー創立当初からクラブ自治権によって自由闊達に行われていたのでありますが、これを決議２３－３４号という国際大会の決議によってＲＩレベルで集約し採択したところに大きな意味があるのであります。

ただ、それまでのロータリーは、個人奉仕が原則であるというのが伝統的な考え方でありましたから、ロータリーは皆で金を集めて何かをしようというような団体ではないという考え方が支配的でありました。

そのため、例えば、第一次大戦を契機として１９１７年度の国際ＲＣ連合会長 Arch C.Klumph が提唱した「国際理解と親善のための基金」、これが後に至ってロータリー財団となるのでありますが、この基金についても、当初から金は全く集まらなかったのであります。

しかし、当時の国際ロータリークラブ連合会幹事 Chesley R.Perry（後にＲＩ事務総長）は、災害その他緊急時の救済基金 relief fund が絶対に必要だと考えて、苦労しながらもこの基金に金を貯めていたのであります。

実は、これが後に至って１９２３年、あの関東大震災に際してＲＩが救済基金として東京ロータリークラブに２５，０００＄という大金を贈ってくることになるのであります。米山梅吉さん始め東京クラブの面々が吃驚仰天し、且つ感激して、ロータリーを見直したことは日本ロータリーの歴史上の有名な話であります。

この関東大震災の年に団体奉仕に関する決議２３－３４号がＲＩレベルで採択されたということに、私は何か因縁めいたものを感じるのであります。

13.『決議２３－３４号の存在意義』その２

前回は、ロータリーは創立以来個人奉仕が原則であったため、皆で金を集めて奉仕をするような団体ではないと考えられて居ましたから、例えば、１９１７年度の 国際ロータリークラブ連合会長 Arch C.Klumph が提唱した「国際理解と親善のための基金」（後にロータリー財団）についても、金は全く集まらなかったこと、しかし、当時の連合会幹事 Chesley R.Perry（後にＲＩ事務総長）が緊急時の救済基金が必要だと考えてこの基金に金を貯めていたこと、そして、これが後に１９２３年、関東大震災に際してＲＩが救済基金として東京クラブに２５，０００＄という大金を贈ってくることになったという話を致しました。

ただ、この基金にはその後ロータリー財団になってからも金は集まりませんでした。ではロータリー財団は、一体何時から現在の様に栄えるようになったのか。それは、ポール・ハリスが１９４７年にこの世を去った時、後に残されたロータリアン達がポール・ハリスの遺志を継ごうと言って立ち上がりました。彼が終生最も強く念願していたものは一体何か。

それは戦争予防のためのロータリーの国際性、ロータリー財団の育成、これは疑う余地はない。そこでロータリー財団に募金をというスローガンが掲げられ、ロータリー財団が一躍国際奉仕の檜舞台に立つようになったのであります。

元来、団体奉仕は、前回も申し述べたように個人レベル、クラブレベルでは、１９０５年の創立以来、クラブ自治権に基づいて自由闊達に様々なものが実施されていましたが、それは当然の事ながら各クラブ毎にバラバラでありました。

それがアメリカ社会における身体障害者養護学校設立の運動を契機として、ロータリーのごく一部の真に小さなエネルギーがこの運動に加わることによってロータリー分裂の危機を招くほどの大論争となり、その結果、双方の寛容の心の自覚によって、「決議２３－３４号」という国際大会の決議として、ＲＩレベルで団体奉仕を認めたことは、ロータリー運動にとって将に画期的なことでありました。そして、いみじくもその同じ年に発生した関東大震災に際してＲＩが救済基金を送ってきたことには、このような深い意味があることに思いを致さねばならないと思うのであります。

今のロータリアンが、歴史というものを学ばず、したがって、何らの原理認識もなく、ロータリーは個人奉仕だ、いや今はもう団体奉仕だなどと薄っぺラな議論をしていますが、２０世紀初頭のロータリアン達が様々な葛藤の末、将に苦渋の選択として団体奉仕を生み出した、その先輩達の様々な悩みを知らなければ、ロータリーというものの真の理解はあり得ないと思うのであります。

何はともあれ、衰退した今のロータリーを２０世紀初頭の素晴らしいロータリーに復活させることは、将に永遠のテーマであり、私達はこの永遠のテーマの実現に終生努力しなければならないと思うのであります。これがお世話になったロータリーに対するロータリアンとしての努めであると思うのであります。

14.『露口四郎』その１　～クラブ幹事歴任１３年～

日本ロータリーの歴史は、僅か１世紀にも満たない精々８０年足らずの歴史でありますが、私達の先輩達は、２０世紀が戦争と革命の世紀だと謂われたその激動の時代を見事に生き抜いて、素晴らしい精神伝統を残してくれているのであります。その思想の歴史に学ぶことが、未来のロータリーを正しく展望するためには欠くことの出来ないことであろうかと思うのであります。

その中でも、私達が肝に銘じて絶対に忘れてはならない Epoch making な出来事は、昭和１５年、軍閥の弾圧による日本ロータリー壊滅の物語であります。

この時、ロータリーと謂う組織は壊滅しましたが、ロータリー思想は消えなかったのであります。戦前、戦中、戦後のロータリー。大正９年１９２０年から昭和１５年１９４０年に至る２０年間のロータリー運動のエネルギーが如何にして形成されたか。戦前の歴史は、ロータリー日本史の中核であります。このエネルギーの延長線上に戦中、戦後の歴史があるのでありまして、私達は、この戦前の思想史を検証することなく、未来を正しく展望することは出来ないであります。

ところで、ロータリー日本史を勉強するに際しては、二つの書物を手元におかなければなりません。

一つは、大阪クラブの露口四郎氏編纂の【大阪ロータリークラブ５０年史】。

一つは、神戸クラブが出しているロータリー史。これには、【我らの集い】【世界と共に】【神戸ロータリークラブの歴史】の三冊がありますが、これらを集約したものが直木太一郎パストガバナー編纂の【ロータリー日本５０年史】であります。したがって、ロータリー日本５０年史は、神戸ロータリークラブの歴史をもとにして書き上げられたロータリー日本史の記述であります。

なお、私は、直木さんからは、直にお話をお聞きしたり、何回か手紙を頂いたりして、日本のロータリーの歴史を色々と教えて頂きました。

ところで、【大阪ロータリークラブ５０年史】は、露口四郎氏の編纂に係るものであります。露口氏は、大阪ロータリークラブ幹事歴任１３年３ヶ月、引き続いて金曜会時代も幹事歴任４年２ヶ月、引き続き、戦後、国際ロータリーへ復帰後も、幹事歴任４年３ヶ月、合計２１年８ヶ月に亘って亘ってクラブ幹事を歴任されたのであります。同時に、会報編集委員長は、戦前・戦後を通じて２２年歴任されているのであります。露口氏がこの体験をもとにして、ロータリーの生き字引として書いたものが【大阪ロータリークラブ５０年史】であります。

これは、露口氏が、自分の体験の中で、原理の裏打ちをもって歴史を書いているので非常によい書物であります。

実は、たまたま露口氏の御子息が、私と同期の弁護士である露口佳彦君でありまして、関西千種会に所属しておられるのでありますが、私は露口君から御尊父露口四郎さんのノートのコピーを頂きましたことも附言しておきます。

15.『露口四郎』その２　～大阪クラブ創立～

今日から日本の第２本家クラブ、大阪ロータリークラブ創立の物語に入ります。

米山梅吉さんと共に東京ロータリークラブを創立した福島喜三次さんは、１９２１年、大正１０年３月、東京クラブの第３回目の例会である第２水曜日を待たずに左遷により大阪支店勤務になりました。したがって、東京クラブでは例会に２回出席しただけで何もしないまま退会し、大阪に来ることになりました。実はこれが大阪クラブ創立の物語に繋がるのであります。福島さんの奥様曰く、『主人は、東京クラブでは上下の階級構造があったので小さくなって息も出来ないような有様でしたが、関西の実業家達は心が大らかで、全ての人達を平等対等に遇する雰囲気でしたので、主人は水を得た魚のように溌剌としました』と。

ここで彼は、後に大阪クラブの創立者となる星野行則氏とロータリーについて語り合う機会を得たのであります。殊に、大阪商船社長の村田省蔵氏とは生涯をかけての付き合いとなり、二人の子供達同士まで兄弟のように付き合うようになったのであります。このことは、二人の付き合いが如何に精神的な深さを持っていたかを物語るものであります。

何はともあれ、福島さんは、大阪の実業家に暖かく迎えられまして、その時に、星野行則氏を指導者とする関西の財界人に対して、テキサスのダラスで経験したロータリー運動即ち、１９１５年に書かれた初期ロータリーのバイブルであるGuy Gundakerの【ロータリー通解】を中核とするロータリーの正当派理論というものを十分に解説する機会に恵まれたのであります。

そこで、大阪の実業家達はロータリー理論を知り、東京にロータリークラブが出来た以上は、大阪にもロータリークラブを作らなければなるまいが、そのためには心の準備をしておく必要があるというので、１９２２年、大正１１年春に、星野行則氏を団長とする関西実業家による訪米経済使節団が編成されたときに、福島さんが事前の折衝をして、星野氏をシカゴで国際ロータリーの事務総長Chesley R.Perryに面会させたのであります。

Chesley R.Perryは、大変喜んで、『君が大阪に戻って、大阪にロータリークラブを作るのであれば、国際ロータリー理事会は、その全権を委任する準備が出来ているが引き受けてくれるか』と言ったところ、星野氏はこれを快諾したのであります。この時、星野氏は、Chesley R.Perryからロータリーに関することを色々教えられたのでありますが、この年は、標準ロータリークラブ定款が採択された年でありましたから、彼の受けた情報は最新のものであったのであります。

やがて、国際ロータリーから、星野氏を特別代表とするとの任命令書が来て、ここに、日本の第２の本家クラブである大阪ロータリークラブが国際ロータリーの直轄で誕生することになったのであります。時に１９２２年、大正１１年１１月１７日のことでありました。

16.『露口四郎』　その３～大阪クラブ創立～

前回は、大阪クラブの初代幹事福島喜三次さんは、クラブ管理の大黒柱であるクラブ幹事を育てることが最も大事であるとして、クラブの事務職員として大丸百貨店から出向していた露口四郎さんにロータリーの原理を教えて、その翌年、露口さんをロータリアンとして入会させてしまったということを話しました。

この話は、何とも実に大らかであり、社長であれ事務職員であれ何の分け隔てなく、何のこだわりもなく同じクラブの仲間として入会させてしまうなどと謂うことは、一般世間の常識から謂えば考えられないことでありました。このことは、大阪ロータリークラブが社交クラブの本質を弁えた自由闊達なクラブであることを象徴的に表しているのであります。

明治の先覚者福沢諭吉先生が「神は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」と謂ったように、ロータリーも「ロータリアンの上にロータリアンを作らず、ロータリアンの下にロータリアンを作らず」でありまして、ロータリーの世界は、このように万民平等の世界なのであります。だからこそ、うわべだけの付き合いでなく、心の友ばかりが集う本当の親睦、所謂ロータリーの精神的親睦が出来上がったのであります。

大阪商船社長の村田省蔵さんと三井物産の社員福島喜三次さんとの生涯をかけた友情が育ったのもその好例であります。この精神的親睦こそロータリーの綱領の第１に所謂「心の友を得て以て奉仕の契機と為すべきこと」の意味する全てなのであります。

このような大阪クラブの親睦が醸成されたことは、大阪の実業家のこだわりのない心の広さもさることながら、福島喜三次さんの力に負うところが大きいのであります。即ち、福島さんが露口さんに教えたロータリーは、福島さんがダラスクラブに在籍していた頃に読んだと思われる Guy Gundaker の「ロータリー通解」によるものでありましたから、福島さんは、先ず、親睦から初めて、時間励行と出席率とで会員を例会に引きつけ、その上、当時としては珍しかった家族同伴の小旅行や運動会、それに趣味の同好会などを盛んに催し、更に日本語の大阪ロータリークラブの歌を作ったり、ロータリー小唄を作ったりして、楽しいクラブとして評判になったのであります。

そして、ロータリーの精神である奉仕の理念やクラブの規則通りの運営などを、当時の日本の社会の実情に調和させようと努力し、いち早く、定款や推奨クラブ細則その他を翻訳しているのであります。

しかも、初代会長星野行則さんが訪米使節団の一行と共に渡米した際に、シカゴにおいて時のＲＩ事務総長チェスレー・ペリーから直伝且つ最新の情報を与えられていましたから、大阪ロータリークラブは、創立当初から理論付いていたのであります。その後を受けて露口四郎さんが戦前、戦中、戦後２７年間に亘って大阪クラブの幹事職を歴任したのであります。

17.『戦前の日本ロータリーの特徴』その１

前回は、露口四郎さんが戦前、戦中、戦後２７年間に亘って大阪クラブの幹事職を歴任したということを話しましたが、東京クラブでは小林雅一さんが１１年間幹事を歴任しておられます。これは、戦前のロータリーが幹事を重視していたことを物語るものであり、戦後のロータリーとは著しく異なるところであります。

そこで、戦前のロータリアンの特徴を挙げますと、ロータリーを思想の世界で受け止めようとしたことであります。上物作り、即ち制度には、興味を示さなかったのであります。一言で言えば、ロータリーとは一体何か、ということを追求し、深層心理においてロータリーを理解したのであります。

神戸クラブの直木太一郎パストガバナーからの手紙によりますと、『戦前の日本のロータリーは、ロータリーを外来思想の一つとして受け取っていた。外来思想と謂えば、既に仏教、儒教、キリスト教が入って来てをり、明治維新後は、更にヨーロッパのデモクラシーやマルキシズムのような思想が入って来ていた。ロータリーもそれらの一つであると考えられていた。

そのため、ロータリーの思想とは一体どのようなものか、それは、外来思想や従来の日本古来の思想である国学や報徳教の思想などと比較して、何処が違い、何処が同じなのか、について大いに研究が進められた。

結局、報徳教の教えに最も近いものであるとせられ、これが、昭和３年東京における太平洋地域会議Regional Conferenceで、大阪クラブの土屋大夢の『ロータリー以前の偉大なロータリアン』と題して、二宮尊徳翁の思想の紹介となった。

また一方、仏教に所謂「布施」よりも、そのような必要のないように国を富ませる方がよいのではないか、という実業家らしい意見もあった。この考え方は、松下幸之助さんの考え方に連なるものであって、昔、三菱商事の或る若い社長の「企業の社会的責任」についての質問に対して、「二万に余る社員と多数の家族とを豊かに養い、ドンドン金を儲けて多額の税金を支払い、更に事業を拡大して、社会の便宜を図ることである」と答えている。

これが、今日、松下さん始め多くのロータリアンの考え方に近いものではないかと思う。しかし、自分は、ロータリー精神は、そのような物質的なものではなく、もっと深い精神的思想であると考えていた。

勿論、日本の二代目ガバナー井坂孝さんのように、既にロータリーの組織や運営に関心を持って、それを説いた人もあったが、多くのロータリアンは、そのような組織・制度よりもロータリーをただ外来思想の一つと考えていたのである。

第二次世界大戦となって、他の外来思想と共に、軍部や右翼から弾圧されて、遂に国際ロータリーを脱退せざるを得なくなったのもそのためである。』と。

要するに、直木さんによれば、戦前の日本のロータリアン達は、思想を中心にロータリーを理解しようとしたと謂うことであります。

18.『戦前の日本ロータリーの特徴』その２

前回は、大阪クラブの露口四郎さんが戦前、戦中、戦後２７年間に亘って幹事を歴任され、東京クラブでは小林雅一さんが１１年間に亘って幹事を歴任されたことを申し上げました。この小林さんは後に至って国際ロータリー会長にまで擬せられた人でありますが、惜しくもその直前にこの世を去られたために日本人として最初の国際ロータリー会長は実現しなかったのであります。このように当時から、幹事は、クラブの大黒柱、クラブ管理のオーソリティでありました。

これらのことは何を意味するかと謂いますと、有能なクラブ幹事が何年にも亘ってクラブの実務を一手に掌握し管理していくというのが古き良き時代のロータリーの慣行であったのであります。最も長い記録としては、１９１０年に創立されたフィラデルフィア・ロータリークラブが１９６０年に創立５０周年の記念イベントとして幹事歴任５０年慰労会を催したという記録が残っています。

要するに、１６世紀以降、そもそもクラブという社会制度の濫觴を見れば明らかなように、元来、クラブというものは、幹事がクラブの実務一切を取り仕切っていたのであり、会長などというものは必ずしも必要としなかったのであります。したがって、ロータリークラブもクラブ制度の原理に従って伝統的に幹事を重視して来たのであります。これが戦前の古き良き時代のロータリーの伝統であり、日本ロータリーもそれに倣っていたのであります。将に幹事は大黒柱でありました。だからこそ大阪クラブの露口四郎さんや東京クラブの小林雅一さんのような素晴らしい幹事が生まれたのであります。そして、素晴らしい幹事が何年にも亘って歴任することによって、それぞれ素晴らしいクラブライフを作り上げてきたのであります。

ただ、このようにして出来上がった東京クラブと大阪クラブもそれぞれのクラブ自治の結果、当然のことながら当初はそれぞれその個性が全く異なりました。

そこで、東京ロータリークラブと大阪ロータリークラブとを比較してみますと、著しい特徴が見受けられます。

先ず、東京ロータリークラブの特徴として、社会奉仕に重点があるかに見受けられるのは、ロータリーの出発点における関東大震災とその義捐金などに影響されたものと考えられるのであります。大震災を契機として弱者保護に重点を置き、著しく行動的でありました。米山さんがこれに傾いたのは、この時の衝撃が原因であることは明らかであります。

これに対して、大阪ロータリークラブの特徴としては、どちらかと言えば職業奉仕に重点があり、大正１１年創立当初から理論付いてをりまして、対社会的にはあまり行動的ではありませんでした。優れて精神的であり、親睦とその内容である職業奉仕重視が特徴であります。これは当初から福島喜三次さんの話をよく聞いてGuy Gundakerの思考が浸透して居たと謂えるのであります。

19.『ロータリークラブの発祥』その１

今日はロータリー創立記念日でありますのでロータリーの濫觴の物語を致します。

先ず、２０世紀初頭にロータリークラブはどのようにして始まったのか。

シカゴの街のNorth Dearborn街のユニティビルの７１１号室に鉱山技師のGustavas Loehrの事務所がありました。

この事務所で当時３７歳の無名の青年弁護士であったポール・ハリスが、Gustavas Loehr、Sylvester Shiele、Hiram Shoreyの三人の友達に語りかけて出来上がった運動が後に至ってロータリークラブと呼ばれるようになったのであります。

これが第１回目の会合でありまして、１９０５年２月２３日のことでありました。ただ、この時点では、ロータリーには、大した原理の裏打ちはなく、親睦のための一業一会員制の原理を自覚したに止まり、クラブの役員の任命もなく、クラブの名称も未だなかったのであります。したがって、この第１回目の会合をもってこれを「創立総会」と呼ぶことは妥当ではありません。

この会合は法律的には、「設立準備会」と謂うべき性格のものであります。

ただ、国際ロータリーは、この日をもってロータリー創立記念日としていますが、これは創立総会があったということではなくて、ロータリー創立の最初の因縁が熟した日という意味であろうかと思います。

法律的な意味での創立総会は、会員９名をもって、役員の任命、クラブの名称の決定等が行われた３月２３日の第３回目の会合であります。したがって、シカゴクラブのチャーターメンバーも、創立総会時点における会員であるという理解からすれば、その９名ということになります。但し、創立当時は、未だチャーターの理論は存在しませんでした。何故かと謂いますと、当時はシカゴクラブ一つしか存在しなかったからであります。元来、チャーターの理論というものは、１９１０年に全米ロータリークラブ連合会が創立されて以降の概念であります。

では、どのようにしてチャーターの理論が出てきたのか、と言いますと、実は、ロサンゼルスにロータリークラブが二つ創立されてしまって、それぞれのクラブが自分のところが本家だ、正当なロータリークラブだと主張して争いになったのであります。

結局、この二つのクラブは、合併することによって決着がついたのでありますが、このことが契機となって、それ以後は、連合会から認証状即ち、チャーターを受けたクラブを正当なロータリークラブとして認めようということになったのであります。これがチャーターの理論でありまして、これ以後、チャーターナイト即ち、認証状伝達式が行われるようになったのであります。

何はともあれ、１９０５年２月２３日、一職種一会員制を柱とする職業人の社交クラブの第１回目の会合がシカゴの街のUnity Buildの７１１号室即ち、ポール・ハリスの友人、鉱山技師のGustavas Loehrの事務所で持たれたのであります。これがロータリーの濫觴の物語でありました。

20.『ロータリークラブの発祥』その２

前回は、１９０５年２月２３日、一職種一会員制を柱とする職業人の社交クラブの第１回目の会合がシカゴの街のUnity Buildの７１１号室で持たれたことを話しました。

そこは、ポール・ハリスの友人、鉱山技師のGustavas Loehrの事務所でありました。ポール・ハリスは、友人の洋服屋のHiram Shoreyにそこで落ち合うことを約束して、自分はSylvester Shieleを誘ってその事務所へ行き、４人で話し合いをしたのであります。これが後に至ってロータリークラブと呼ばれるものの最初の会合でありました。

なお、ポール・ハリスが、Sylvester Shieleと一緒にGustavas Loehrの事務所へ行く途中、マダム・ガリというイタリア料理店に立ち寄っていますが、彼がそこで何を食べたかなどと謂うことを議論する人がいます。しかし、そのようなことは、ロータリーの歴史を勉強するについては重要なことではありません。このようなことを法律的には、判決に影響を及ぼさない事実immaterial factと謂うのであります。

このような重箱の隅をつつくような議論をせずに、もっと大づかみに歴史の芯を掴んで行かなければなりません。即ち、目に見える現象に惑わされずに常に本質を見る姿勢がなければ、制度の本質も思想の実体も会得することは出来なかろうと思うのであります。

さて、そこで先ず、ポール・ハリスは、皆が仲よく親類付き合いをして互いに助け合う職業人のクラブを作ろう、そのためには、一つの職種から一人だけ会員を採るようにして同業者を排除すれば、職業人同士であっても仲よく親類付き合いが出来るということを提唱しました。そして、４人はお互いにその原理を確認したのであります。これは、仲良くなるための親睦の核心にある原理であります。

それから、親類付き合いといっても、４人では大したことは出来ない。やはり、先ず会員を増やさなければならない、というので、第２回目の会合を２週間後の３月９日にポール・ハリスの弁護士事務所で開くことを決めて解散しました。

したがって、第１回目の会合では、親睦のための一業一会員制の原理が確認されただけに止まるのであります。したがって、第１回目の会合は、法律的には、創立準備会たる性格のものであり、法律的にみて創立総会に当たるものは、役員の任命、クラブ名称の決定等が行われた３月２３日の第３回目の会合であります。

ところで、第２回目の会合までに、新たに２名の会員が入会しました。一人は印刷業者のHarrry Ruggles。他の一人は不動産業者のWilliam Jensonでありました。

この第２回目の会合までに参加した６名の会員は、Pioneer Veteranと謂われて別格のロータリアン扱いにされる傾向がありますが、ロータリー運動に対する貢献度を中心に評価しますと、この中には優れた人も居れば、そうでない人も居たのであります。次号以下にその人物像に触れておきます。

21.『ロータリークラブの発祥』その３

前回は、第２回目の会合までに参加した６名の会員は、Pioneer Veteranと謂われていますが、ロータリー運動に対する貢献度から見ると、この中には優れた人もそうでない人も居たと申しました。そこで、その人物像を紹介しておきます。

先ず、Gustavas Loehr。この人の職業分類は鉱山技師であります。第１回目の会合に事務所を提供したかなり骨のある職業人であったと言われています。

鉱山技師とは謂いますが、「山師」という言葉もありますように、やはり一夜成金、一夜乞食のという大変不安定な業界でありますから、或る日、突然破産して、自殺によってこの世を去る、という悲惨な最後を遂げたために、ロータリー運動の中では、彼の功績は何一つとして初期ロータリー発展の記録の中に残されていないのであります。大変残念な人物であります。

次に、Sylvester Shiele。この人の職業分類は石炭商であります。シカゴロータリークラブの初代会長でありまして、第３回目の会合に事務所を提供しました。

実は、初代会長については、ポール・ハリスが自薦をしてもおかしくはなかったのでありますが、彼は、この種の運動が成功するためには、互譲の精神が大切であると考えて、自分は一歩を譲り、Sylvester Shieleが大変世話好きな男であり、指導者としてふさわしい男であったので、このよき日よき場所を記念する意味において、ここの経営者であるSylvester Shieleを初代会長に推薦したのであります。

Sylvester Shieleは、終生、ロータリー運動の発展について深い関心を持っており、ポール・ハリスの良き相談相手でありました。したがって、墓もポール・ハリスと並んで建てられているのであります。

ポール・ハリスの著書の中に次のような興味深い記事があります。

『冬になると雪が降る。一面、銀世界となった家の裏に、ポールの台所から人の足跡が始まり、それがSylvester Shieleの家の台所のところで終わっている。絶えず二人の家の間にはこういう足跡があった。そういう状況であった』と。

オーストラリアのメルボルンクラブから出た元ＲＩ会長のAngus Mitchelの晩年の追想録の中に出てくる話によりますと、Sylvester Shieleの別荘がミシガン湖のほとりにあって、夏になると、そこにポール・ハリス夫妻とSylvester Shieleの家族が寄る時には、Angus Mitchelがメルボルンから飛行機でやって来て、夏のウィークエンドを３家族で楽しく過ごしたと謂うのであります。

勿論、これは、大分後になっての出来事であろうとは思いますが、このことはロータリーの親睦というものは将に世界的親睦であったといえるのであります。

Sylvester Shieleは、シカゴクラブの創立総会において「石炭業界の展望について」というスピーチをしています。実は、これがロータリーにおけるイニシエーションスピーチの始まりであると謂われているのであります。このように、Sylvester Shieleは、中々立派なロータリアンでありました。

22.『ロータリークラブの発祥』その４

前回は、Gustavas Loehr と Sylvester Shiele についてその人物像を紹介しました。

そこで、今日は Hiram Shorey について紹介します。職業分類は洋服商であります。

非常に打算的な人であったと言われていまして、会員同士は原価の取引をするといっても、会員が増えると洋服は全部自分の店で作るということになれば商売もうまく行く、というように、何時も計算をしたと謂われています。

元来、ロータリーの世界は、打算の世界ではなく愛情の世界でありますから、打算の論理には馴染まないのであります。したがって、彼は、後にロータリー運動が必ずしも人の和を得られなくなるに及んで、シカゴクラブを退会して故郷のメインに帰ってしまいました。そして、後年、ロータリーが発展して、メインにもロータリークラブが出来た時にも入会せず、終生、ロータリークラブには復帰しなかったので、あまり大したロータリアンではなかったと謂えるのであります。

しかし、ポール・ハリスは、この出来の悪いロータリアン Hiram Shorey のことを１９３４年の著書 "This Rotarian Age" の中でも悪く言っていないのであります。

『Hiram Shorey は、その後、実家の都合により、故郷のメインに帰らざるを得なくなり、シカゴのクラブを退会するに至ったが、この古き良きロータリーの慣例を今日に至るまで、懐かしく思い起こしておられるのである』と。

ポール・ハリス一流の人を責めない文章であります。しかし、この記事によって、Hiram Shorey があまり大したロータリアンでなかったことが判ると思うのであります。

次は William Jenson であります。職業分類は不動産業者であります。第２回目の会合から参加して。１９０７年にシカゴクラブの幹事も務めた人でありますが、シカゴクラブでは、その頃から奉仕派と親睦派との紛争が起こったためシカゴクラブに嫌気がさしてロータリークラブを退会しました。

ただ、彼は、大変長生きをしたため年老いてからカリフォルニア州に移り住む頃にはロータリー運動も全米に広がっていましたので、新しいクラブの人達から名誉会員になる依頼を受け、いくつかのクラブの名誉会員になって、結構クラブライフを楽しみながらこの世を去ったと謂われています。したがって、あまり大したロータリアンではなかったが非常に要領のいい人であったと謂えます。

次は Harrry Ruggles であります。職業分類は印刷業者でありますが、ロータリークラブに５番目に入会したので第５ロータリアンとも呼ばれています。

彼は、Charles A. Newton、Dr.William R.Neff と共に初期のシカゴクラブの管理権を握った親睦派の大立者であり、終生ポール・ハリスの政敵でありました。

ロータリークラブの中にロータリーソングの慣例を作り出したり、ロータリーのエンブレム（バッジ）を作ったりした中々立派なロータリアンでありまして、数々のエピソードがありますが、それについては次回に申し述べます。

23.『ロータリークラブの発祥』その５

前回紹介したHarrry Ruggles は、所謂、パイオニア・ヴェテラン６名の中で、大学を出たのはポール・ハリスとこのHarrry Ruggles の二人だけでありまして、彼は一見、杓子定規な融通のきかない男でありましたが、クラブ親睦を守るために、ロータリーソングの慣例を作り出したことでも有名であります。

彼は、若くして苦学をしてNorth Western 大学の夜学に入り、生活費を得るために印刷工場に勤めましたが、社長から見込まれてその会社の持株を半分譲り渡され経営者の地位に就きました。その後、その社長が引退する時に社長の持っている残存株式を全部買い取ってその印刷工場の社長になったのであります。

Harrry Ruggles は、大変長生きをして会社は長男に譲り、悠々として栄えたと謂われています。カリフォルニアに別荘を造り、カリフォルニアのロータリークラブの会員になり、初期ロータリアンの中で、これ位クラブライフを楽しんだ人は居ないと言われるくらい立派なロータリアンでありました。

Harrry Ruggles のエピソードを一つ紹介します。１９５９～６０年度のＲＩ会長であったHarold Thomas が会長を辞めてから出版した【ロータリーモザイク】の第一章に大変面白い物語があります。即ち、Harold Thomas がＲＩ第１副会長としてカリフォルニアのローンディルロータリークラブの認証状伝達式に出席して初期ロータリーの話をしました。彼は初期ロータリアンの行動を美化して、『初期のロータリアンは、クラブライフの中で美しい友情が通い合っていて、その友情をもとにした発想交換の中から後に至って職業奉仕と呼ばれる類い希なる概念を生み出したのである』という話をしたところ、誰かが『ナンセンス！』と叫んだのであります。

Harold Thomas は、『この式が終わったら今発言した人と話したい』と言いました。

時の地区ガバナーとして、この時の司会をしていたCarl P.Miller が側から、『今のは、Harrry Ruggles です』と教えて呉れました。そして、式典の後、二人は、胸襟を開いて語り合い意見を調和させることが出来て立ち去ったと謂います。

しかし、果たして、どのような形で調和出来たのか、疑問なしとしません。

Harrry Ruggles は、何故、「ナンセンス！」と叫んだのか？

先ず、Harrry Ruggles は、少なくとも、初期のシカゴクラブの大黒柱であったことがこれによって判ります。次に、彼が、ロータリーの在り方に就いて自分なりの信念をもっていたことも意味しています。更に彼は、Harold Thomas の解説した所謂ロータリーの親睦がやがて職業奉仕に転化していくと謂う仮説を絶対に採らないということを意味しているのであります。

何故、そのような結論になるのか？

Harrry Ruggles は、ロータリーの世界で親睦だけを貫いた人、所謂原始ロータリーの世界に生きた人だったからであります。

そして彼は、自分の考えを一生涯変えなかったのであります。

24.『ロータリークラブの発祥』その６

前回は、Harrry Ruggles のエピソードを一つ紹介しました。それは Harold Thomas がＲＩ第１副会長としてカリフォルニアのローンディルクラブの認証状伝達式において、初期のロータリアンの友情をもとにした発想交換の中から職業奉仕が生まれた、と話したところ、Harrry Ruggles がナンセンスと叫んだのは何故か、ということについて、それは Harrry Ruggles がロータリーの世界で親睦だけを貫いた人､所謂原始ロータリーの世界に生きた人であったからだと申しました。

彼が初期ロータリーの実情について考えていたものは、１９０５年２月２３日から１９０６年にかけてポール・ハリスや他のロータリアン達が考えていたものと全く同一でありまして、実はポール・ハリスの方が１９０７年から奉仕を自覚したために Harrry Ruggles と考え方を全く異にするに至ったのであり、その二人の心の遍歴の相違が互いに政敵たる地位に立たしめるに至ったのであります。

即ち、１９０５年からポール・ハリスと Harrry Ruggles は、親睦の道を一緒に歩きました。そして、１９０７年、ポール・ハリスだけが方向を変えて、その方向から奉仕が生まれました。所謂精神的親睦から職業奉仕が生まれたのであります。　ところが、Harrry Ruggles は、ひたすら真っ直ぐに行きました。奉仕の概念は、生まれませんでしたが､そこには一番最初のロータリーの親睦、所謂感性的親睦だけがありました。

この二つの見解の対立であったわけであります。

ところで、Harrry Ruggles は、ロータリーの中で親睦の世界にだけ生きた人でありましたから、本人の主観においては、世のため人のための奉仕などと謂う意識は毛頭なかったと思われます。

ところが、ロータリーソングの慣例が、やがては、シカゴの街角に歌を生み出し、遂には、民衆の合唱運動『歌の週間』National Week of Song として実を結ぶに至ったのであります。これは、Harrry Ruggles 本人の主観の如何に拘わらず、客観的に見れば立派な社会奉仕であります。

これとは逆に、ロータリアンが主観的には奉仕だと思ってしたことが、客観的に見るとロータリアンの独りよがりで奉仕になっていない、したがって地域住民から馬鹿にされることもありまして、これはロータリアンたる者の常に謙虚に反省すべきところであります。

以上が、ロータリーのパイオニアヴェテラン６名のプロフィールであります。このように初期ロータリアンの中にも、出来、不出来があったと謂うことでありまして、これは人間である以上当然のことであります。

なお、注意しなければならないことは、ロータリアン一人ひとりが呉越同舟でありまして、ある時点では同じ呉の船に乗っていて、それが後に越になったりして、今日においてもロータリアンのロータリーの本質に対する認識は、全く同一なものはあり得ないのであります。これは、あり得たらおかしいのでありまして、あり得なくて良いのであります。

25.『ロータリークラブの発祥』その７

前回は第２回目の会合までに参加したパイオニアヴェテラン６名の横顔を紹介しましたが、１９０５年３月９日の第２回目の会合は、ポール・ハリスの弁護士事務所で開かれました。このときは職場持ち回りの原則を決めています。

その趣旨は、我々は一職種から一人だけ参加して心を通わせ合おうということであるから職場を中心に例会を開こうと謂うことでありました。

ただ、この原則は、比較的早く維持できなくなりました。先ず第一に、会員が増えて行きますから職場では会場としては手狭になってきます。

更に、その後、第６回目の会合が開かれたときに、３回目の会合から参加したCharles A. Newton が食事をしていたために遅刻しました。その事が契機となって例会で食事を共にしようということになり、その結果、約１年間はレストラン持ち回りという原則になりました。

そして、その後、メイクアップの制度が出来ますと、このレストラン持回りの原則も一カ所に定着せざるを得なくなったのであります。

このように、職場持ち回りの原則は、Charles A. Newton の出来事があってから、いち早く修正されてしまったのであります。

要するに、第２回目の会合では職場持回りの原則を決めただけでありまして、６名では少ないので、もっと会員を集めるべく３月２３日に Sylvester Shiele の Coal Yard 石炭置き場で第３回目の会合を開くことを約して解散しました。

そこで、第３回目の会合までに参加した会員は３名であります。

先ず、Charles A. Newton。職業分類は損害保険の代理業者であります。この人は Harrry Ruggles、Dr.William R.Neff と共に、初期シカゴクラブの親睦派の大黒柱であったと同時に初期ロータリーの慣例を悉く記憶していたと謂われます。この故に、初期ロータリーの『稗田の阿礼』と謂われているのであります。したがって、判らないことがあれば、Charles A. Newton に聞けば凡そ正しいことは覚えていたと謂うことであります。

彼は、１９２３～２４年度のシカゴクラブの会長職を務めましたが、その会長の時に、何時までも人間の記憶に頼っていてはいけないと謂うので、シカゴクラブの歴史編纂事業に手を付け、歴史委員会 History committee を作りました。ロータリアンが、歴史付くのは１９２４年以降のことでありますから、Charles A. Newton の存在は、今日のロータリーの軌跡を勉強するについて、その出発点になった大ロータリアンであったことが判るのであります。

なお、Charles A. Newton は、損害保険の代理業者でありましたから、一業一会員制の原則によってシカゴクラブに入会できなかった同業者の Melvin Johns が Business Circle というクラブに入会し、後に至って１９１７年、ライオンズ国際協会を設立するに至るという因縁を持っているのであります。

26.『ロータリークラブの発祥』その８

前回は、７人目のロータリアン Charles A. Newton の横顔を紹介しました。

そこで今日は８人目の Albert White であります。職業分類はオルガン製造業者であり、シカゴクラブの第２代会長を務めました。この人も立派なロータリアンでありまして、この人の会長の時に有名な Donald Carter の物語が起こったのであります。

そして最後に Arthur Irwin であります。

職業分類は洗濯業者であり、この人も、ポール･ハリスが奉仕を提唱したときにポール・ハリスの懐刀となって、いつもポール・ハリスの側にいたと言われています。

このように、第３回目の会合までに入会した３名は、皆、立派なロータリアンでありました。

そして、１９０５年３月２３日、第３回目の会合は、Sylvester Shiele の Coal Yard 石炭置場で開かれました。この日までの参加人員は、計９名となりました。

そこで、ポール・ハリスは、一つの政策判断に迫られました。即ち、会員９名というのは、社交クラブの会員数としては如何にも少な過ぎる。もう一回会合を持って更に会員の増強を計ることがよいのか、或いは、取り敢えずは９名で出発して、その後で会員を増強した方がクラブ発展のためになるのか、ということであります。

結局､ポール･ハリスは､｢今や機は熟した。よって役員の任命を行うべきである」という提案をして、クラブとして発足することになったのであります。

このようにして、この会合が法律的に見れば創立総会に当たるのであります。何故なら､クラブ役員の任命､クラブ名称の決定、クラブ会員の資格に関する原則などが決定されたからであります。

そこで先ず、役員の任命でありますが、初代会長については、ポール・ハリスの提案によって Sylvester Shiele が選任され、以下、記録担当幹事 Hiram Shorey（統計係幹事)、通信担当幹事 William Jenson。会計 Harrry Ruggle が選任されました。

なお、ＳＡＡは、現在ではクラブ役員でありますが、この当時は未だ存在していません。これは、１９０６年に初めて正式の職制となりました。初期のシカゴクラブの慣行形成は、ポール・ハリスと Max Wolf、そして Charles A. Newton の３人の合議によって決められて居たと謂いますから、恐らくこの３人の合議の中からＳＡＡ（Sergeant At Arms）の制度も生まれたのであろうと推測されます。

そこで、Initiation Speech でありますが、初代会長の Sylvester Shiele が、この日を記念して「石炭業界の展望に就いて」というスピーチをしています。これが、実は、ロータリーの慣例の中における Initiation Speech 第１号であります。

この時は未だ奉仕という考え方はありませんが、ロータリー運動の中における Initiation Speech の位置づけを正しく示していると謂えるのであります。

27.『ロータリークラブの発祥』その９

前回は、ロータリーの慣例の中における Initiation Speech 第１号の話をしました。

この Initiation Speech というのは、会員が職業分類によって示された自分の職業を営むに当たって、どのような職業観を形成するに至ったか、と謂うことを同僚の会員に対して開陳するものであります。

これは、ロータリークラブが職業人のクラブ・職業分類クラブ（Classificationclub）であることの当然の帰結であります。

『自分は、今まで斯く斯くの職業を営んで来て、今般、ロータリークラブに入会させて貰ったが、その職業を営むについては、斯く斯くの職業観・経営哲学を持っている。

至らないところは教えて頂きたい。これから仲良くお付き合いを願いたい』と言うだけのことでよいのであります。

現在行われている Initiation Speech というものは、新入会員が、長々と自分の履歴を喋って居るのが通例でありますが、ロータリークラブが職業分類クラブの性格を持っていることを考えますと、これは、肝心なところを忘れているものと言わなければならないのであります。

次に、創立総会に当たる第３回目の会合において、クラブ組織に関する重要な原則として、会員資格の得喪に関する原則を決めています。即ち、４回連続して欠席したるものは、自動的に会員資格を喪失すべきものと定む、と言う原則がこの会合の議事録に載っているのであります。

この当時は、未だ『奉仕』の概念はありませんでしたが、この原則は、ロータリー運動の創立総会の場で既に原則化されていたわけであります。

ただ、この原則は、法律的に見るとあまり出来がよくないのであります。何故ならば、誰でも病気をすれば４回欠席することもあり、また、どうしても抜けられない用事のために４回欠席することもあります。

それにも拘わらず、理由の如何を問わず、４回欠席という欠席回数のみによって会員資格を奪うというのは、社交クラブのようなファジーな団体の組織管理としては窮屈に過ぎるからであります。したがって、法律家であれば、このような場合には但書きを付けるのでありすま。『但し、正当な理由のある時は、この限りに非ず』と。

では、シカゴクラブには法律家が居なかったのか、と謂いますと、ポール・ハリスが居ました。

では、法律家が居たのに何故このような窮屈な規定をつくったのか。

それは、お互いに仲良く助け合って行こうと誓い合っておきながら、４回も連続して欠席するということは、当時は２週間に１回の例会でありましたから、２ヶ月もお互いの安否も気遣わないことになります。したがって、「そのような冷たいやつは俺たちの仲間ではない。辞めてもらおう」と謂うのが彼等の心であったのであります。

28.『ロータリークラブの発祥』その１０

前回は、創立総会に当たる第３回目の会合において、クラブ組織に関する重要な原則として、会員資格の得喪に関する原則を決めた話をいたしました。

そこで次に、クラブの名称の決定であります。これは、会員の共通の関心事でありました。

ところが、ポール・ハリスが、皆のクラブだから、名称の決定は、全員一致で決定しようと提案したため、結論が出なくなってしまったのであります。何故ならば、全員一致の意思というのは神様の数値であって、人間の世界では皆が真面目に議論すればするほど一致出来ないものだからであります。したがって、全員一致の決定というのは、神様の世界の出来事か、或いは、人間の世界であれば、よほど不真面目な人間の集まりでなければ望むべくもないことであります。

山本七平氏のペンネームであるイザヤベンダサンの【日本人とユダヤ人】の中に、ユダヤの社会では『全員一致の審決は無効である』というルールがあるのは興味深いことであります。恐らく、彼等も人間の審議である以上は、全員一致というものは不真面目な決議であると考えたのでありましょう。

では、どのような名称が提案され、どのようにして決定されたのか。

一例を挙げますと、Conspirator's Club。これはポール・ハリスの提案でありましたが、共犯者という意味もあってはずされました。The Roundtable Club。Booster Club。Chicago Circle。The Chicago Fellowship。The Lake Club 等々であります。

要するに、クラブ名を決めるために議論は沸騰したのでありますが、衆議一決しないため、皆が疲れてしまって、挙げ句の果てに、自嘲がやって来て、もう名前などはどうでもよいから議論を止めようと言いだした時に、誰かが提案して、『役員も、例会場も持ち回るのだから、持ち回りと言う意味で、輪番という言葉、つまり、ロータリーと言う言葉を付けたらよいのではないか』と言った時には、もう誰も反論するだけの気力が残っていませんでしたので、どうでもよいからそれにしようと謂うことでロータリークラブに決まってしまったのであります。

ポール・ハリスの晩年の追想録 (1947・"My road to Rotary"）には、『誰がロータリーと名付けたかは、判らない』と書かれていますが、一方、同じポール・ハリスの１９３４年の "This Rotarian Age" の中では、『ロータリーという言葉を最初に使ったのは、初代会長の Sylvester Shiele であった』と書かれています。

このように、ポール・ハリスの証言が、同じ事柄について二つに割れていますので、私としては、何れを真実とも決めかねるのでありますが、「誰が名付けたかは判らないようであるが、一説によると Sylvester Shiele だとも言われている」という具合に結論づける他はないと思うのであります。

29.『ロータリークラブの発祥』その１１

前回は、創立総会でクラブの名称を決めたという話をしました。

そこで今回は、ロータリークラブはどのような特色を持ったクラブなのか。他の職業人の団体とは、何処の点が基本的に違うのか？そして、職業人の親睦団体ではあるが、一体何を本質とする団体なのか？について煮詰めておかなければなりません。

このことは、当時においてはポール・ハリス一人の発想ではありますが、先ず２週間に１度皆が集まってお互いに親類付き合いをする団体であると言えます。

では、親類付き合いの具体的な内容は一体何か？

このクラブには、同業者は一人も居ないのであるから、皆で助け合うということも、その点から考えて行かねばなりません。

そこで、第１に、例会と例会との間で、物を買うときには会員から買うこと。そして、注文を受けた会員は、親類から注文を受けたのだから、利益を計上せずに原価の取引をすること。そして、例会と例会との間で、誰と誰とがどのような取引をしたかという取引の記録をとる役職を設けました。これを統計係の幹事 statistician と呼びました。

勿論、この原価の取引には、色々と問題があります。例えば、弁護士の報酬や坊さんのお布施等、殊に、専門職業 profession の側に問題があります。

元来、専門職業 profession は、愛情の支配する世界であって、打算の世界ではありませんから、原価という概念がありません。

更に、突き詰めれば、元来これら専門職業 profession は、報酬を請求すべき立場ありません。したがって、原価という概念を入れる余地がないのであります。

また、実業 business の方にも問題がないわけではありません。例えば、タバコ小売業者は小売価額を崩すことは出来ません。

また、損害保険の保険料についても問題があります。

このような諸々の問題に対してポール・ハリスは、『あまり細かいところをつついても、結論は出ないだろうから、一つその精神で行こう』という形でこの問題を乗り切ったのであります。

これは、教条主義にならないという意味で、ロータリーの原則を理解するには大変よいことでありました。ロータリーは、元来、fuzzy な団体でありますから、このような解決の仕方が望ましいのであります。

第２に、お互いの職業を宣伝しあうこと。

即ち、例会と例会との間で、地域社会の人から職業上の相談を受けた場合、例えば、誰かよい弁護士を紹介してくれないか、と頼まれたら、ポール・ハリスを紹介するというように皆で会員の職業を宣伝しあったのであります。

以上の二つのことを次の例会で報告させたのであります。

30.『ロータリークラブの発祥』その１２

前回は、ロータリークラブはどのような特色を持ったクラブなのか、について第１に原価の取引をすること、第２にお互いの職業を宣伝しあうことという二つのことを決め、次の例会でその経過を報告させたという話をしました。

そこで、やがて心が通い合うようになりますと、第３に、精神的に助け合うようになりました。即ち、会員が、自分の企業経営上の悩みとか家庭の悩みとかを持ち寄って、皆で衆知を集めて解決して行くようになりました。将に三人よれば文珠の知恵であります。

このように、ロータリーの本質は、発想の交換 Exchange of Idea であるという基本的な考え方があります。古いロータリーの綱領の中には、この発想の交換 Exchange of Idea という考え方が盛られていましたが、いつしかこの文言がなくなりました。

それはあまりに当然なことであるので書いておく必要がないと考えたからであります。

発想の交換と謂うものは、ごく自然に行われることであり、それが奉仕のエネルギー源になるという自覚が１９２２年までにはロータリアンの心の核心に出来上がっていたわけであります。

Exchange of Idea 即ち精神的相互扶助。これがやがて２０年余りの後にロータリー的意味での奉仕概念に転化して行ったのであります。

１９２７年に誕生した職業奉仕の概念は、突如として無から有を生じたものではなく、言葉が生まれる前に柔軟な思考があったし、それに基づく実践もあったわけであります。

また、職業奉仕に限らず、社会奉仕についても Exchange of Idea が奉仕のエネルギー源になっていたのであります。したがって、これをロータリー的意味における奉仕思想の萌芽と見てもよいのではないかと思うのであります。

このようにして第４に、会員増強についてのルールを取り決めました。

ロータリアンは、会員を勧誘するときに、何を Sales point にするかという問題であります。大学卒も殆ど居ない、金持ちも居ない、何時倒産するか判らない中小企業経営者達が社交クラブを作ったからといって、魅力がなければ誰も入会しないだろう。したがって、何を Sales point にするかが問題でありました。そこで、『我々は、嘘をつかない誠実な人間である。この誠実な人間だけが、このクラブ　ライフの功徳を受けることが出来る』このような説得の方法があることを確認したのであります。

そこで、

第１．同業者は入会できない。

第２．誠実な人間しか入会できない。

この二つの原則によって、ロータリーは始まり、会員の増強を図り、会員相互も助け合いながら、お互いに楽しく１年余の歳月が経過しました。そして、やがて１９０６年４月、有名な Donald Carter の物語が起こったのであります。

31.『ロータリークラブの発祥』その１３

前回に続いて、Donald Carter の話を致します。シカゴクラブの二代目会長 Albert White の時、Frederic Tweed という会員が Donald Carter に対してクラブへの入会を勧誘しました。すると Donald Carter は、クラブの互恵主義の説明を聞いて、『君達は、お互いに助け合って、豊かになって楽しいだろう。しかし、一業一会員制の原則であれば、クラブに入れない同業者は一体どうなるのか。また、職業人の集まりであれば、職業を持たない一般地域社会の人達は一体どうなるのか。

私達は、この地域社会に生まれ、地域社会に育てられ、地域社会にお世話になって暮らしている。このお世話になった地域社会に何らの恩返しもしない。何らの足跡もの残さないで、自分達だけが助け合って隆々と栄えて、やがてこの世を去っていく。そのようなエゴイズムの団体は永続性がないだろう。自分は、二度とない人生を、そのようなエゴイズムの世界におくことは出来ないよ』と言ってキッパリと入会を断ったのであります。これを聞いて、痛く反省したのがポール･ハリスでありました。『Donald Carter の言うとおりだ。クラブの行き方を変えよう』と言って、職業人の親睦のエネルギーを世のため人のための奉仕に使おう、と考えるに至ったのであります。

実は、この Donald Carter の刺激から出てくるポール･ハリスの反省が、ロータリーにおける奉仕概念の誕生の物語でありました。と同時に、それはロータリー拡大の系譜の始まり（萌芽）でもあったのであります。それは何故かと言いますと、仲良しクラブの親睦だけからは、ロータリー拡大の理念は出て来ないからであります。奉仕という世のため人のためのクラブであるならば、それはシカゴにだけあるべき筋合いのものではなく、全米の更には全世界の地域社会に存在して然るべきものであると謂うので、ロータリーの拡大が始まったのであります。

このようにして、ロータリークラブは、単なる親睦と相互扶助を目的とする社交クラブから、親睦と奉仕を目的とする社交クラブに進化したのであります。

そして現在、全世界にクラブ数３４,０００余り、会員数1,２１８,０００名余りを擁する巨大な組織になったのであります。

ただ、このような巨大な組織になったことが、果たして良かったのかどうか、反省材料は山積しています。先ず、ポール・ハリスが開発したロータリーの思想と組織は、１９４７年にポール・ハリスがこの世を去ってから次第にロータリーの衰退が始まり、現在、ロータリーの核になるものを殆ど失ってしまいました。

その最大の原因は何か。 国際ロータリーは、ロータリーの拡大を急ぐ余り、ロータリーの心を育てることを忘れたからであります。その結果、ロータリーを理解出来ないロータリアンが規定審議会の多数決原理によってロータリーの核にあるものを葬り去ったのであります。これを２０世紀初頭の輝かしいロータリーに復元することは、将に永遠の課題と謂うほかはないと思うのであります。

「ロータリーあれこれ　大いなる春といふもの来るべし　高野素十」
伊丹ロータリークラブ卓話

2012.3.29

深　川　純　一

これは、私の俳句の恩師高野素十の作品でありますが、今日は、彼岸も過ぎていよいよ春本番、万物の生命の躍動する季節であります。世の中も何かと忙しくなる時節ではありますが、忙中に閑あり、暫くロータリーの話にお耳を拝借致したく存じます。

実は、先週の木曜日から３泊４日の日程で小豆島で開催されたＲＹＬＡに参加して参りました。今年は、伊丹クラブから３人のカウンセラーが参加されました。

男性カウンセラーとして白井良夫会員、女性カウンセラーとして吉岡博忠会員の奥様と田中賢一会員の奥様の３人がご奉仕して下さいました。

元来、カウンセラーは１地区から男女各々２人ずつ合計４人しか選ばれないのでありますから、そのうち３人までが伊丹クラブから選ばれたというのは異例のことであります。これも、加藤拓会員はじめこのＲＹＬＡを育てようという心ある人達のご支援のお陰であります。

このＲＹＬＡのカウンセラーというのは、狭いキャビンで４日間、受講生達と寝食を共にしながら受講生達の相談相手になって頂くという真に大変なお役目でありまして、ＲＹＬＡが終わった後も受講生の同窓会に出たり、相談相手になったり、時には結婚の仲人も務めるなど後々までお付き合いをしていただくこともあり、本当に御苦労さんなお役目なのであります。

当クラブからは第１回ＲＹＬＡの時の故橋本勲会員を始め今までに加藤拓会員や福武会員の奥様などもカウンセラーとしてご奉仕してくださいました。

今、３４年前の第１回ＲＹＬＡのカウンセラー橋本勲さんのことを申し上げましたが、その時のＲＹＬＡは３月２９日から４月１日にかけて行われましたので、橋本さんは、年度末にはどうしても会社に戻らなければならないので途中で帰ると言っておられたのでありますが、受講生達と寝食を共にしている内に彼らの熱意に感動して「もう帰れなくなった」と言って、結局最後まで３泊４日を御奉仕して下さったのであります。

ＲＹＬＡが終わってお別れの時、受講生達が橋本さんを胴上げをして、涙々で別れていった情景は真に感動的でありまた印象的でありました。この時の受講生の一人、松山の吉岡祥三君とは、私は未だに親しくお付き合いをしています。

彼はボーイスカウトのリーダーでありましたが、ＲＹＬＡから松山へ帰って松山ローターアクトクラブを起ち上げた熱血漢であります。

この第１回ＲＹＬＡは私達にとって初めての体験であっただけに特に印象鮮明に色々なことを覚えています。その中でも特に印象的なことを二三紹介しておきたいと思います。

先ず、その当時のガバナーであった西宮クラブの故執行孝胤先生の素晴らしいリー

ダーシップは、昨日のことのように鮮烈な印象として私の記憶に焼きついています。

殊に感動的であったのは、３日目の昼食後から夕食まで午後一杯かけて行われた各キャビン毎のバズセッションの後、その結果を夕食後に発表するフォーラムが食堂で開かれました。当時レクチャールームなどは未だありませんでした。

この時最初に「Around the corner」という映画が上映されました。この映画は世界の国々をテーマとした素晴らしいものでありましたが、その映画が終わったその直後、突然、執行ガバナーが、『皆さん、灯を消して真っ暗にしましょう』と言って真っ暗なホールの中央に立たれました。そして、マッチを擦って一本のマッチを灯されました。執行先生の顔だけが明るく照らし出されました。そして話し始められたのであります。『皆さん、今、このマッチの火は私の顔しか照らしていません。さあ、皆でマッチを灯して下さい。もっと明るくなるでしょう』

皆が一斉にマッチを擦りました。皆のマッチの火で皆の顔が明るく照らし出され、ホール全体が明るくなりました。そして静かに話かけられました。

『一本のマッチの火はそれぞれ小さいけれども、それが沢山集まれば皆が明るくなります。これが私達の仕事なんです。私達が灯すのは、大きな松明でも何でもない。

本当に小さな小さなマッチの様な火であるかも知れませんが、そのことによって私達は、この世の中を明るくして行こうとしているのです』と。

誠に感動的な場面でありました。

後でこのことについて先生によくあんな素晴らしいことを思いつきましたね、と聞きましたところ、『映画のあとの暗がりにダニー・ケイの演出を思い出し、咄嗟にそれにならったまでだよ』と謙遜しておられましたが、それにしても映画のあとの感動がまださめやらぬ内に、その感動を更に印象づけるために、咄嗟の機転でこのような行動に出て、ロータリーの原理を説かれた先生を素晴らしいと思い、マッチの火に照らし知らし出された先生の姿に真のロータリアン像を見る思いがしたのであります。

私はこの感動的な場面に居合わせて、その年度のオーストラリアから出たＲＩ会長クレム・レヌーフのことを想い出していました。クレム・レヌーフは、その年、世界で初めて３Ｈプログラムを立ち上げました。３Ｈというのは、Health 健康、Hunger 飢餓救済、Humanity 人間尊重の頭文字をとったもので、人道主義の提唱であります。そのこと自体は良かったのでありますが何故そのプログラムを提唱したか、の理由付けが振るっていました。即ち、「全世界のロータリアンが、個人奉仕で鉄砲をポンポン撃つような奉仕では大したことは出来ない。したがって、例えば、百人のロータリアンが持っている百丁の鉄砲を国際ロータリーが一門の大砲に煮詰めてズドンと撃てば、より大きな奉仕が出来るだろう。だから全世界のロータリアンの皆さん、この３Ｈプログラムに協力して寄付をして下さい」
と謂うのであります。

これは、一見、真に説得力があるかに見えます。しかし、ロータリーの根本原理に反すること著しいものなのであります。それは一体何故か。

先ず、個人奉仕を鉄砲に譬えること自体が間違っていますが、仮に個人奉仕が鉄砲

だと仮定しても、そもそもロータリーは、未だ曾て百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるという発想を持ったことがないのであります。これは将にライオンズクラブの団体奉仕の発想なのであります。

ロータリーの発想は、百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるのではなく、百丁の鉄砲のそれぞれ一丁ずつの鉄砲を一門の大砲に育て上げると謂うのであります。すると、百門の大砲が出来上がります。これが個人奉仕を標榜するロータリーの中核にある考え方なのであります。したがって、執行先生の示されたマッチの火の譬えで謂えば、百本のマッチの火を一本の松明にするのではなく、百本のマッチの火をそれぞれ百本の松明に育て上げるのです。

これは、一見、団体奉仕の提唱のように見えますが、然に非ず、その根底には、若者達のそれぞれ一本ずつのマッチの火をＲＹＬＡやロータリーを通して、やがて地域を動かし、世界を動かしていく大きな奉仕の火に育てて行こうという個人奉仕の心があるのであります。

ただ、大事なことは、ライオンズの発想を責めてはなりません。ロータリーを良しとし、ライオンズを排斥するのは「こだわり」であり、ポール・ハリスの説く「寛容」の精神に反します。この世の中にとってはロータリーもライオンズもどちらも大切なのであります。物事を全て大きく包摂していく心を忘れてはならないと思うのであります。

さて、話をマッチの火に戻します。今、執行先生のマッチの火の話を致しましたが、このＲＹＬＡで火というものについて印象鮮明に私の心に焼きついたものにキャンプファイヤーがあります。

一般にキャンプファイヤーと謂えば、楽しく歌を歌うボンファイヤーのことでありますが、このＲＹＬＡのキャンプファイヤーは、儀式の火を焚くキャンプファイヤーでありまして、この島の小高い山頂に松林に囲まれてカウンスルリングと呼ばれる儀式の火を焚く場所があります。

第１回ＲＹＬＡの夜は、折悪く風速３０メートルの暴風が吹き荒れていました。翌日、この日は全国で死者行方不明１５名、負傷者１６９名と報道されたほどの荒れようでありました。

山頂は風当たりが強かったので、キャンプファイヤーは、風裏になる浜辺でたくことも出来たのでありますが、今井先生はキャンプディレクターとして敢えてこのカウンスルリングで焚くことを決断されたのであります。というのは、儀式のファイヤーを焚くというカウンスルリングをもっている青少年団体は少ないので、一つのシンボルとしてこれを受講生達に見て貰いたい、キャンプファイヤーの演出としては、暴風の中だから失敗するかも知れない。然し、その中に或る種の意図というものを学んで頂ければ結構だと考えられたからであります。

暴風の中でキャンプファイヤーは決行されました。執行ガバナーが営火長となってマジックファイヤーが点火されましたが、忽ち強風に吹き消され、やがて、トーチによって火が運ばれました。

流石にボースカウトのＯＢであるロータリアンによって設営されたファイヤーは、人々が吹き飛ばされそうな強風の中で無事に燃え続けました。

受講生達の各班からの寸劇も終わり、キャンプファイヤーは終焉に近づきつつありました。皆がフレンドシップサークルを組み、ドヴォルザークの「新世界」をハミ

ングする中で、今井先生が受講生達と肩を組み、ほのかな火の明かりに照らされながら、静かに若者達に諭された言葉は非常に印象的でありました。即ち、「キャンプファイヤーの間、私達をあかあかと照らし、暖かさを与えてくれた火も、漸く消えかかっています。私達はこの薪を通して三つのことを学びました。

第１は、「薪」は１本では燃えません。

最初に薪が組み立てられたように、それぞれが協力しなければ火はあかあかと燃えないのです。

第２に、その「薪」は、今見るようにすっかり崩れてしまっています。私達に光を与え、熱を与えてくれるために、１本、１本の「薪」は灰になってしまっています。世の中に光を与える奉仕は、それなりの時間と労力とその他のよいものを犠牲にし、捧げなければならないのです。

第３に、この決意と協同があっても、運んできたトーチによって火が付けられるように、一つの目的が明確でなければなりません。ここに来てロータリーの火がつけられ、諸君の奉仕の心と協同の作業があるとき、今日のキャンプファイヤーのように周囲をあかあかと照らすことが出来るのです」と。

受講生達の心に染みとおる素晴らしい話でありました。

さて、ここで話の視点を少し変えます。

ＲＹＬＡについてのコメントとでも謂うべき話をしておきます。

「昨夜三更月到窓」昨夜三更月窓に到る、という言葉があります。どういう意味かと申しますと、昨夜１２時頃、月が自分の部屋の窓に来てくれていた、と謂うのであります。

これは、昔、中国の南泉禅師が弟子の趙州禅師に語った言葉であります。

真夜中にふと目が覚めると、月が自分の部屋を照らしてくれていました。便所に行こうとすれば、廊下も照らしてくれます。

実に有り難い月の好意であります。

もし、真夜中に目が覚めなかったら、この月の優しい好意に気がつかなかったでしょう。もし、気がついても月に感謝する人はいないだろうと思います。

月の優しい好意に気がつく人がいなくても、感謝する人がいなくても、月は秘かに優しい光を全ての人に与えてくれています。

しかし、月は人から何らの報酬を求めようとはしません。これは、月だけではありません。太陽も、草木も、水も、森羅万象全て私達の命の恩人でありながら、一切報酬を求めないのであります。

ロータリーの奉仕もこのようにありたいものであります。日本ロータリーの創立者米山梅吉先生は、「ロータリーは隠れたところに仕事がある。それは隠れているから妙味がある」と言って、苦学生に学費を毎月援助しながらも、そのことを一切口にせず、一切の反対給付を求めなかったのであります。将に先生は "Service,Not self" 自己犠牲の世界に生きた人、陰徳陽報論者でありました。

このように致しまして、この世の中のありとあらゆるものが、そのあるがままの姿で私達の生命の恩人であります。そのままの姿で仏の性を現し、神の愛を示しているのであります。これを仏教では「山川草木悉有仏性」山川草木悉く仏性有り、と謂うのであります。

実は、この言葉はロータリーの根底に流れる思想を表しています。即ち、

ロータリーの奉仕の一つの在り方は、何ものをも求めず、ひたすら未来のために種を

蒔くことであります。

そこで、九州日蓮の総本山本経寺の住職であり、千種会で私と共に小堀先生の教えを受けた大村北クラブの佐古亮尊さんの説かれた話を紹介しておきます。『ジョナサン・チャップマンという人について知られていることは、彼が林檎の木をこよなく愛したこと、そして、１人で林檎の種を死ぬまで蒔き続けたことであります。

コーヒーを入れるズックの袋の口から顔を出し、四つの穴を開けてそこから二本の手と足を出すという袋のお化けのような格好で、頭には鍋をかぶり、裸足で５０年間、山や野を歩き回りました。

サイダー工場で汁を搾った残り糟の林檎をもらい受け、一つ一つの皮を剥き、その種をほじくり出し、それを自分の着ている服よりも遙かに上等な鹿皮の袋に入れて、オハイオ州の田舎から、自分の足の及ぶ限りの土地にその種を蒔いて行ったのであります。

日当たりのよい土地を選んでは、ざくりざくりと穴を掘り、種を蒔くのであります。

オハイオ州の上流のインディアンの住む部落にも、野獣の潜む森影にも、彼の林檎の種は蒔かれました。そして、疲れるとゴロリと横になり、朝は小鳥よりも早く起き、仕事を始めていました。

いつの間にか彼は「林檎おじさん」と呼ばれて、白人にも、インディアンにも親しまれました。彼は、芽が出て育ってゆく林檎の木々を見回り、人々にその育て方を教え、更に新しく種を蒔くところを探して忙しく働きました。

夜は、それらの人達の炉端に座って神様の話をし、自分の聖書の何ページかを裂いて人々に渡しました。人里離れた開拓地の人達にとって、この何ページかの聖書は、どんなにか慰めの力になったことか。

５０年の間、誰に頼まれたのでもなく、ひたすら林檎のない土地に林檎の種を蒔き続けました。にも拘わらず、何故、ジョナサン・チャップマンが林檎を植えたのか、誰も知りませんでした。

彼のこの長年の功績に対して、勲章もなければ、銅像もありません。更に墓もありません。だだ、毎年、アメリカの田舎の春に、うす紅の花が霞のように匂い、秋に真紅な林檎の実が珠玉のように実るだけであります』と。

ここで、マルティン・ルターの言葉を引用します。即ち、『たとえ明日が世界の最後の日であっても、私は林檎の木を植える』というのでありますが、これはロータリーの思想と共通の境地にある言葉であります。

ロータリーの役割は、結果を求めず、ただひたすらに種を播くことであります。その結果、例えば、ＲＹＬＡで撒いた種が若者達の心に何時か芽生えるかも知れない。

それはすぐ芽生えるかも知れない。或いは１ヶ月後に芽生えるかも知れない。１年後かも知れない。１０年後かも知れない。或いは永久に芽生えないかも知れない。例え芽が出なくても、ただひたすらに種を蒔く。

そして、未来に夢を託す、これがロータリーの役割であります。私は、このことを第１回ＲＹＬＡのレポートに書き留めました。

このように、ロータリーは未来を夢見る思想であります。したがって、ロータリアンは理想主義者であるべきであります。

ロータリーの理想主義は、只ひたすらに種を播く、そしてロータリーをShareするのであります。これがロータリーであります。

「ロータリーにおける日本古来の倫理思想」
伊丹ロータリークラブ

深　川　純　一

日本のロータリーの先輩達は、１９２０年にロータリーを日本に導入するに際し、アメリカで生まれたロータリーの奉仕理論を基本的には踏襲しながらも、これを日本の社会に同化させることを試みています。

殊に、戦前のロータリアンの特徴としては、ロータリーを思想の世界で受け止めようとしたことが特徴的であります。一言で謂えば、ロータリーとは何かということを追求し、深層心理においてロータリーを理解したのであります。

神戸クラブの直木太一郎パストガバナーによりますと、『戦前の日本のロータリーは、ロータリーを外来思想の一つとして受け取っていた。外来思想と言えば、既に、仏教、儒教、キリスト教が入ってきてをり、明治維新後は、更に、ヨーロッパのデモクラシーやマルキシズムのような思想が入って来ていた。ロータリーもそれらの一つと考えられていた。

そのため、ロータリーの思想とは一体どのようなものか、外来思想や従来の日本古来の思想である国学や報徳教の思想などと比較して、何処が違うのか、そして何処が同じなのか、ということについて大いに研究が進められた。

結局、二宮尊徳翁の報徳教の教えが最も近いものであるとせられ、これが、昭和３年東京における太平洋地域大会 Regional Conference で、大阪ロータリークラブの土屋大夢の【ロータリー以前の偉大なロータリアン】と題して、二宮尊徳翁の思想の紹介となった』と言っておられます。

この太平洋地域大会で講演した土屋大夢（本名元作）は、杉村楚人冠の先任者でありまして、ジャーナリストであり、学者であり、思想家でりました。

彼は、【ロータリー以前の偉大なるロータリアン】という論文を英語で書いて発表したのでありますが、その内容は職業奉仕論でありました。即ち、二宮尊徳翁の『田畑を耕すに先立って心の田畑を耕せ』というように日本人の心にピタッと来るような奉仕哲学の解明をしたのは、戦前のロータリーにおける大きな功績でありました。そして、第３代目ガバナー大阪クラブの村田省蔵さんは、ロータリーの日本化というスローガンを掲げましたが、土屋大夢の英語の論文を日本語に翻訳して、昭和９年のＲＩ第７０地区大会でロータリーを日本の土壌に親しむように提唱したことを通じて、報徳教の思想は戦前のロータリアンの中に段々と浸透して行ったのであります。

なお、土屋大夢のこのテーマによる最初の講演は、１９２１年９月 Nash Ville RC でありました。したがって、これは東京クラブ創立の翌年であります。

土屋大夢は、この講演の冒頭で、二宮尊徳が箱根湯本で説いた「湯舟の教え」を引用しています。その講演の要旨を紹介しますと、土屋大夢は、１９２１年９月、ロータリークラブの会員としてテネシー州ナッ

シュビルを旅行中、地区のロータリークラブの例会に出席して暫く喋るように頼まれたのであります。そこで、当時イギリスとアメリカのごく限られた読書家の間でしか知られていなかった日本の農民哲学者二宮尊徳の話をしたのであります。それは、二宮尊徳が弟子と一緒に温泉に入っていた時、弟子に問いかけた話であります。即ち、「湯を手前に引くと大部分の湯は一旦は自分の方へ来るが、すぐ向こうへ逃げていく。反対に湯を押すと一旦は向こうへ逃げていくが、すぐ自分の方に帰ってくる。これは不思議な現象と思わないか。しかも、強く押せば押すほど湯は強く戻ってくる。これが自然の法則である。したがって、博愛とか正義とかいうことは、ほかでもない善意を他人に施すこと、即ち、湯を押し出すことであり、不道徳とか不正とかいうことは、湯を手前に引くことに喩えられるのだ」と説きました。そして更に次の喩え話を引用してこの教えを説きました。

「人間と動物の前足（手）を見るとその違いが解る。詰まり動物の前足（手）というのは、物を掴んだり引っ張ったりするように出来ているから、湯を手前に引くようには出来ているが、湯を向こうへ押しやるようには出来ていない。人間の手は、湯を手前に引くことも、向こうへ押しやることも出来るようになっている。したがって、（人間らしい）人間というのは、動物と同じであってはならない。他人のことを考えず自己の利益のためだけに努力する者は、顔は人間の顔をしていても、その心は動物と同じである」と説いたのであります。この話は、ナッシュビルのロータリアンを大変感動させたのであります。

そして、土屋大夢は、二宮尊徳の人生は、他人を助けるための自己犠牲であったと謂っています。したがって、彼の思想は、ロータリーの奉仕の視点から見れば、将にB.F.Collinsの自己犠牲の奉仕 "Service,Not self" であったと謂えます。彼は、常に推譲、分度、勤労、至誠の四つの教えを説いたのであります。

オックスフォード大学のエスリンカーペンター教授によれば、二宮尊徳は如何なる伝統からも拘束されず、彼自身の推譲の教えを説いた。彼が自らの宗教観について聞かれたときは、自分の宗教は、スプーン一杯の神道とスプーン半杯ずつの儒教と仏教を融合したもので、自然を観察してその法則を学び、理解すべきである、と言ったとのことであります。

彼にとっては、自然に存在するものは、それぞれ美点を有し、徳行をもってそれに報い、崇拝することであると教えたのであります。

また彼は、自然循環と反応を観察し、先ず他人に与えることの原則を説いたのであります。先ず他人のために働き、自分が何か欲するものがあれば、それは他人によって与えられるであろうと説いたのであります。

要するに、二宮尊徳は、「自然を観察し、自然の法則を理解せよ」と説いたのであります。以上は農民哲学者二宮尊徳の自己犠牲の奉仕 "Service,Not self" の人生哲学であります。

ところで、B.F.Collinsの自己犠牲の奉仕 "Service,Not self" に対立する思想としてArthur Frederic Sheldonの超我の奉仕 "Service above self" の思想の系譜に属する人に、日本では大丸の創業者下村彦右衛門があります。この彦右衛門の後継者の一人に昭和１２年の第６代目ガバナー大阪クラ

ブの里見純吉さんがいます。

そこで、大丸の社是「先義後利」の思想を紹介しておきます。

下村彦右衛門は、満１８才で家業を継ぎ、行商をして苦労しながら１７１７年に京都に呉服店「大文字屋」を開業しました。そして、次々に店舗を拡大して、大阪の心斎橋に出店しましたが、八文字屋甚右衛門との共同経営で出発した店は繁盛したのですが、やがて甚右衛門側の元締・善兵衛が遊興に耽り始めたので共同経営を解消し、入札でどちらかが経営権を握ることになりました。その時、落札できなかった側は近所に店を出さないという約束をしました。

彦右衛門は、僅かな金で落札できなければ、相手が悔しがるだろうと思って、かなりの高額で入札し、結局、彦右衛門が落札したのでありますが、それから間もなく、なんと甚右衛門が約束を破って直ぐ近くに出店したのであります。

周囲の者は、訴えようと息巻いたのでありますが、彦右衛門は動ずることなく静観していました。すると、やがて甚右衛門の店は閑古鳥が鳴き始めたのに対し、彦右衛門の店は大繁盛で、その差は歴然として来ました。そして、遂には彦右衛門は、甚右衛門の店までも買収してしまったのであります。

商売敵の邪魔をして嫌がらせをしても客がついてこなければどうにもならないので、「義」を貫いた彦右衛門の勝利に終わったのであります。自分の利益だけを追求しても客はついてきません。客は、どちらの店が良心的か、本能的に知っていたのであります。

この「先義後利」というのは、儒学の祖の一人荀子の栄辱篇の「先義而後利者栄」（義を先にして利を後にする者は栄える）という言葉をもとに定められたものであります。大丸では、今でも「先義後利」の社訓をことあるごと社員に伝えていると謂います。

また、昔、大丸の店員は、顧客の顔や好みのみならず家族構成まで覚え込み、新しい商品が入ると「あのお客さんにどうだろうか」と考えたと謂います。

また、朝から晩まで得意先で商談をして、風呂まで沸かして帰ってきた店員もいたと謂います。このように何時も客に「義」を尽くすことは、一見、商売とは結びつかないように思われますが、風呂まで沸かしてくれる店に親しみを覚えない客はいない筈であります。これは、職業奉仕の核にある顧客第一主義の極致であろうかと思うのであります。

あ と が き

今回の冊子も『再びニコニコ箱について』から『ロータリーあれこれ』まで入会後間もない会員にもバイブルのごとく解りやすく、且つ内容の濃い冊子に纏められています。深川先生の「ロータリー」を教示いただくことで、我々はその原点を知り、ロータリアンとしての行動指針として活用しなければなりません。それから、伊丹ロータリークラブ会員ほどこれほど恵まれた環境はないでしょう。というのは、例会で深川先生の情報を聞き逃してもこの冊子で復習できるのですから‥‥

最後になりましたが、深川先生には我々会員の為に湯水のごとく惜しみなく「ロータリー」をお教えいただき、感謝し切れません。また、発刊に際し竹中前年度会長、福武前年度幹事、事務局吉永さんのご尽力にお礼申し上げます。

2012年7月　　雑誌・ロータリー情報委員会